長野県松本市

ERIANA

エリ穴遺跡

－発掘調査報告書－

（遺構編 1・第 1 分冊）

2017.3

松本市教育委員会

例　言

1　本書は、平成25年から30年度のエリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業に係る、エリ穴遺跡発掘調査報告書の遺構編1・第1冊である。

2　エリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業のうち、平成26年度から平成28年度については、国庫補助事業として実施している。

3　発掘調査から概要報告書作成までの一連の作業は平成7・8年度国庫補助事業として実施し、現地における発掘調査は、平成7年4月21日から10月31日に実施した。概要報告書作成は、平成8年度に実施し、平成9年3月31日に「エリ穴遺跡―掘りだされた縄文時代晩期のムラ―（松本市文化財報告№27）」を刊行した。

4　報告書は4分冊で構成される。遺構編1・第1分冊（本書）は平成28年度に作成し、その他は平成30年度までに作成・刊行する計画である。膨大な遺物量のため整理作業が長期間にわたったこと、大部になるため単年度での刊行が難しかったことが、分冊化の理由である。

5　本書は、遺跡の概要と縄文時代の住居に関連する遺構と埋甕、それらからの出土土器を報告する。出土土器については、時期判断に必要な事項だけを記述し、全体的・総合的な評価は遺物編2・第4分冊に委ねる。遺構編2・第2分冊は、縄文時代の配石遺構、土坑・ピット、遺物廃棄場とそれらからの出土土器、平安時代以降の遺構・遺物を報告する予定である。遺物編1・第3分冊はエリ穴遺跡最大の特色である縄文時代の土製品を報告し、遺物編2は、縄文時代の土器、石器・石製品など遺物の総合的な報告を行い、各分冊を総括して、遺跡の評価を試みる予定である。遺物整理は進行中のため、石器や土製品は遺構出土品であっても、遺物編1・2で報告する。土器を含めた遺物の所見の確定は、遺物編2作成時になるため、その結果によっては、遺構編1・2で報告する遺構の評価が、若干変動する可能性もある。なお、抄録は遺物編2に掲載する。

6　平成8年度に刊行した概要報告書に記載された所見と、本書の所見が異なる部分が若干あるが、報告書をもって最終所見とする。

7　本書の執筆は、第Ⅰ章第1から第3節4を事務局、第Ⅰ章第3節5の⑷を原田健司、それ以外は発掘担当者の所見をもとに百瀬長秀が担当した。編集は直井雅尚・三村・百瀬が行ない、直井が総括した。

8　本書作成にあたっての作業分担は、次のとおりである。

遺物洗浄、注記：内田和子、佐々木正子、中澤温子

土器接合：天野雅代、市川二三夫、白鳥文彦、竹平悦子、中澤温子、前沢里江、宮本章江

土器実測、トレース：井内南奈香、石川真理子、柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、村山牧枝、百瀬長秀、八板千佳

（縄文中期土器の一部の実測を㈱シン技術コンサルに、同後期から晩期土器の一部のトレースを㈱ラングに委託）

拓本：竹平悦子、安田津由紀

遺構図調整、トレース：荒井留美子

一覧表作成：荒井留美子

遺構写真：竹原　学、竹内靖長、澤柳秀利、近藤　潔、長畦和正、荒木　龍

遺物写真：宮嶋洋一

総括・編集：直井雅尚、三村竜一、百瀬長秀

9　本書作成に際して、原田昌幸氏、柳澤　亮氏から、指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。

10　縄文時代中期の遺構・遺物は、長野県史で提示された年代観 [寺内・野村・三上 1988] に従った。

11　第Ⅲ章図 10・11 は、掲載許可を得て、長野県史 [長野県史刊行会 1983] から転載した。

12　掲載の遺構図の縮尺は、配置図は 1:80、個別の大規模な実測図は 1:60、個別の炉などの小規模な実測図は 1:30 を原則としている。

13　土層図や遺構断面図の土質（色調・混入物）は、発掘所見に基づき、以下の通りに記号化し、表示したが、その標記は、エリ穴遺跡に隣接する小池遺跡・一ツ家遺跡の発掘調査報告書 [竹原　学他 1997] の基準を適用した。

14　土層の表記

土層図や遺構断面図の土質 (色調・混入物) は、発掘所見に基づき、以下の通りに記号化して表示した。

[色調]　1 褐色　2 暗褐色　3 黒褐色　4 明褐色　5 赤褐色　6 黄褐色　7 茶褐色
8 灰褐色　9 橙褐色　10 灰色　11 暗灰色　12 黒灰色　13 赤灰色　14 黄灰色
15 青灰色　16 黄色　17 暗黄褐色　18 暗茶褐色　19 黒色　20 焼土　21 砂
22 砂礫　23 緑灰色

[混入物]　A 小礫　B 礫　C 焼土粒　D 焼土塊　E 炭化物粒　F 炭化物塊
G 炭化材　H 黄色土粒　I 黄褐色土粒　J 橙褐色土粒　K 茶褐色土粒　L 黄色土塊
M 黄褐色土塊　N 橙褐色土塊　O 茶褐色土塊　P 砂粒　Q 黒色土粒　R 黒色土塊
S 暗褐色土粒　T 暗褐色土塊　U 灰色土粒　V 灰色土塊　W 赤褐色土粒　X 赤褐色土塊

[混入量]　a 少量　b 中量　c 多量

15　土器の表現

[剥落]　貼り付け部分の剥落痕跡はスクリーンで表示したが、図上で剥落が読み取れる場合は、スクリーントーンを省略した。

[胎土]　特記すべき胎土を持つ土器については、以下のように区分して断面図中に示した。

無 : 標準的 (在地的) 胎土　△ : 標準的ながら、岩石・鉱物が少ない胎土
◉ : 標準的ながら岩石・鉱物が著しく多い胎土　◎ : ローリングを受けたガラス質石英を多含する胎土
▲ : 後期縁帯文土器に類似した胎土　◆ : 晩期末条痕文系土器に類似した胎土
■ : その他、違和感のある胎土

[塗彩]　赤色塗彩がある場合は、断面図外上端の塗付された面に「◀」を付した。器面に黒色塗彩がある場合は、断面図外上端の塗付された面に「◁」を付した。顕著な 2 次焼成が認められる場合は、断面図外の上端外面側 (場合によっては内面側) に「☆」を付した。

[個体番号]　遺構出土土器は「遺構の種別・遺構の番号」-「個体番号」の順に表記した。遺構の記号は、住居址 ・J、竪穴 ・T、炉 ・R、埋甕 ・U、配石 ・S とした。遺構関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器は「遺構種別・遺構番号」-「G・個体番号」の順に表記し、住居内施設出土は通し番号に組入れた。以下に具体例をあげる。

住居址 :J1-16(1 号住居 16)　竪穴 :T3-6(竪穴 3-6)　炉 :R4-12(炉 4-12)　埋甕 :U6-3(埋甕 6-3)
配石 :S15-22(配石 15-22)　遺構関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ :J1・G12(1 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ－ 12)

[縮尺]　実測図は 1:4、拓本は 1:3、土器写真は約 1:3 を原則とした。

[表記]　土器文様の文字表記は、「文様」を使用した。

16 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館 (〒 390-0823　長野県松本市大字中山 3738-1　℡ 0263-86-4710　Fax 0263-86-9189) に収蔵している。

目　次

例言
目次
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 2
　第３節　調査方法 …… 3
　　１　試掘調査 …… 3
　　２　地区の設定 …… 3
　　３　発掘 …… 3
　　４　記録 …… 4
　　５　遺物 …… 4
第Ⅱ章　遺跡の概況 …… 7
　第１節　位置・地形・地質 …… 7
　第２節　土層 …… 10
　　１　標準土層と土層分布 …… 10
　　２　南微高地の標準土層 …… 10
　　３　谷状低地南縁の土層 …… 11
　　４　谷状低地北半の土層 …… 11
　　５　土層図と土質の表記 …… 17
　第３節　地域史の中のエリ穴遺跡 …… 17
　　１　田川流域（小地域） …… 17
　　２　松本盆地（中地域） …… 18
　　３　上ノ段式・中ノ沢式・佐野式分布圏（大地域） …… 18
第Ⅲ章　これまでの調査・研究 …… 21
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物出土状況 …… 57
　第１節　概観 …… 57
　第２節　礫群 …… 57
　第３節　遺構 …… 58
　　１　住居・竪穴・炉 …… 58
　　２　埋甕 …… 222
写真図版

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査の経緯

エリ穴遺跡は、松本市大字内田３０１番地他に所在する縄文時代～平安時代の遺跡である。内田圃場整備組合は、平成８年着工事業としてエリ穴遺跡を含む耕作地を対象にした松本市大字内田に内田地区団体営土地改良総合整備事業を計画した。そこで、松本市教育委員会（以下「市教委」という。）は長野県教育委員会文化課ほかの関係部署を混え、平成６年度以降、遺跡の保護協議を行ない、地下への掘削で埋蔵文化財が破壊される範囲を対象とした発掘調査を実施し、記録保存をはかることにした。

発掘調査から報告書作成の一連の作業は、内田圃場整備組合から松本市が委託を受け、平成７・８年度国庫補助事業として市教委が行なうこととし、平成７年度に発掘調査を実施、平成８年度に一部の成果のみを掲載した概要報告書を刊行した。概要報告にとどめざるを得なかった理由は、整理用テンバコ４００箱以上に達した膨大な出土遺物の整理作業に係る費用、作業スペース、人員確保などができなかったからである。

概要報告書の刊行後、長らく整理作業を実施する機会を得られなかったが、継続的に使用できる作業スペースと人員確保に一定の目途がつき、数年間を要する整理作業の実施環境が整ったことなどから、平成25年からエリ穴事業遺物整理・報告書刊行事業を開始した。平成26年度からは国庫補助事業として実施し、30年度に完了する計画で進めている。

エリ穴事業遺物整理・報告書刊行事業に関わる文書記録等は以下のとおりである。

〈平成25年〉
３月７日　「平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」
５月15日　「平成25年度文化財国庫補助金交付決定について」(25教文第1-27号)

〈平成26年〉
２月７日　「平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」
３月31日　「平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書の提出について」
４月１日　「市内遺跡発掘調査等事業費補助について」(26教文第1-34号)

〈平成27年〉
２月９日　「平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」
４月９日　「市内遺跡発掘調査等事業費補助について」(27教文第1-39号)
12月１日　「平成27年度埋蔵文化財緊急調査費補助金に係る計画変更承認申請書の提出について」

〈平成28年〉
２月１日　「市内遺跡発掘調査等事業の計画変更及び補助金額の変更について」(27教文第1-39号)
２月２日　「平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」
３月31日　「平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書の提出について」(松教文72号)
４月１日　「市内遺跡発掘調査等事業費補助について」(28教文第1-25号)
12月２日　「平成28年度埋蔵文化財緊急調査費補助金に係る計画変更承認申請書の提出について」(松教文458号)

第２節　調査体制

平成７年度（発掘調査）

調査団長：守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者：竹原　学、竹内靖長、澤柳秀利、近藤　潔、長畦和正、荒木　龍

調　査　員：佐々木　明、竹原久子、三村　肇

発掘協力者：青木節子、青木雅志、浅井信興、安達桂祐、足立陽子、荒井留美子、有賀千佳、飯田三男
石井脩二、石川幸義、石村　睦、市場茂男、市橋葉子、井上牧子、今村友紀、上兼昭一
上兼操子、臼井秀明、内川初雄、大岩明子、大崎悦正、大塚袈裟六、大塚剛太、大月八十喜
大中郁子、尾形　寛、鬼塚夏海、小原きみえ、折橋裕子、柿本拓也、郭　震玲、加島泰祐
鹿取　功、上條尚美、亀井めぐみ、川地昌秀、神田栄次、北澤達二、黒崎　務、小池敏実
河野清司、小島茂富、小幡幸男、小林　隆、小林秀子、小林みつる、小松幸美、小松正子
近藤高史、斎藤政雄、酒井奈津子、酒井　良、坂入慶太、坂口ふみ代、芝田とり子、鈴木幸子
鷲見昇司、高橋登喜雄、高橋俊之、高橋慈子、田多井　亘、田場希和子、寺島　実、寺本尚哉
遠山享史、十河圭子、冨岡真弓、内藤かおり、中川利正、長沢多聞、中島未果、中村恵子
中村敬子、中村　剛、中村安雄、中山自子、布谷勇人、野中めぐみ、萩本信吾、橋田若菜
畑　茂、平林　秀幸、林　武佐、浜辺麻衣、藤本利子、布山　洋、細田貞子、堀　久士
堀江攝二、前澤保亀、丸山喜和子、丸山久司、丸山よし子、道浦久美子、三村けさ江
宮内洋平、三宅　剛、三宅康司、宮坂ふみ、宮崎　良、宮部元子、三代沢二三恵
MIN　AUNG　THWE、村山牧枝、毛利崇廣、裵　国成、百瀬正彦、百瀬美江子、百瀬義友
両角民子、横山　久、吉田　勝、米山禎興、李　若風、渡辺大輔

平成７年度（整理作業）

整理協力者：赤羽包子、石合英子、内田和子、岡嶋八重子、内藤かおり、林　和子、村松恵美子
望月佳代子、百瀬二三子、矢崎寛子

平成 25 年度（整理作業）

調査担当者：竹原　学、百瀬長秀

整理協力者：荒井留美子、市川二三夫、内田和子、柏原佳子、中澤温子、前澤里江、八板千佳

平成 26 年度（整理作業）

調査担当者：熊谷博志、百瀬長秀

調　査　員：宮嶋洋一

整理協力者：天野雅代、荒井留美子、市川二三夫、柏原佳子、白鳥文彦、竹内直美、白鳥文彦、中澤温子
前澤里江、宮本章江

平成 27 年度（整理作業）

調査担当者：三村竜一、百瀬長秀

整理協力者：天野雅代、市川二三夫、柏原佳子、前澤里江、宮本章江

平成 28 年度（整理作業）

調査担当者：三村竜一、百瀬長秀

整理協力者：天野雅代、市川二三夫、柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、前澤里江、宮本章江

事　務　局

〈平成７年度〉

松本市教育委員会　岩渕世紀（文化課長）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

㈶松本市教育文化振興財団

事務局　大池　光（事務局長）、太田陽啓（局次長）、櫻井荘作（次長補佐）

考古博物館　熊谷康治（館長）、松澤憲一（主査）、古幡昌史（主任）、秋山桂子（嘱託）

〈平成25～28年度〉

松本市教育委員会　伊佐治裕子（課長　～H26.3）、内城秀典（同　H26.4～H28.3）、木下　守（同　H28.4～）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、竹原　学（課長補佐・史跡整備担当係長・埋蔵文化財担当係長）、竹内靖長（課長補佐・埋蔵文化財担当係長　H26.4～H28.3）、三村竜一（課長補佐・埋蔵文化財担当係長・主査）、櫻井　了（主査）、百瀬耕司（主任　～H26.3）、福沢佳典（主事　H28.4～）石井佑樹（主事　H26.4～H28.3）、柳澤希歩（嘱託　～H26.3）、吉見寿美恵（同　H26.4～）

調査指導者（順不同、敬称省略）

稲野彰子、稲野裕介、上野修一、桐原　健、小林達雄、小林康男、設楽博己、島田哲男、新谷和孝、鈴木加津子、鈴木保彦、樋口昇一、平林彰、宮尾　亨、宮下健司、綿田弘実

第３節　調査方法

１　試掘調査

本調査に資するため、平成６年10月28日から11月３日にかけて、遺構・遺物の分布状況、堆積状況等を把握するのを目的として、試掘調査を実施した。調査時の地目は水田・畑地で、本遺跡範囲にかかる事業対象地内全域に、長さ4m～25m、幅60cm程のトレンチを57カ所設定した。総延長は360mである。耕作土の除去は建設用機械を用い、人力で壁面・底面を精査し、遺構・遺物の検出、土層の観察を行なった。

その結果、用地の西端部で縄文時代と平安時代の竪穴住居址等を確認し、それらの遺構埋土内や用地の東端部を中心として、縄文土器等の各種遺物を得た。今回の本調査範囲は、多数の遺物が出土した用地の東端部にあたる。

２　地区の設定

試掘調査や藤澤宗平ほかによって昭和42年～45年に実施された発掘調査等の成果に基づき、遺構・遺物の存在が予想される地点を調査対象地とした。掘削土の仮置場の確保や堆積状況調査の制約等から、対象地に任意に３カ所の区画を設定し、調査を開始した順に、A区、B区、C区と名付けた。調査面積は合計5,538㎡である。検出面にレベル差はあったが、明瞭な層位の違いは把握できなかった為、３地区共に同一の検出面で縄文時代から中世の遺構を調査した。

３　発掘

地表から遺構検出面までの土の除去・埋戻しは、建設用重機を使用し、その他の作業は人力で実施した。竪穴住居址等の大形の遺構は、堆積状況等の観察用の畦を残して掘下げ、土層断面を観察・記録した後に除去し、完掘した。土坑・ピット等小形の遺構は、まず半分を掘下げて、同様に堆積状況等を観察・記録し、

後に残りの半分を掘下げた。廃棄場を含む遺物包含層や、B区・C区の溝は、調査地全体に設定した単一の平面座標に依拠する3×3mの平面方形区画を設定し、それぞれの1区画をグリット1単位として掘り下げた。このグリッドは記録用の方眼と一致させた。各グリットの名称は、北東隅の座標値とした。遺物はグリッド単位で取り上げ、遺構検出後は遺構単位で取り上げた。

4 記録

個々の遺構名は、その種類毎に、検出した順に第1号から順に番号を付した。

平面位置の記録は、簡易遣り方測量で行った。任意に設置した平面原点（NSO・EWO）を基準として調査地全体を3×3mの方眼で覆い、その交点に座標点となる釘を打設した。平面位置は原点からの方向と距離を組合せた座標値（NS＝X、EW＝Y）で計測し、記録した。標高については、任意に設定した標高基準点との比高を計測し、記録した。

各遺構の測量図は、すべて手実測で実施し、専用用紙に鉛筆等で記録した。堆積土等の記録は、色調、混入物とその量等を観察した。その記録は原則的に記号化し測量図に書き入れ、必要に応じて写真撮影を行った。発掘時の土質記録は、色調・混入物・混入量を観察し、記号化して表示した。その基準は隣接する小池・一ツ家遺跡を踏襲した。報告に当たっては、記号記録以外の発掘時の所見もそのまま掲載した。記号の具体的な説明は例言に掲載した。

遺構の写真記録は35mmカメラを用いて、カラーフィルムと白黒フィルムで撮影した。

遺構図原図、写真フィルムは専用のケースに収納し、管理・保管している。遺構図原図は整理作業の過程で、必要に応じて電子化した。写真フィルムは専用のアルバムに収納し管理、整理作業の過程で電子化した。

5 遺物

(1) 水洗、注記

遺構別・地点別に取り上げられた遺物は、松本市考古博物館内に搬入し、水道水で水洗し、乾燥させた。この時点で識別できた石器・石製品と土製品を回収し、注記の前にそれぞれの整理工程に載せた。乾燥が済んだ土器破片は、遺構別・地点別に取り上げた袋単位に戻し、袋に通し番号を与え、その袋ごとに重量を計量した。土器の注記に当たっては、「注記番号表」(注記台帳)を作成し、袋単位に、遺構・地点(グリッド)名、取り上げ番号、取り上げ日付、重量を記載した。次に、袋単位ごとに細片以外は自動遺物注記機を使用して全点注記を行なった。注記内容は「遺跡名・地点名」、「遺構名」又は「グリッド名」、「取上げ番号」、「袋番号」としたが、作業途中で混乱が生じ、遺構名やグリッド名を省いた土器がでた。土器の注記には「注記番号表」と対照させないと読み解けないものが含まれる。水洗・注記終了土器はいったん収納され、10年以上の凍結を経て整理工程に載せられた。

(2) 土器の整理

土器の接合・石膏補強のスペースは、コンテナ10箱程度の土器を同時に広げるキャパシティーがあったので、住居1軒とそれがかかるグリッド、及びそのグリッドにある土坑などの小規模遺構出土の土器を、同時に接合することができた。これがいわば1単位の接合作業で、住居とその関連グリッド、廃棄場のグリッド、住居のないグリッドの順に接合作業を行った。1単位の接合作業の終了時点で、仕分けと量的記録の作成を行なった。口縁部と底部の全点、有文体部破片と無文だが検討すべき破片を摘出し、時期別に分類して、口縁部と底部で数えた個体数と重量(10g単位)を計量した。これが時期別個体数・重量表で、遺構別、グリッド別に作成した。次に、摘出した土器の中から、記録(実測・拓本・写真)を取る「要記録土器」を選抜し、

選抜から漏れた「参考用土器」、摘出作業の段階で漏れた「その他の土器（無文の体部破片）」の三者に区分して、別々に収納した。

時期別個体数・重量表で用いた時期区分は、土器型式２つ程度をひとまとめにした。時期を細別するほど、どこに含めたらよいか決められない個体が増加するのは必然で、大まかな全体像を把握するには、この程度の区分が適当と判断したからだ。判定に不安のある個体も、できる限りどこかの時期にふくめ、時期不明の欄に入れるのは極力避けた。晩期前葉～中葉の土器編年は未確定部分が残るが、未確定の個体もどの時期かに加えて時期別重量をカウントした。時期判定の精度には少々不安が残るのをお含み頂きたい。

接合作業と並行して土器の記録化（実測・拓本）を行った。住居・埋甕・配石出土土器は極力記録個体を増やし、帰属時期決定のデータとした。土坑出土土器は破片が小さいと時期決定の根拠になりにくい。特に時期の異なる小破片が同一土坑から出土した場合は、時期決定は絶望的である。この点を考慮し、帰属時期が決められる土坑に限って、記録を作成することとした。廃棄場出土土器は膨大で記録は取りきれない。廃棄場は地点ごとにそれぞれ特徴があるので、それを示せるように選択して記録した。全体像は示せたと思われるが、異系統の土器や、特殊な土器などは十分に示しきれなかった。それ以外、すなわち居住域の包含層出土土器は一部分しか記録できていない。図化資料の中から全体像がわかる個体を選別して、写真記録を作成した。

実測図・拓影、時期別個体数・重量表、写真を遺物の記録として報告する。

(3) 土製品の整理

遺物水洗・注記の段階で識別できた土製品は、注記をせずに回取した。土偶、耳飾、その他の土製品に区分して個体番号を与え、種類別に台帳を作成した。土製品には個体番号のみを注記し、台帳には出土地点・状況の情報と遺物の情報を記載した。耳飾など土製品で世に知られたエリ穴遺跡なので、遺物整理は土製品が優先され、原則全点を報告書に掲載する方向で、接合・実測が進められた。当初から台帳に記載された個体の実測がほぼ終了する頃から土器の接合が始まり、水洗・注記時に識別できなかった土製品が、土器の中から摘出された。また、松本深志高校で管理していた以前の調査で発見された土製品が移管された。それらは逐次個体番号を与えて台帳に追加登録し、接合のうえ、選択的に実測した。また、明治大学黒耀石研究センターのご好意で、土製品に塗布された赤色顔料の材質分析が多数の個体について実施できることになった。土製品実測図の表現方法は、土器の実測図を考慮せずに先行して進展した。土器実測が始まってからそれに気づいたが、書き換える時間はなく、両者は表現方法が異なったままとなった。土製品の分析が進むにつれて、耳飾の類型化と編年が明確になり、全点を実測・報告する必要性は無くなった。個別性の強い土偶や土製品は、原則全点を報告する方針を踏襲し、耳飾や類型化可能な土製品は選択的に報告することに変更した。実測個体の中から優品を選択して写真記録を作成した。

実測図、写真を遺物記録として掲載し、種類別台帳はデータ化の付録として報告する。

(4) 石器・石製品の整理

発掘調査終了後まもなく、器種別に仕分けがされた。その仕分けをもとに、個体通し番号を与えて台帳に登録し、遺物の計測・観察を行なった。また、藤澤宗平氏と松本深志高校が行なった発掘調査で発見された石器・石製品の一部が移管され、これにも個体番号を追加して、同一台帳に登録した。

すべての定型的な石器・石製品については、個体番号と出土地点・状況の情報を記載したチャック袋に１点ずつ入れて管理することにした。台帳には袋に記載した情報のほか、遺物の情報を記載した。剥片は遺構別・地点別に取上げた袋に通し番号を与えた。その後、台帳に石材と点数、重量のデータを記載した。

実測は遺構出土品を主とし、完形または全形をうかがえるものや特殊なものを中心に選定して実施した。実測する各器種の点数は、器種ごとの全点数の比率をもとに決めた。石製品の一部を除き、実測作業は民間会社(株式会社ラング：846点、株式会社パリノ・サーヴェイ：360点)に業務委託した。また、剥片が多量に出土していることから、石器の剥離技術と空間分布を分析する目的で接合を試みた。時間的制約から、接合作業は大形石器と大形石器に使われている石材の剥片のみに対象を絞った。その際、接合対象の遺物すべてに個体番号を注記して実施した。

実測図、写真、種類別台帳(データ)、各種組成一覧表・分布グラフを遺物記録として報告する。

(5) 有機質遺物の整理

遺物水洗・注記の段階で識別して回収し、注記は行なわず、ポリ袋に入れて管理した。獣骨がほとんどで、微量の木材は乾燥してしまい、報告に耐えない。獣骨の整理と鑑定は鎌倉市教育委員会の吉井理氏に依頼し、玉稿を掲載した。

第Ⅱ章　遺跡の概況

第１節　位置・地形・地質　［図１］［写真図版１］

エリ穴遺跡は松本市内田に所在し、北緯 36° 09′ 50″、東経 137° 59′ 00″付近に位置する。標高は 685m 前後を計る。重要文化財に指定された馬場家住宅周辺の宅地・畑地と、その西側の畑地が遺跡範囲と考えられ、東西 400m、南北 200m、8ha 弱の広がりが推定されている。

フォッサマグナ（糸魚川―静岡構造線）の東縁を画する筑摩山地は、それと並行して南北に伸び、断層の底に向かって東西方向の扇状地が形成される。巨大な断層を埋めて成立した松本盆地も南北に長く、主要河川も南流または北流する。筑摩山地の一角を占める鉢伏山の西麓の扇状地は、西流する多数の小河川によって形成され、その水を全て集めた田川が扇状地末端を北流する。エリ穴遺跡は田川支流の舟沢川（遺跡北側）と塩沢川（遺跡南側）が形成した扇状地の扇頂に近い扇央に位置する。舟沢川の現流路は遺跡からやや離れて遺跡の北側を開析、塩沢川は遺跡に隣接して南側を開析し、いずれもほぼ西流して東西方向の浅く小さな谷を形成する。遺跡と河床との比高は 1m 程度しかない。舟沢川のさらに北寄りには、より大きな支流の牛伏川がやや大きな扇状地を形成して北西に流下する。牛伏川と並行して牛伏寺断層（活断層）が存在することが知られており、その活動はエリ穴遺跡周辺に大きな影響を与えただろう。遺跡内には特別な痕跡は発見できなかったが、舟沢川の流路の大きな変化は、断層の活動に起因するのではないかと推測する。

遺跡の南北は塩沢川・舟沢川で画されるが、流路は直線的なので、南北方向の起伏はあまりない。遺跡の東側、馬場家住宅西側の道路付近にやや急な傾斜面が存在し、その西側・東側は緩傾斜となる。宅地に関わった切盛の可能性もあるが、扇状地上の自然の起伏かと推測する。かつてはこの急斜面に近づくほど散布遺物は疎となり、遺跡の東限かと推測した。遺跡の中心は単調な西向きの緩斜面で、西限を地形で画することはできない。遺跡範囲の西寄りは縄文時代中期の集落域だが、小池遺跡・一ツ家遺跡と隣接して一体化している。

エリ穴遺跡は南北の小河川と深く関わるが、とりわけ北側の舟沢川の影響を強く受ける。現在の舟沢川は遺跡には隣接しないが、発掘調査の結果、舟沢川がかつて形成した谷状の低地が遺跡の一角に存在することが判明した。以後、「谷状低地」と呼ぶが、これのお蔭で単調な微地形に強いアクセントが付く。縄文時代のエリ穴集落の中心地は谷状低地の南側で、そこは等高線を追っても尾根筋のようには見えないが、低地側から見れば尾根状の微高地になる。便宜的に「南微高地」と呼ばせてもらう。谷状低地の北側は中世～近世の集落域となるが、南側同様の微高地で、「北微高地」と呼びたい。

谷状低地の幅は 15m 前後あり、居住域との比高は現在では 1m に満たない。中世には流路１がその中央を流れていたが、それ以外には明瞭な流水の痕跡は発見されなかった。扇状地上の河川が流路を変更するのは珍しくないだろう。舟沢川が形成した谷が起源で、その時期は決めようが無いものの、成立には何十万年もの時間がかかったに違いない。舟沢川の流路がより北方に移った後は徐々に埋没し、緩やかな斜面の谷状の低地に変わったのだろう。通常流水は無いが降雨時には雨水が集まって低湿な状態になり、厚い黒色土が堆積した。谷底との比高が 1m も無いくらいに堆積が進んだ時点で、谷の斜面縁辺が尾根状微高地の居住域の一角に取り込まれ、竪穴住居が構築された。中でも３号、16 号、17 号、34 号住居は、谷状低地斜面を埋めるⅢ層黒色土中に壁や床の一部を構築したのだろう。住居廃絶後、降雨などによって斜面側は流失或いは崩落し、尾根状微高地側の施設だけが残され、発見されたと考える。Ⅲ層中の遺構検出は困難で、黒色土直下のⅣ層上面でこれらを発見したのだが、外見上は谷に切られるように見え、谷状低地の方が新しいとの調査所見が残された。だが、谷状低地の形成は縄文時代よりはるかに古かったはずで、縄文人はその斜面を

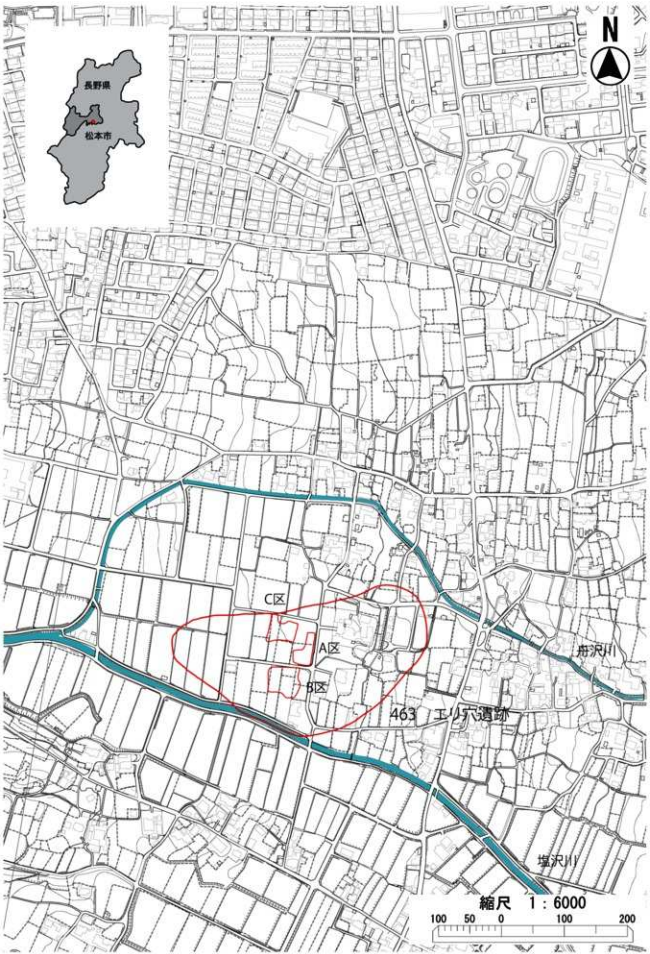


図1　調査地の位置

同　写真

利用して居住し、住居放棄後の裸地が急速に侵食されて、自然の斜面に帰ったと考えるべきだろう。

背後の鉢伏山塊起源の亜角礫・円礫を交えた、火山灰起源のローム質の土壌が、扇状地堆積物として遺跡の基盤となる。いわゆる再堆積ロームである。その表面が土壌化した暗褐色土や黒褐色土が生活基盤となる。礫の量は非常に多い。谷状低地は基盤の再堆積ローム層を削り込んでおり、ロームよりは粒度の粗い砂質土で埋まり、地表近くはそれが土壌化した黒褐色土となる。

第2節　土層

1　標準土層と土層分布　[図2～6]

重機を用いて表土を除去する調査では、地表からの土層を観察できる場所が限定的になりがちで、観察地点相互の比較ができない場合が多い。エリ穴遺跡もその例で、観察・記録化ができたのは南微高地上の36号住居の東側、すなわち「S0W6」～「S3W6」グリッドの東壁のみであった。ここは調査範囲の東限のため、最後まで観察可能な壁が残された。幸運なことに、南微高地の堆積だけでなく、部分的ながら谷状低地の堆積もここで観察できた。他の地点との比較はできないが、南微高地の堆積状況が地点によって大きく異なることは無かったので、この「S0W6東壁土層」を標準土層と考えて差し支えないだろう。谷状低地では地点ごとに堆積状況の相違がありそうだが、他に記録は無いので、谷状低地の土層の一例として理解されたい。

2　南微高地の標準土層

S0W6東壁土層で観察された南微高地の堆積は、上から順に、現表土、第Ⅰ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層で、いずれも安定的に存在する。扇状地堆積物の表面なのでどの層も淘汰が悪く、大小の礫を多く含み、粒度の異なる砂～粘土が渾然と堆積している。

現表土は畑の耕作土で、養蚕が盛んだった頃は桑が栽培され、その後は畑となり、水田にされたことは無さそうだ。桑の植え替えに伴う抜根で、第Ⅲ層以下は傷められた可能性がある。

第Ⅰ層は暗褐色土で、拳大の礫や小礫を非常に多く含む。居住域の東側に広がるが、西側には見られない。遺物量は多い。

第Ⅲ層は黒褐色土で、拳大の礫や小礫、炭化物粒を非常に多く含む。居住域全体だけでなく、谷状低地全体にも広がり、遺跡全体を覆う。谷状低地の窪み上部を埋めるので低地では厚く、色も黒いが、南微高地南側ではかなり薄くなる。縄文後期～晩期の包含層で遺物を多量に含む。礫群も第Ⅲ層中に存在し、配石遺構の基底もⅢ層中にある。S0W6東壁土層にかかって地表面からの堆積状況が把握できた36号住居の構築状況は、第Ⅲ層上面で掘り方が検出でき、第Ⅲ層を掘り込み、Ⅳ層上面付近に床が構築された。縄文後期以降の遺構はほぼ同様であったと思われ、条件さえ良ければ第Ⅲ層上面で遺構が検出できるはずだが、遺構の多くは第Ⅳ層上面まで下げないと検出できなかった。掘り方底面は第Ⅳ層にようやく届く程度なので、その底面近くでようやく検出できた、というのが実情である。

第Ⅳ層は暗褐色土で、遺跡全体では拳大の礫や小礫を非常に多く含むが、S0W6東壁土層に限っては礫が少なく砂質である。第Ⅴ層上部の土壌化が進んだ部分だと言えるだろう。南微高地全体に広がり、東側ほど厚い。縄文後期以降の遺構の掘り方は第Ⅳ層上面で検出できる。縄文中期の遺構も同様だが、第Ⅳ層中まで下げないと検出できない遺構もありそうだ。第Ⅳ層が厚い南微高地東側では、縄文中期の遺構が未検出のままである。

第Ⅴ層は黄褐色土で、拳大の礫や小礫を非常に多く含む。土壌化していない扇状地堆積物で、色調は再堆積ロームに由来し、遺跡の基盤といえよう。さらに50cmほど掘り下げると、第Ⅵ層の礫層に到達する。

3　谷状低地南縁の土層

SOW6 東壁土層で観察された谷状低地南縁の堆積は、上から順に、現表土、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅲ'層、第Ⅳ層、第Ⅵ層、第Ⅴ層である。

第Ⅰ層は南微高地と同一である。

第Ⅱ層は流路1が運んだ砂礫層で、第Ⅲ層を切り込み、流路内にのみ堆積する部分的な土層である。

第Ⅲ層は南微高地の第Ⅲ層と連続している。湿地のためか南微高地より黒味が強く、低地を埋めるためかなり厚い。縄文後期～晩期の包含層で遺物と礫群を含む。谷状低地の縁辺、南微高地との境界付近は縄文後期後葉以降、廃棄場に利用されて遺物量が断然多く、礫群も厚みがある。谷状低地中央に寄ると、遺物量は激減する。谷状低地に存在する遺構の一部は、第Ⅲ層下部で礫群を除去して検出したという調査所見だが、その下の第Ⅲ'層で検出したとするのが正しいかもしれない。

第Ⅲ'層は第Ⅲ層と同質でその下部にあたる。第Ⅲ層より明るい色調なのは、湿地の影響による土壌化の程度の差だと思われる。縄文後期～晩期の包含層で遺物と礫群を含む。遺物の取り上げは第Ⅲ層と第Ⅲ'層を区別できずに行なったので、両者の間に時間差が認められるかどうかは不明である。

第Ⅳ層は南微高地上の第Ⅳ層と同質だが、南微高地上とは直接は繋がらない。谷状低地の斜面で分断されたのは、そこが崩落し易かったためかと思われる。炉1や1号住居は第Ⅳ層上面で検出できた。

第Ⅵ層は黄褐色の砂質土で、小礫をある程度含む。第Ⅴ層を切り込み、谷状低地の基底に堆積するので、かつての流路内の堆積物かもしれない。

第Ⅴ層は南微高地の第Ⅴ層とつながり、同一である。

4　谷状低地北半の土層

谷状低地の北半の土層堆積状況は単純では無さそうだが、遺構・遺物とも希薄なため、詳細な記録・所見は残っていない。標準的な堆積状況は上から順に、現表土、第Ⅰ層、砂礫層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅵ層、第Ⅴ層である。

第Ⅰ層は谷状低地南半と連続し、同一の土層である。

砂礫層は舟沢川の旧流路を埋めており、B区北半に広く、厚く堆積する。35号住居以北では、下層の第Ⅲ層～第Ⅵ層を削り取っており、舟沢川の本流の跡だと考えてよいだろう。この砂礫層の上に17世紀以降の近世の遺構が構築される。

第Ⅲ層は谷状低地南半と連続し、同一の土層である。南側ほど厚く、35号住居付近では上層の砂礫層に削られてかなり薄くなる。削られる前はかなりの厚みを持っていたと推測され、縄文中期～晩期までの遺物を含む。35号住居の掘り方は第Ⅲ層中にわずかながら認められた。南微高地では、第Ⅲ層は後期以降の包含層で、中期の遺構は第Ⅳ層から掘り込まれていた。南微高地とは状況が異なるので、双方の第Ⅲ層は完全に一致するとは言えないことになる。

第Ⅳ層は谷状低地南半とは連続せず、途中で途切れている。土質が一致するので、同一土層だと判断した。35号住居の床面は、第Ⅳ層上面で検出されたので、南微高地の第Ⅳ層とは状況が異なり、第Ⅳ層も双方が完全に一致するとは言えないだろう。

第Ⅵ層は谷状低地南半の第Ⅵ層とつながり、同一である。

第Ⅴ層も谷状低地南半の第Ⅴ層とつながり、同一である。

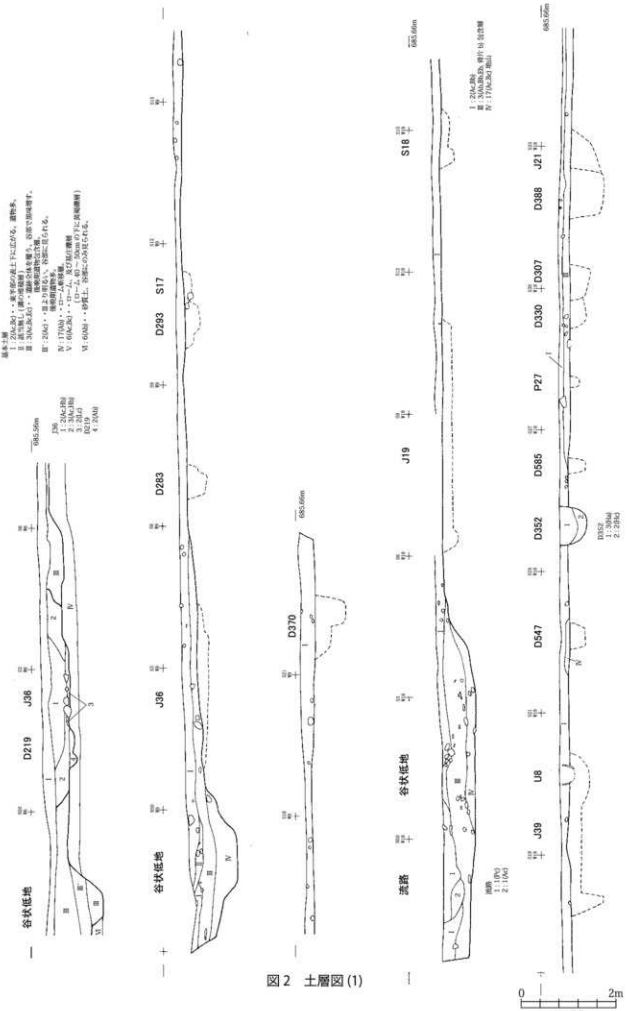

谷状低地
D219
J36
685.56m
J36
D283
D293
S17
D370
S18
J19
流路
J39
U8
D547
D352
D585
P27
D330
D307
D388
J21
0
2m
1：80

図2　土層図(1)

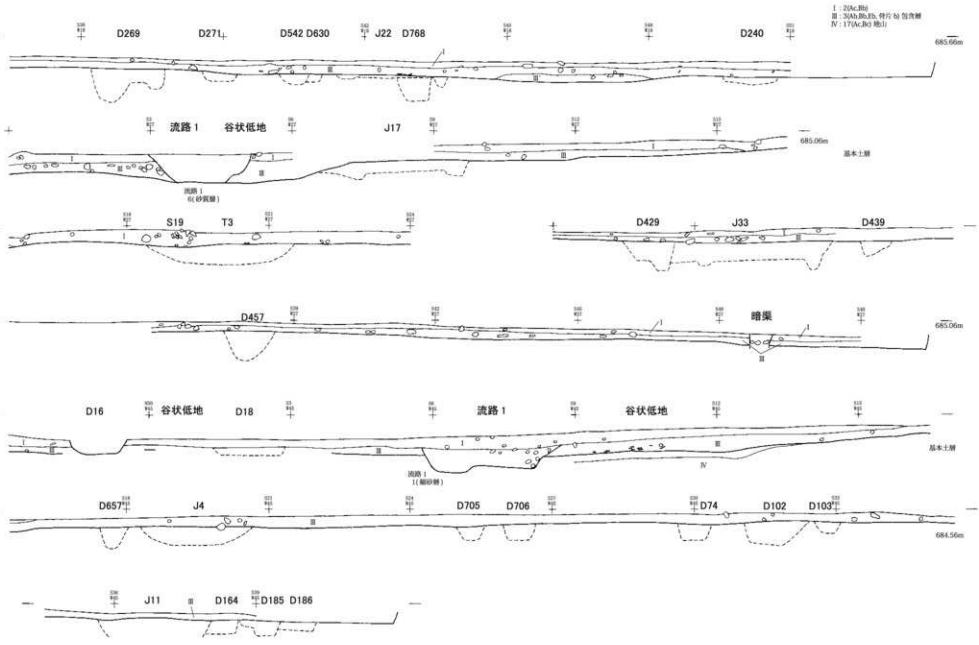

D269
D27L
D542 D630
J22
D768
D240
685.66m
流路 1
谷状低地
J17
685.06m
基本土層
S19
T3
D429
J33
D439
D457
暗渠
685.06m
D16
谷状低地
D18
流路 1
谷状低地
基本土層
D657
J4
D705
D706
D74
D102
D103
684.56m
J11
D164
D185
D186
0
1:80
2m

図3 土層図(2)

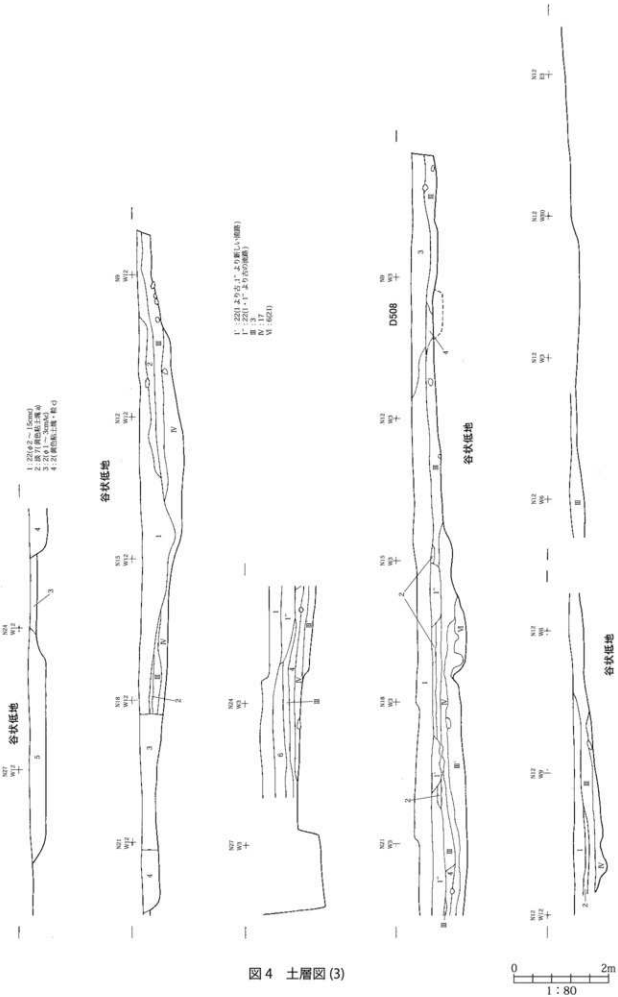


図4　土層図(3)

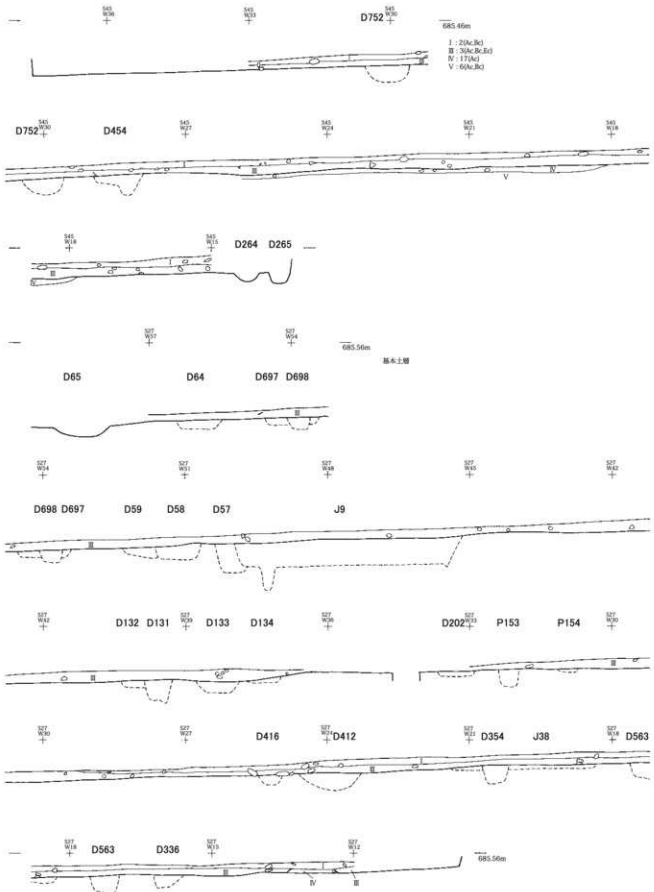


図5　土層図 (4)

0　2m
1：80

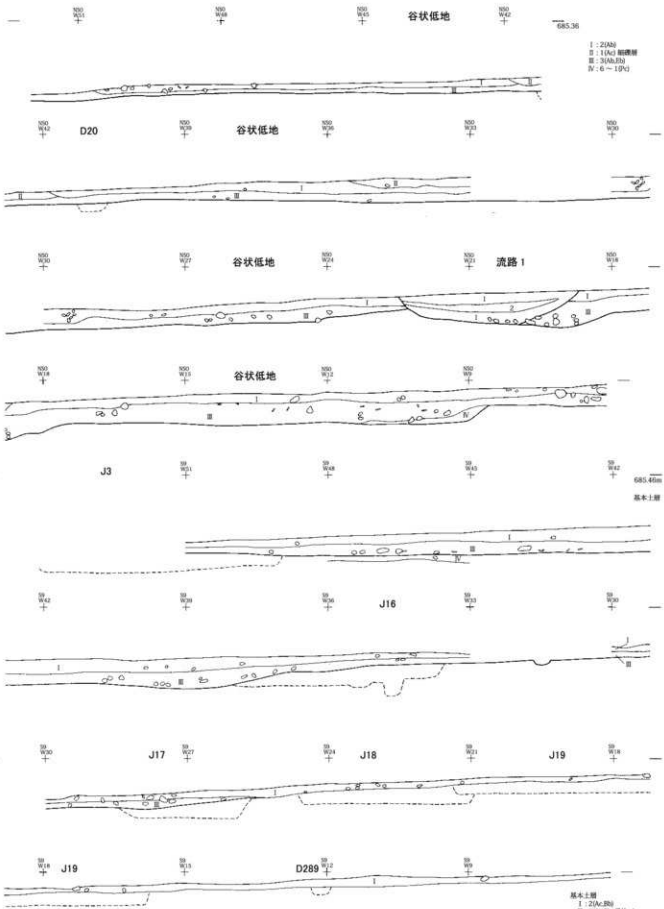


図6　土層図 (5)

0　2m
1：80

5　土層図と土質の表記

調査時に作成された土層図を比較すると、作図者ごとに若干表記が異なったり、同一作図者であっても表記に若干のブレが生じた場合もある。S0W6 東壁土層とそれ以外との詳細な対比を行う余裕は無かったこともあるが、同一遺跡内であっても、場所により、観察条件により、表記に若干の相違が生ずるのはむしろ自然なことではあるまいか。無理に統一する必要は無いと考え、調査記録・所見をそのまま掲載することにした。

調査時には土質を類型化し、記号化して記録した。その類型は隣接する小池遺跡・一ツ家遺跡に準じて設定し、記号も同一の表記とし、本書冒頭の例言に掲載した。この類型化に従わない記録もあり、それは調査記録をそのまま掲載した。

第３節　地域史の中のエリ穴遺跡

1　田川流域 (小地域)　[図 7]

エリ穴遺跡 (松本市教育委員会の遺跡番号 463、以下同様) が属する地理的・歴史的「小地域」を設定するならば、田川とその支流の流域ということになろう。東は鉢伏山西麓、西は田川の両岸、南は田川源流の塩尻峠、北は中山丘陵が地域を画する目安になろう。この小地域を「田川流域」と呼びたい。ここは農業地帯で、昭和 40 年代後半から圃場整備事業が広範囲で行なわれ、数多くの遺跡が発掘調査されており、概況を知ることができる。田川流域の南半は塩尻市に、北半は松本市に属する。

田川流域では縄文時代早期・押型文土器の時期から遺跡が形成され始め、五斗林遺跡 (474) からは焼土跡が発見されている。早期後半には北原遺跡 (320) で集石が、前期後半～末には坪之内遺跡 (350)、清心遺跡 (469)、白神塚遺跡 (329)、舅屋敷遺跡 (塩尻市) で集落が形成されるが、中期前半まで継続する例はない。中期に入ると集落が増加、規模も大きくなり、中葉～後葉にかけて継続する遺跡が多い。エリ穴遺跡に隣接する小池遺跡 (331) はその代表例で、一ツ家遺跡 (464)、雨堀遺跡 (473)、南中島遺跡 (348) など規模の大きな遺跡の多くが同様の継続性を示す。エリ穴遺跡も同様で、中期中葉から始まり、晩期後葉まで集落が続く。

ところが、中期最末～後期初頭にかけて、田川流域では山影遺跡 (356) で住居２軒が発見されるだけに激減する。エリ穴遺跡は土坑２基とひとまとまりの遺物が残されており、遺跡の継続性は辛うじて保たれたようだ。後期前葉には山影遺跡、弥生前遺跡 (355)、坪ノ内遺跡で小規模な集落が認められる。いずれも中期後葉には集落が営まれた遺跡で、後期初頭の断絶を経て復活した感がある。一方、南中島遺跡、小池遺跡、一ツ家遺跡、雨堀遺跡などは中期末で途絶したままとなる。

後期前葉の遺跡は後期中葉には継続せず、以後、晩期後葉までの間は遺物が拾われた遺跡すら無くなる。田川流域にはエリ穴遺跡しか存在しない状況が続くのである。晩期後葉に至り、遺物の廃棄場が発見される遺跡が現れる。石行遺跡 (322)、福沢遺跡 (塩尻市) などがそれで、石行遺跡はエリ穴遺跡を上回る遺物量がある。

晩期後葉の遺跡は弥生時代中期前葉には継続しない。横山城遺跡 (462) や五輪堂遺跡 (塩尻市) など近隣の地に、新たな集落が形成されるが、それらも弥生中期後葉には継続しない。弥生中期後葉からは百瀬遺跡 (317) など規模が大きく継続的・安定的な集落が成立し、水稲耕作が本格化するように思われるが、それも古墳時代前期には継続しない。こうしてみると、縄文時代～弥生時代の集団は、同一地点に長期的に集落を営むのではなく、占拠する地点を移動しつつ、時には拡大・縮小を反復しつつ、田川流域という小地域を確保し続けるという推測が可能ではなかろうか

向畑遺跡 (351) に新たに成立する古墳時代前期の集落は大規模で、弘法山古墳築造という背景があっての

ことなのだろう。松本盆地全体の政治的な統合に進む動きの中、田川・薄川・女鳥羽川が形成する沖積地域が、古代国家体制にとっての中核的地域となってゆくが、その一角を占める田川流域という小地域の持つ意味は、大きく変質しゆくのだろう。

古代社会成立以前、縄文中期～後期前葉と晩期後葉のエリ穴集落は、田川流域を占拠してきた集団にとって主要集落の一つだと評価できるだろう。しかし、後期後葉～晩期中葉のエリ穴集落の持つ意義はそれに留まらず、もっと重大である。

2　松本盆地（中地域）［図 8］

縄文後期後葉～晩期中葉に関して、田川流域から松本盆地に視野を広げてみよう。土器分布圏を大地域とすれば、その一角を構成する盆地という地理的まとまりは、中地域と呼べるだろう。

縄文時代後期初頭は田川流域だけでなく、多くの小地域で遺跡が激減する時期だが、松本盆地全体を見渡せば、北村遺跡（安曇野市）で 10 軒を超える住居が発見され、山形村や旧波田町でも住居未発見ながら良好な一括資料が発見されるなど、壊滅的にならなかった小地域もあるようだ。また、後期前葉には盆地全体で集落がある程度復活する。

だが、後期中葉に至って遺跡は激減し、集落はほとんど確認できなくなる。中期後葉以降継続的な中核集落だった北村遺跡は加曽利 B1 式中頃で途絶するし、後期前葉に復活した集落の大多数も以後に続かず、堀之内 2 式で途絶する。遺跡はそれ以後も漸減する。後期後葉・上ノ段式頃をもって離山遺跡・ほうろく屋敷遺跡（安曇野市）が途絶した後、後期末・中ノ沢 K 式から晩期中葉・佐野 2 式までの間で、一定量の遺物が採集されて集落の可能性があるのは、一津遺跡（大町市）、宮下遺跡（池田町）、女鳥羽川遺跡（松本市）、エリ穴遺跡の 4 箇所に限られ、しかもそれらは巨大遺跡にはなりそうもない。遺跡の減少は人口の減少を意味し、小地域を占拠してきた集団にとって、極めて深刻な事態のはずだ。その中で独自の土偶（いわゆる手足省略形土偶）や土製耳飾を生み出し、独自の土器型式（上ノ段式、中ノ沢式、晩期未命名型式）を保持したエリ穴遺跡は、田川流域の中核であるに留まらず、松本盆地全体、或いはもっと広域の中での中核という意義を持っていたと考えるべきだろう。晩期後葉～弥生中期前葉にかけて、田川流域は遺跡の変遷が把握できる主要地域の位置を占め続けるが、エリ穴集落の後継者集団が健在だったからなのだろう。

3　上ノ段式・中ノ沢式・佐野式分布圏（大地域）

松本盆地の集落減少のピークは、後期後葉～晩期中葉であるが、この間、上ノ段式～中ノ沢式～佐野式と、地域独自の土器型式が展開する。著しい人口減少の中でも、地域集団の独自性は主張し続けられたのだ。上ノ段式～中ノ沢式は長野県のほぼ全域と、甲府盆地北部を分布域としているようで、佐野式は甲府盆地では不明瞭だが信濃川中流域に分布を広げており、若干の変動があるようだ。そして、長野県～甲府盆地北部の遺跡数の変遷過程は、松本盆地と概ね共通すると推定される。甲府盆地北部には金生遺跡、天竜川流域には中村中平遺跡、千曲川上流域には深町遺跡、長野盆地には宮崎遺跡、といった具合で、中地域ごとに中核的な遺跡が確認できるのも共通だ。それらの中で金生遺跡だけは大規模な配石遺構を持ち、広域的祭祀の場となった可能性が指摘できる。それは他を圧するほどの規模だとは言えないように思われるので、中地域の中核集落としては他よりもひとまわり規模が大きいと評価した方が良いかもしれない。独自土器型式分布域の中で見ても、エリ穴遺跡は拠点的・中核的な集落の 1 つに数え上げることができる。大地域を支えた数少ない中心的な集落の一つだと評価すべきだろう。

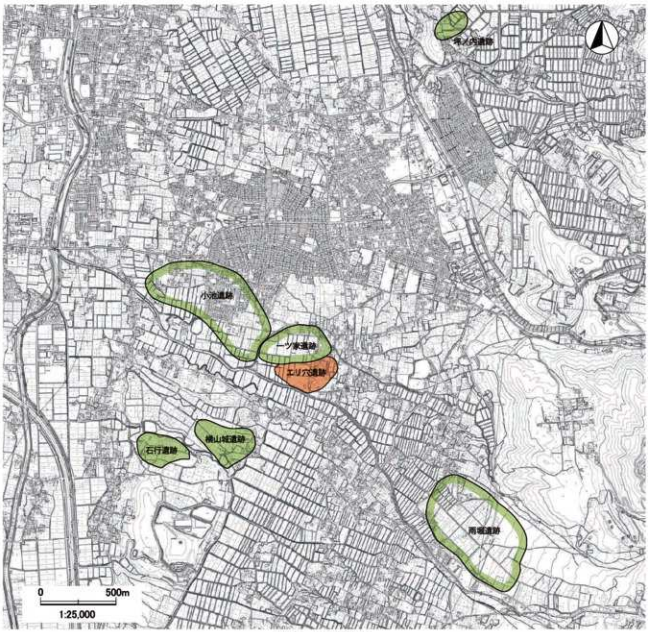


図7　周辺遺跡

遺跡遠景（北から）　西向き緩傾斜地に立地

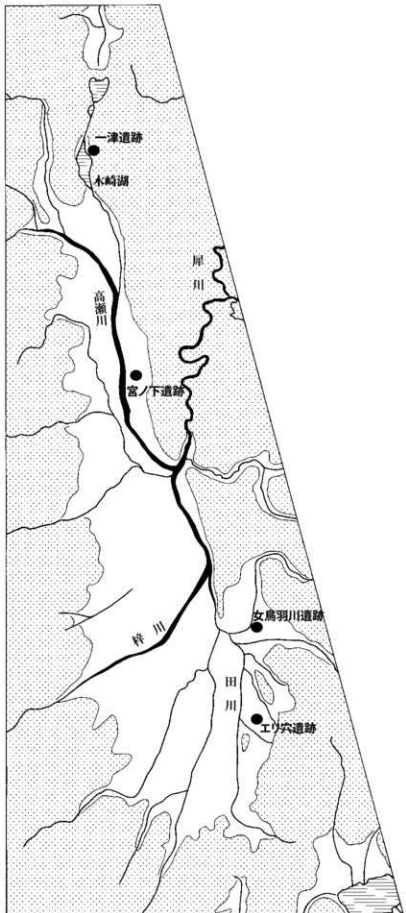


図8　松本盆地の縄文晩期前半の遺跡

第Ⅲ章　これまでの調査・研究

松本盆地をはじめとして中部高地には縄文時代後晩期の遺跡はごく少なく、エリ穴遺跡は希少価値のある遺跡として研究者の関心を集めて来た。「耳飾が拾える遺跡」として考古少年達にも知られており、エリ穴遺跡に縁を持ちつつ考古学研究者に育っていった人材は少なくない。「縄文文化から弥生文化への推移」を研究テーマの一つとした藤澤宗平(姓の文字は「藤澤」が正しいが、「藤沢」と記載された著作の方が多い)にとってもエリ穴は重要な遺跡であったはずで、早くから着目していたのではないかと推測する。松本市立博物館に勤務していた小松虔の協力を得て、勤務校の松本深志高校地歴会の生徒達とともに、エリ穴遺跡に発掘調査の手を入れたのは1967年3月(第1次調査)、以後、1968年(第2次調査)と1970年(第3次調査)の合計3回、合わせて150㎡ほどの小規模な発掘が試みられた。藤澤は旧片丘村地域をフィールドとして、縄文時代～弥生時代各時期の遺跡をひとわたり調査しようという構想を持っており、その一環として縄文時代後晩期はエリ穴遺跡を選んだのだが、資料がまだ不足していた時代背景が偲ばれる。ちなみに、その構想の下で発掘調査されたのは五斗林、舅屋敷、中原、エリ穴、横山城、犬原の6遺跡で、このうち横山城、犬原、エリ穴第1次調査は、報告が公表されている[藤沢1966、藤沢・小松1970]。

藤澤は第1次調査の報文[藤沢宗平1967a]の中で、発掘地点を「エリ穴遺跡第2地点」と呼んでいる。そして、エリ穴遺跡第1地点は現在重要文化財に指定されている馬場家住宅の東側の地点を指すこと、第2地点は芳原の別名があること、信濃資料の遺跡地名表[信濃資料刊行会1956]掲載の芳原遺跡はエリ穴遺跡第2地点を指している可能性があることを指摘する[藤澤1967a]。その地名表でエリ穴遺跡発見遺物には、縄文時代中期諸型式と石器類のほか、「晩期型式、動物土偶、石棒」があると記載され、芳原遺跡発見遺物には、縄文時代中期諸型式と石器類のほか、堀之内式(釣手土器)があると記載されている。これに関して藤澤は、「「信濃資料」の地名表作製のための資料蒐集の頃には加曾利B式土器までしか知られていなかったが、その後の調査で、晩期土器の存在することも一応知られていた」との記述[藤澤1967a]も残しており、地名表掲載のエリ穴遺跡・芳原遺跡いずれの内容とも整合しない点が残るのだが、エリ穴に対する積年の関心を窺い知ることができるように思われる。今回報告する松本市教育委員会の発掘地点は、藤澤の報文の第2地点に該当する。

3回の発掘調査は藤澤の指揮の下、高校生が作業に当たった。藤澤は既に足が不自由で十分には動けず、また元来高校生の主体性を尊重する指導方針でもあったため、高校生に発掘から平板実測の記録まで任せ、カメラが貴重品だったことから写真は藤澤・小松が担当した。当然発掘から埋め戻しまで手作業で、5日間の日程ではかなり粗い調査だったが、当時の松本地域の調査としては平均的だったろう。図面や遺物の整理作業も、まずは高校生にやらせてみる方針で、部誌の『あぜみち』17号、18号、20号に拙いながらも報告が掲載されており、松本市立考古博物館にそれらの複写が保管されている。藤澤自身は第1次調査の報告だけを執筆するに留まった[藤澤1967a、1967b]。70年代に入る頃から始まった開発に伴う緊急調査に忙殺され、健康も害したためである。

藤澤は発掘資料を早々に日本民俗資料館(現松本市立博物館)に寄託してきたのだが、エリ穴遺跡発掘資料だけは松本深志高校地歴会の部室で保管した。いずれは第3次調査分までまとめて報告したいとの思いと、おりから執筆していた部誌[藤澤1973]に資料の一部を掲載する都合から、手元に置いたのではなかろうか。その部誌には第3次調査で検出した住居跡について記載されたほか、土器、石器、土偶、耳飾等の一部が実測図と共に取り上げられている。しかし、藤澤は1972年に病に倒れ、1974年に逝去する。報告の計画は永久に頓挫し、遺物は部室に置かれたままとなった。

エリ穴の資料を未報告のままに放置したくないという思いは、発掘に関わった卒業生も共有しており、

1973年から2年間、当時大学生だった村上(小池)孝、百瀬長秀、高橋龍三郎らによって、土器の一部について接合・復元・実測が行なわれた。その作業スペースは高校内には確保できず、夏休み等に一時借用して学校外で行なわれ、その成果の実測図は長野県史に掲載された[百瀬 1983]。だが、移動は遺物の損耗を招きかねず、返却漏れも生じ、資料散逸の第一歩になってしまった感は否めない。大学生3人の卒業と共に、報告書作成への活動は自然消滅した。

正確な事情はわからないが、1984年～1988年の校舎改築に伴って、部室が何回か移転したらしい。部室保管のエリ穴遺跡出土遺物と、遺構実測図の多くはその間に行方不明になった。もはや取り返しはつかない。皮肉なことに、返却漏れとなっていた土器細片6箱、耳飾169点、土偶36点、土製品15点、石器70点、石剣10点だけが散逸を免れ、松本市教育委員会に移管できた。主要な土製品類を移管できたことだけが、せめてもの慰めである。それらは改めて実測し、本書第3分冊に掲載する。

1983年刊行の長野県史には3回の調査範囲を総合した遺構配置図と遺構図が掲載されている。主要な遺構は第3次調査で検出されており、1980年代初めまでは残されていたその実測図をもとに、藤澤の報文や部誌の記述などを参考にして、県史執筆の為に作図したものである。この県史掲載図面は散逸を免れ、それを松本市教育委員会の発掘範囲の図に照合させて組み込んだのが図9である。藤澤の時代は発掘調査の測量に国家座標は導入されておらず、正確な対照は不可能だが、概ねの位置関係を把握することは可能であった。主要遺構図は長野県史から転載した。なお、遺構番号に重複が生じたため、藤澤の発掘地点の遺構番号にはFを冠した。

F1号住居は縄文時代晩期前葉～中葉に帰属するとの所見に変更は無い。配石F1・配石F2(一体の遺構の可能性もある)は上ノ段式期の17号住居に重なりそうな位置にある。掘り方が明瞭に把握できた17号住居なので、その埋土上にこの2基の配石が構築されたと考えるのが自然であろう。配石周辺からは体部に羽状沈線文をもつ土器が多出したと長野県史には記載したが、それらの一部は配石の下から出土したことが確実なことと合わせ、2基の配石は上ノ段式より新しいと判断を変更したい。

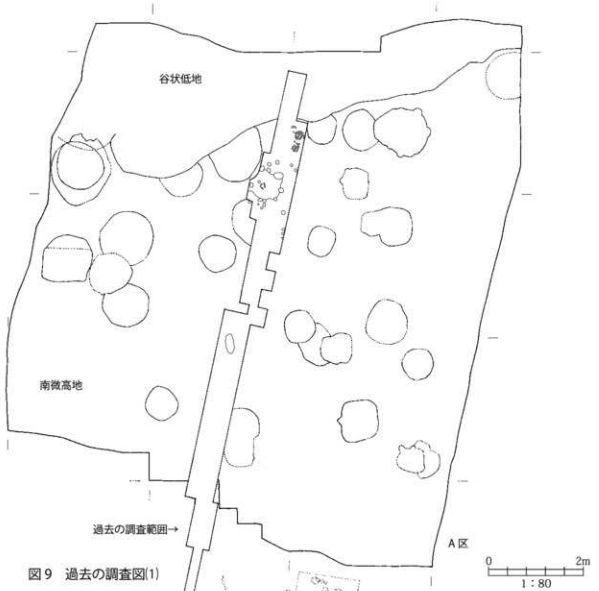


図9　過去の調査図(1)

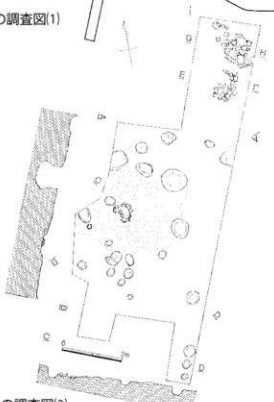


図10　過去の調査図(2)

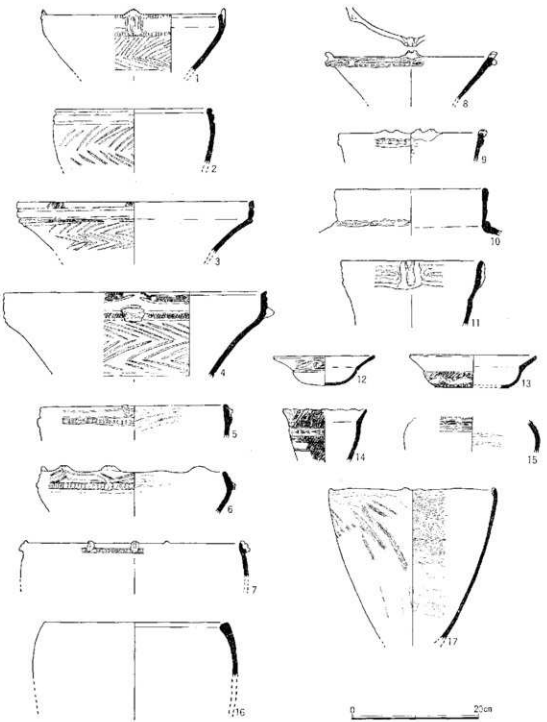


図 11　過去の調査出土土器

第 12 図 調査範囲全体図（1：400）

第 14 図 A 区・B 区　礫群分布図（1：250）

第 13 図 A 区・B 区の遺構配置図（1：250）

第 15 図 A 区・B 区　等高線図（1：250）

第 16 図 割付全体図（1：600）

J: 住居跡　T: 竪穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物

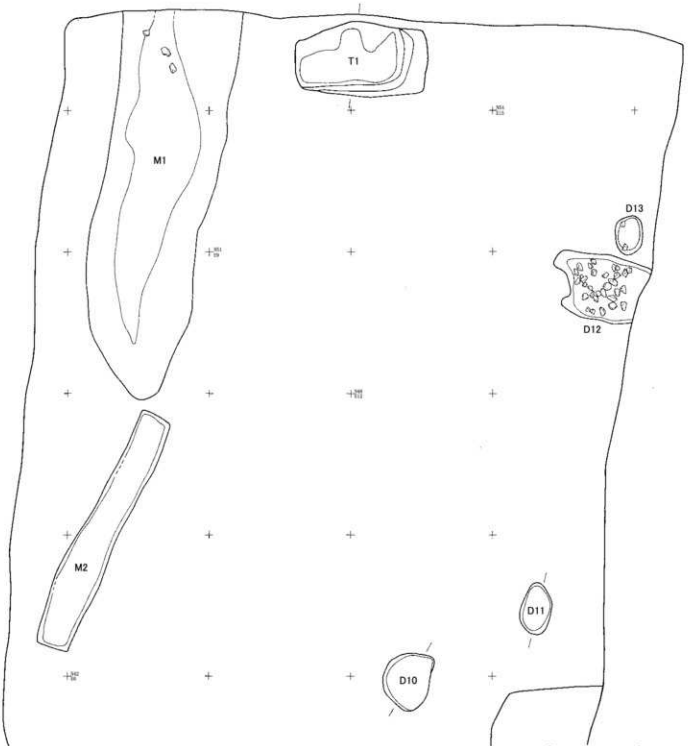


図17　遺構配置・土層(1)

J: 住居跡　T: 竪穴　K: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物

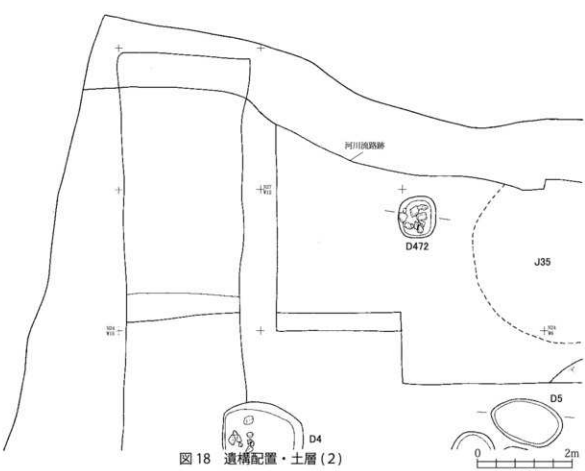


図 18　遺構配置・土層（2）

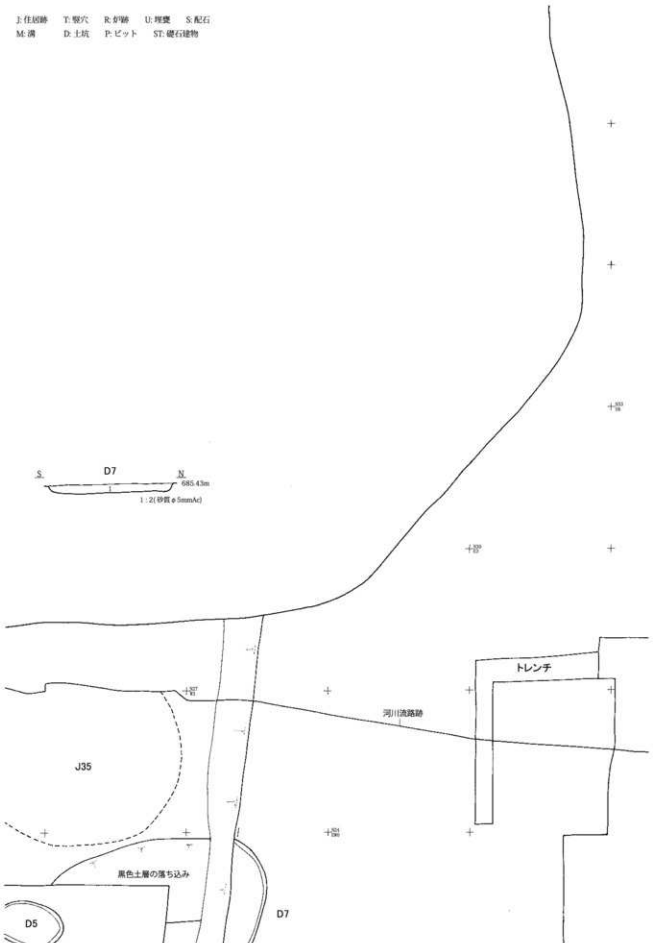

J:住居跡　T:竪穴　R:炉跡　U:埋甕　S:配石
M:溝　D:土坑　P:ピット　ST:礎石建物
S
D7
N
685.43m
1:2(砂質φ5mmAc)
トレンチ
河川流路跡
J35
黒色土層の落ち込み
D5
D7
0
2m
1:80

図19　遺構配置・土層(3)

図 20　遺構配置・土層 (4)

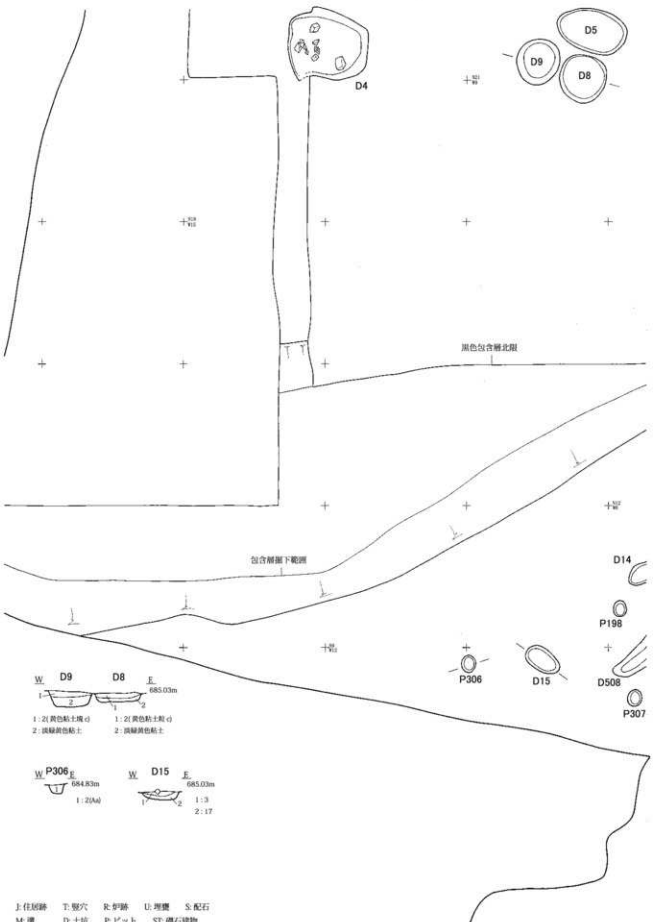

D4
D5
D9
D8
黒色包含層北限
包含層面下範囲
D14
P198
P306
D15
D508
P307
W D9 D8 E
685.03m
1：2(黄色粘土塊 c)
2：淡緑黄色粘土
1：2(黄色粘土粒 c)
2：淡緑黄色粘土
W P306 E
684.83m
1：2(Aa)
W D15 E
685.03m
1：3
2：17
J: 住居跡 T: 竪穴 R: 炉跡 U: 埋甕 S: 配石
M: 溝 D: 土坑 P: ピット ST: 礎石建物
0 2m
1：80

図 21　遺構配置・土層（5）

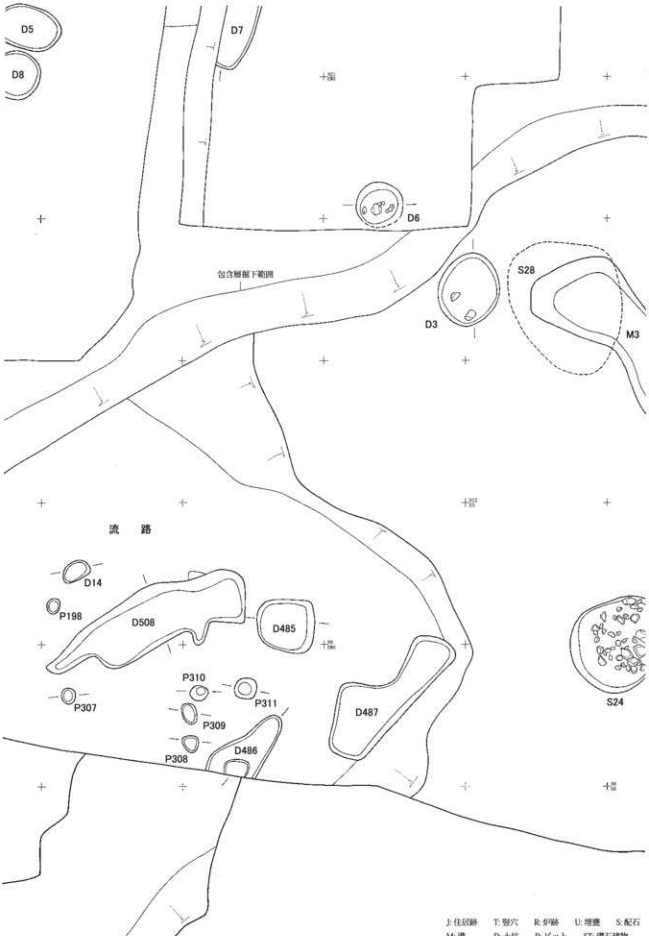

D5
D8
D7
D6
包含層掘下範囲
D3
S28
M3
流　路
D14
P198
D508
D485
P310
P311
P307
P309
P308
D486
D487
S24
J: 住居跡　T: 墓穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物
0　2m
1：80

図 22　遺構配置・土層 (6)

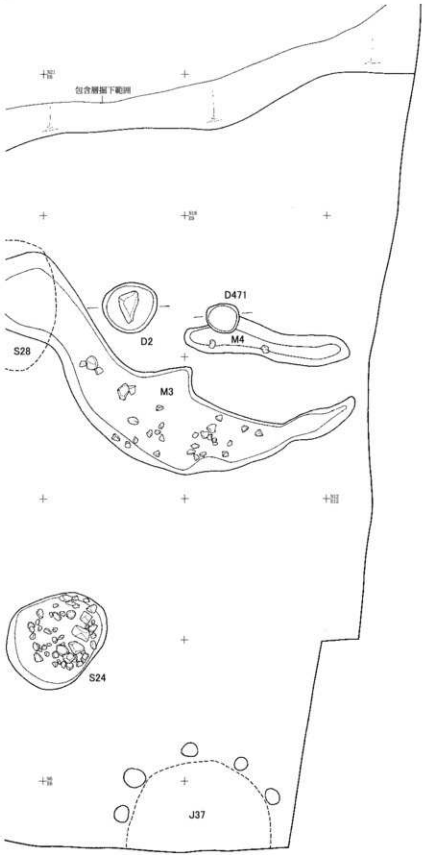


図 23　遺構配置・土層 (7)

0　2m
1：80

J: 住居跡　T: 竪穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物

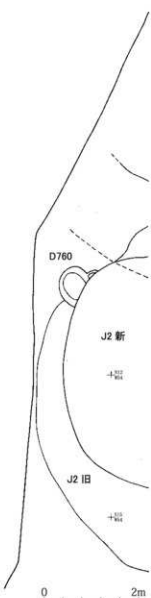


図 24　遺構配置・土層（8）

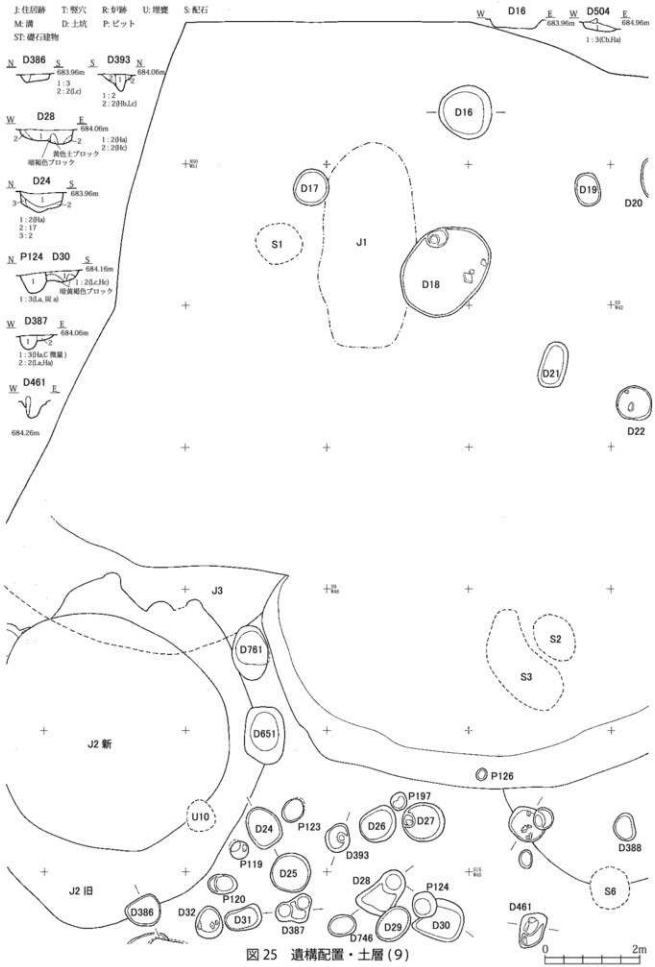

J: 住居跡 T: 竪穴 R: 炉跡 U: 埋甕 S: 配石
M: 溝 D: 土坑 P: ピット
ST: 礎石建物
D386
D393
D28
D24
P124
D30
D387
D461
D16
D504
D17
D19
D20
S1
J1
D18
D21
D22
J3
D761
S2
S3
J2 新
D651
P126
U10
D24
P123
D26
D27
P197
D393
P119
D25
D28
P124
D388
S6
J2 旧
D386
D32
P120
D31
D387
D746
D29
D30
D461
0
2m
1 : 80

図 25　遺構配置・土層 (9)

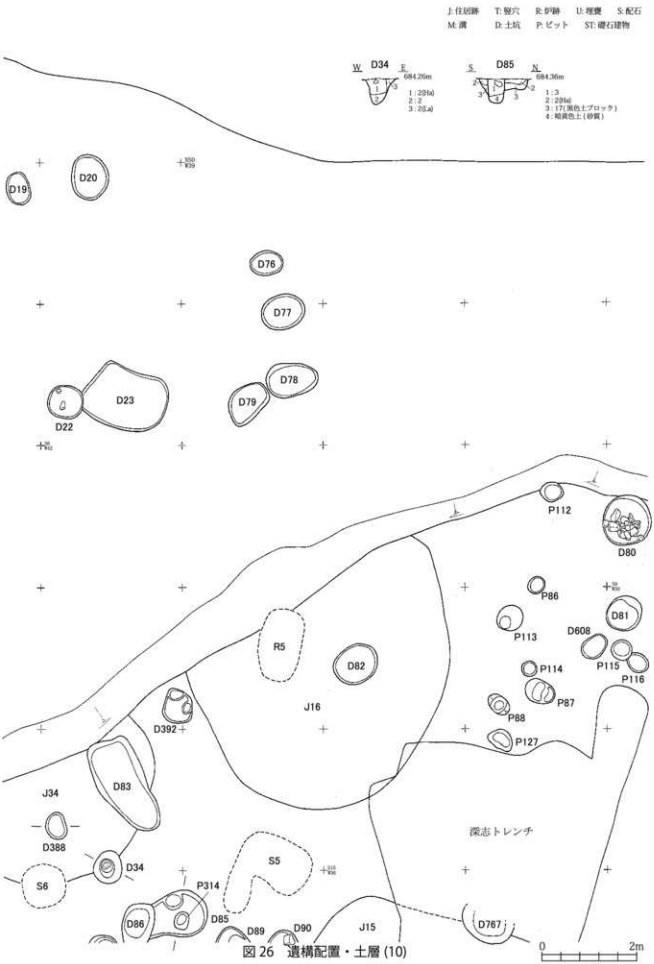


図 26　遺構配置・土層 (10)

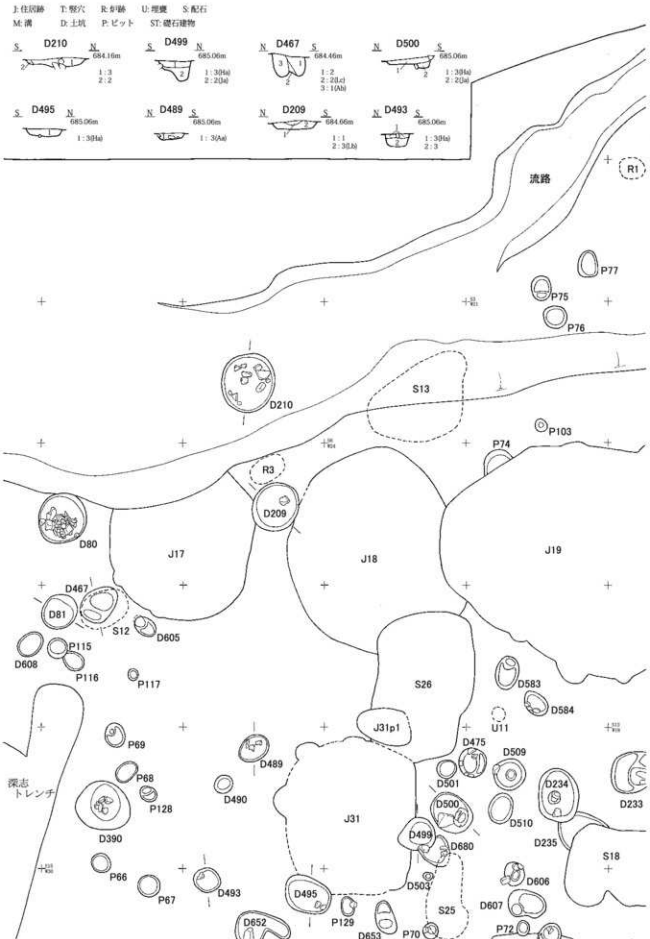


図 27　遺構配置・土層（11）

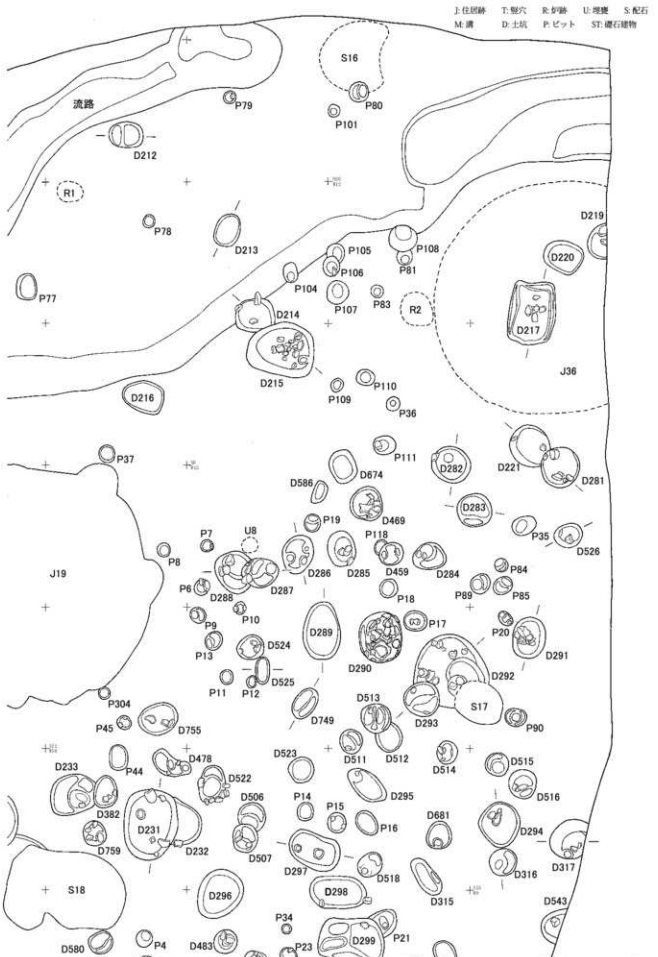
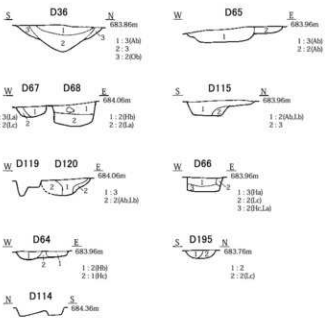


図 28　遺構配置・土層 (12)

J: 住居跡　T: 竪穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物



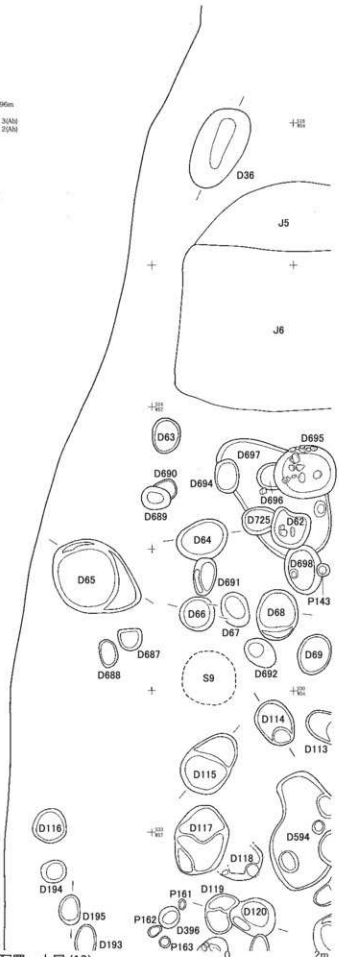


図 29　遺構配置・土層 (13)

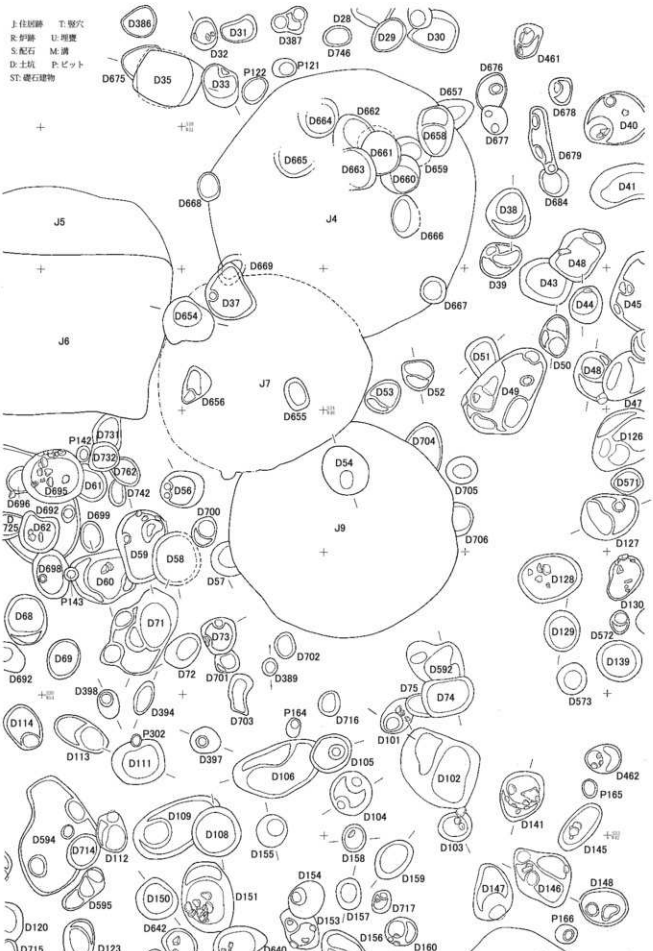


図 30　遺構配置・土層 (14)

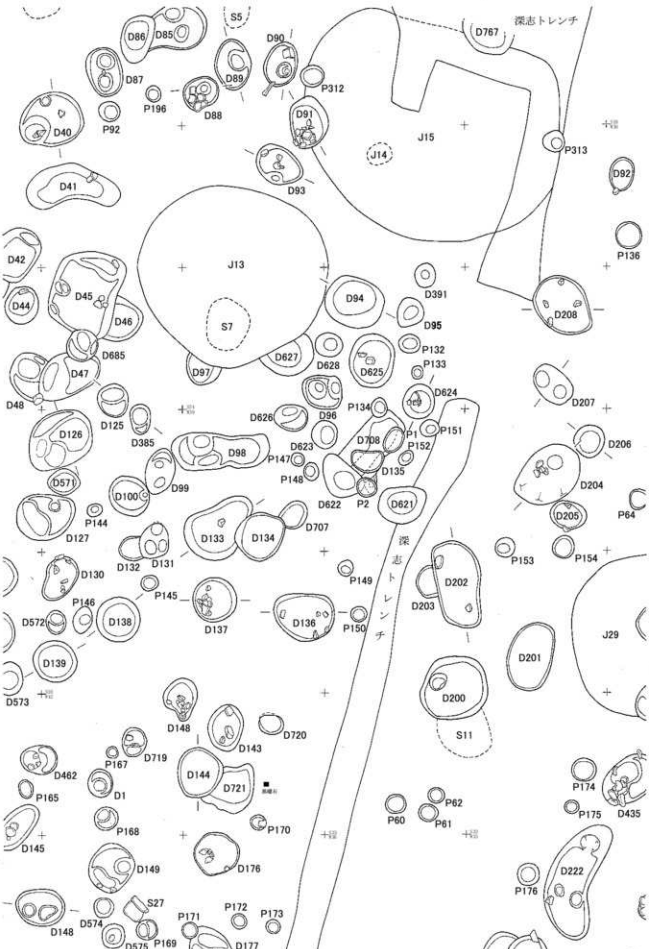


図 31　遺構配置・土層 (15)

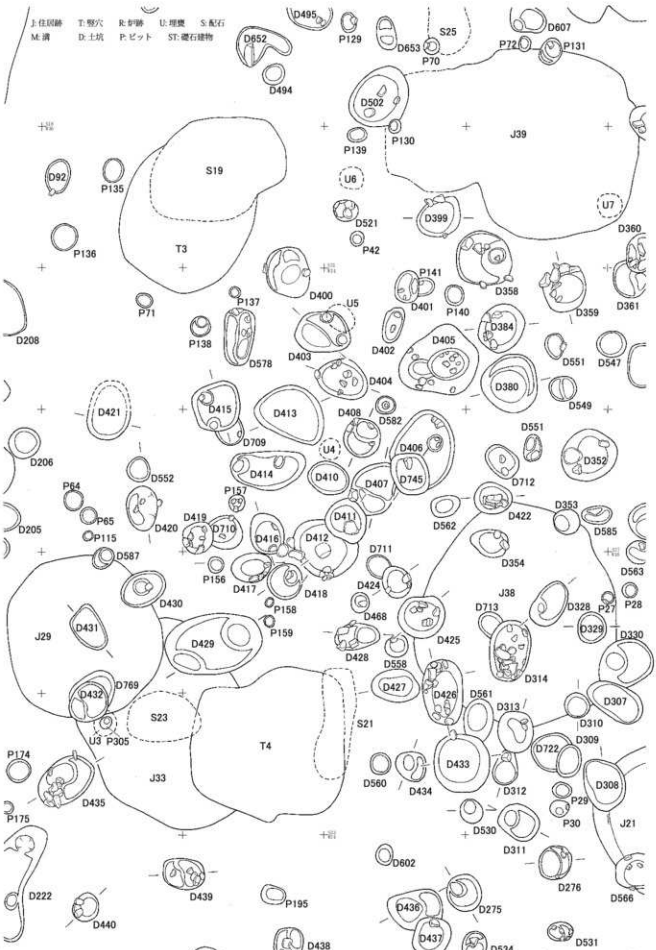


図 32　遺構配置・土層 (16)

0　2m
1 : 80

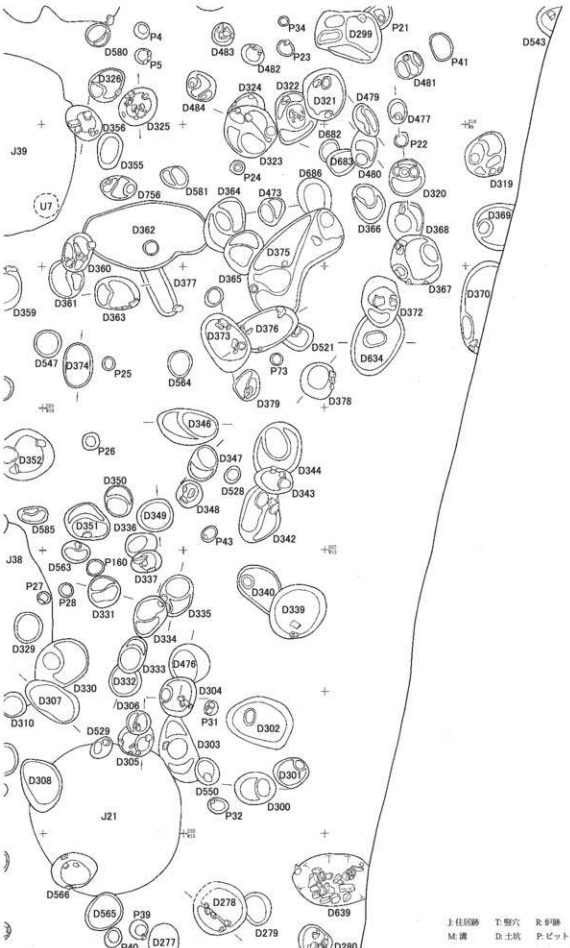


図 33　遺構配置・土層 (17)

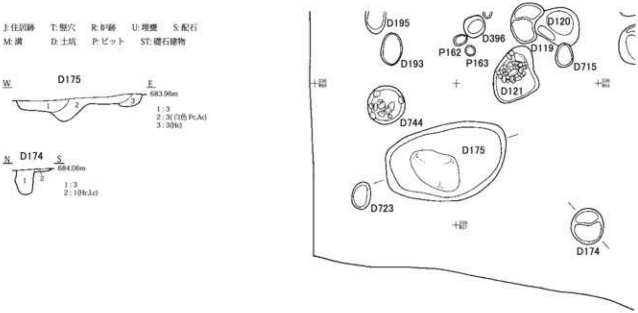
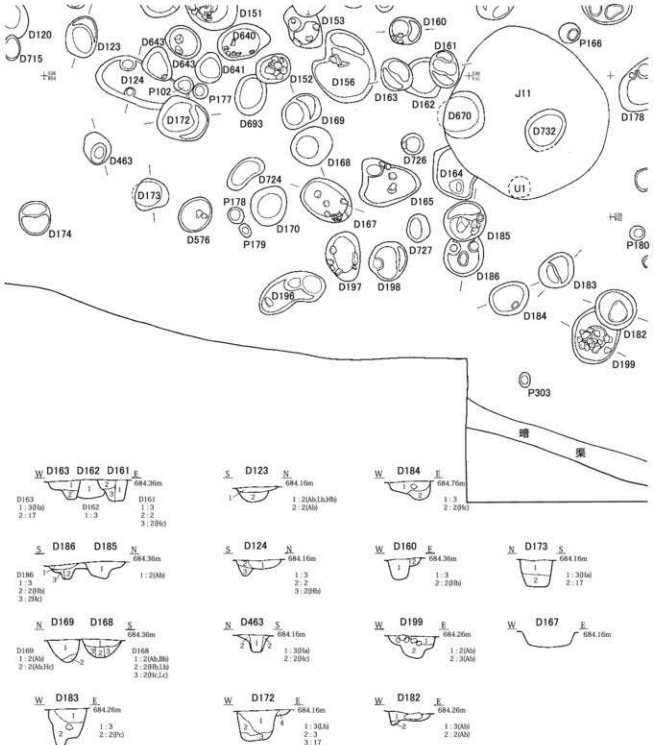


図 34　遺構配置・土層 (18)

0　2m
1：80



J: 住居跡　T: 竪穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礫石建物

図 35　遺構配置・土層 (19)

0　2m
1 : 80

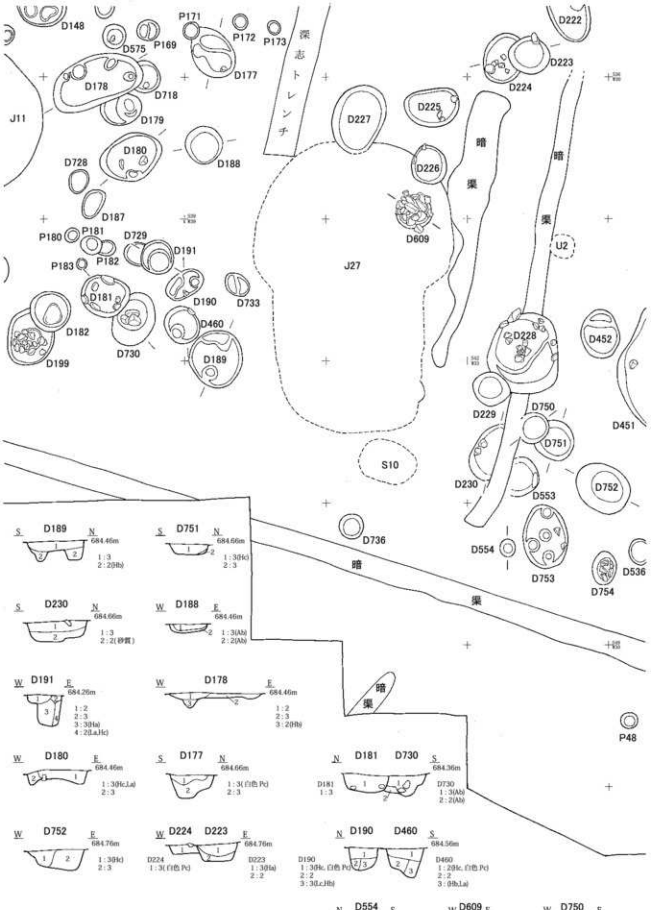


図 36　遺構配置・土層 (20)

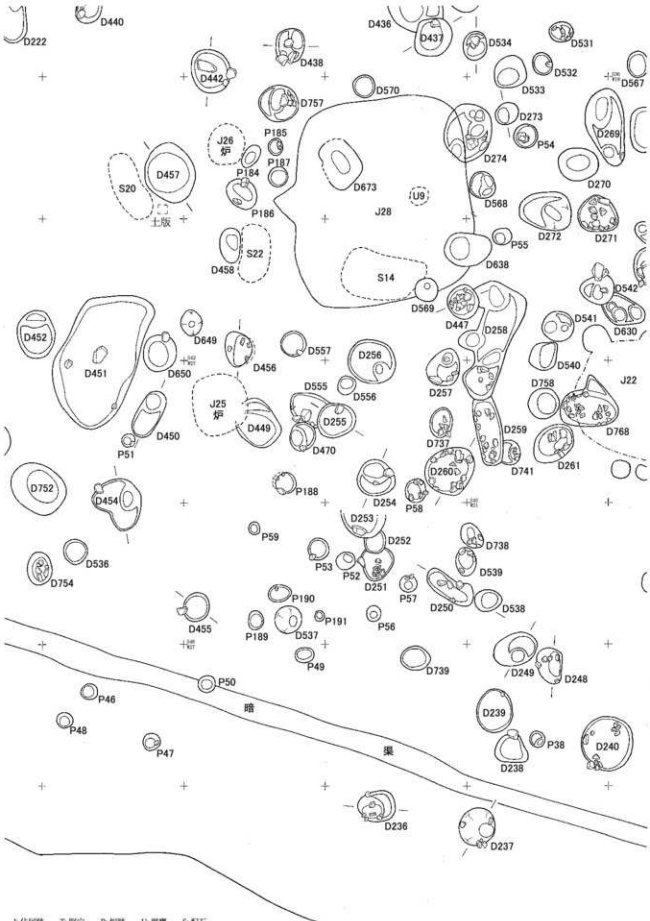
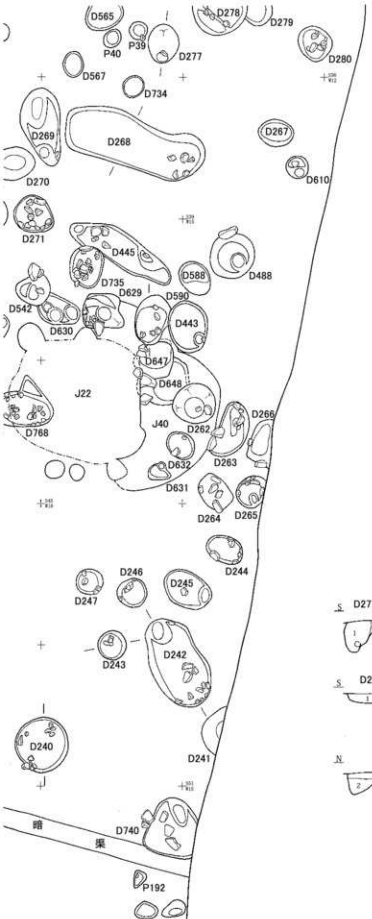
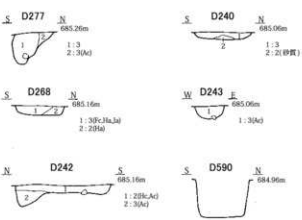


図 37　遺構配置・土層 (21)

0　2m
1：80





J: 住居跡　T: 墓穴　R: 炉跡　U: 埋甕　S: 配石
M: 溝　D: 土坑　P: ピット　ST: 礎石建物

図 38　遺構配置・土層 (22)

0　2m
1 : 80

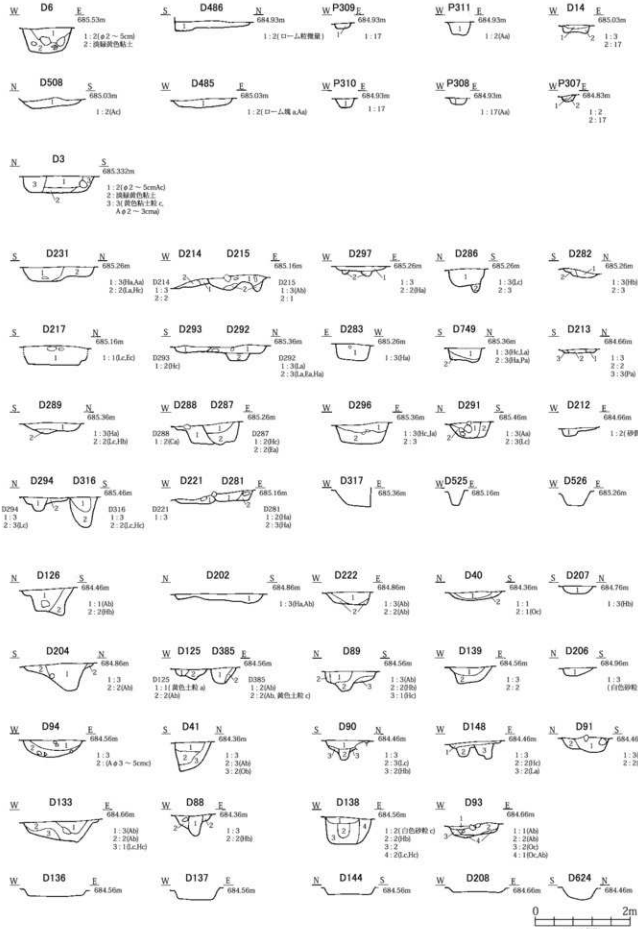

D6
D486
D309
D311
D14
D508
D485
D310
D308
D307
D3
D231
D214
D215
D297
D286
D282
D217
D293
D292
D283
D749
D213
D289
D288
D287
D296
D291
D212
D294
D316
D221
D281
D317
D525
D526
D126
D202
D222
D40
D207
D204
D125
D385
D89
D139
D206
D94
D41
D90
D148
D91
D133
D88
D138
D93
D136
D137
D144
D208
D624
0
2m
1：80

図 39　遺構土層（1）

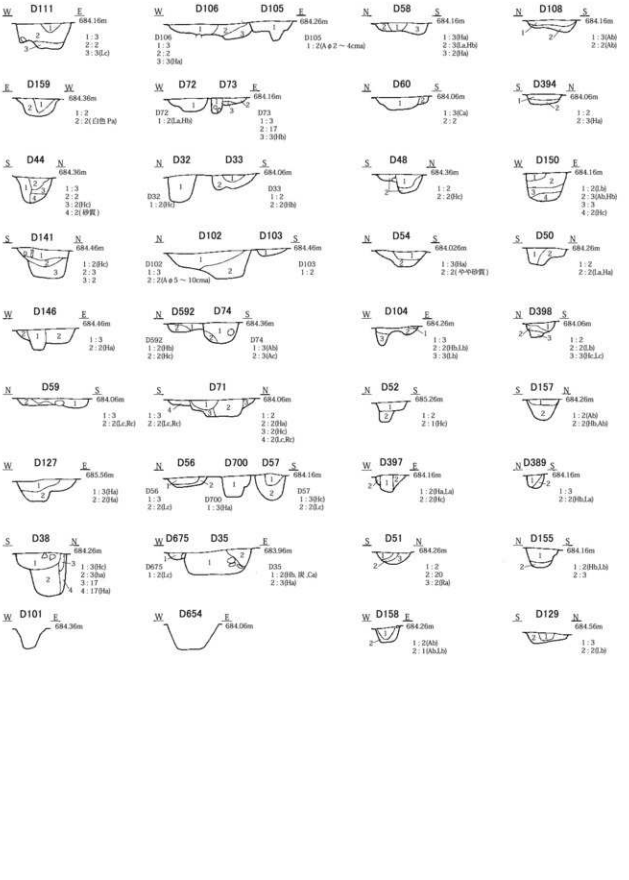

W D111 E 684.16m
1 : 3
2 : 2
3 : 3(Lc)
W D106 D105 E 684.26m
D106
1 : 3
2 : 2
3 : 3(Ia)
D105
1 : 2(A φ 2 ～ 4cma)
N D58 S 684.16m
1 : 3(Ia)
2 : 3(La,Hb)
3 : 2(Ia)
N D108 S 684.16m
1 : 3(Ab)
2 : 2(Ab)
E D159 W 684.36m
1 : 2
2 : 2(白色 Pa)
W D72 D73 E 684.16m
D72
1 : 2(La,Hb)
D73
1 : 3
2 : 17
3 : 3(Hb)
N D60 S 684.06m
1 : 3(Ca)
2 : 2
S D394 N 684.06m
1 : 2
2 : 3(Ha)
S D44 N 684.36m
1 : 3
2 : 2
3 : 2(Ic)
4 : 2(砂質)
N D32 D33 S 684.06m
D32
1 : 2(Ic)
D33
1 : 2
2 : 2(Ib)
S D48 N 684.36m
1 : 2
2 : 2(Ic)
W D150 E 684.16m
1 : 2(Ja)
2 : 3(Ab,Hb)
3 : 3
4 : 2(Ic)
S D141 N 684.46m
1 : 2(Ic)
2 : 3
3 : 2
N D102 D103 S 684.46m
D102
1 : 3
2 : 2(A φ 5 ～ 10cma)
D103
1 : 2
N D54 S 684.026m
1 : 3(Ia)
2 : 2(中 ･ 中砂質)
S D50 N 684.26m
1 : 2
2 : 2(La,Ha)
W D146 E 684.46m
1 : 3
2 : 2(Ia)
N D592 D74 S 684.36m
D592
1 : 2(Ib)
2 : 2(Ic)
D74
1 : 3(Ab)
2 : 3(Ac)
W D104 E 684.26m
1 : 3
2 : 2(Ib,Ja)
3 : 3(Ja)
N D398 S 684.06m
1 : 2
2 : 2(Ja)
3 : 3(Ic,Lc)
N D59 S 684.06m
1 : 3
2 : 2(Lc,Rc)
S D71 N 684.06m
1 : 3
2 : 2(La,Rc)
1 : 2
2 : 2(Ia)
3 : 2(Ic)
4 : 2(Lc,Rc)
N D52 S 685.26m
1 : 2
2 : 1(Ic)
S D157 N 684.26m
1 : 2(Ab)
2 : 2(Ib,Ab)
W D127 E 685.56m
1 : 3(Ia)
2 : 2(Ia)
N D56 D700 D57 S 684.16m
D56
1 : 3
2 : 2(Lc)
D700
1 : 3(Ia)
D57
1 : 3(Ic)
2 : 2(Lc)
W D397 E 684.16m
1 : 2(Ia,La)
2 : 2(Ia)
N D389 S 684.16m
1 : 3
2 : 2(Ib,La)
S D38 N 684.26m
1 : 3(Ic)
2 : 3(Ia)
3 : 17
4 : 17(Ha)
W D675 D35 E 683.96m
D675
1 : 2(Lc)
D35
1 : 2(Ib, 礫 ,Ca)
2 : 3(Ha)
S D51 N 684.26m
1 : 2
2 : 20
3 : 2(Ba)
N D155 S 684.16m
1 : 2(Hb,Lb)
2 : 3
W D101 E 684.36m
W D654 E 684.06m
W D158 E 684.26m
1 : 2(Ab)
2 : 1(Ab,Lb)
S D129 N 684.56m
1 : 3
2 : 2(Lb)
0 2m
1 : 80

図 40　遺構土層 (2)

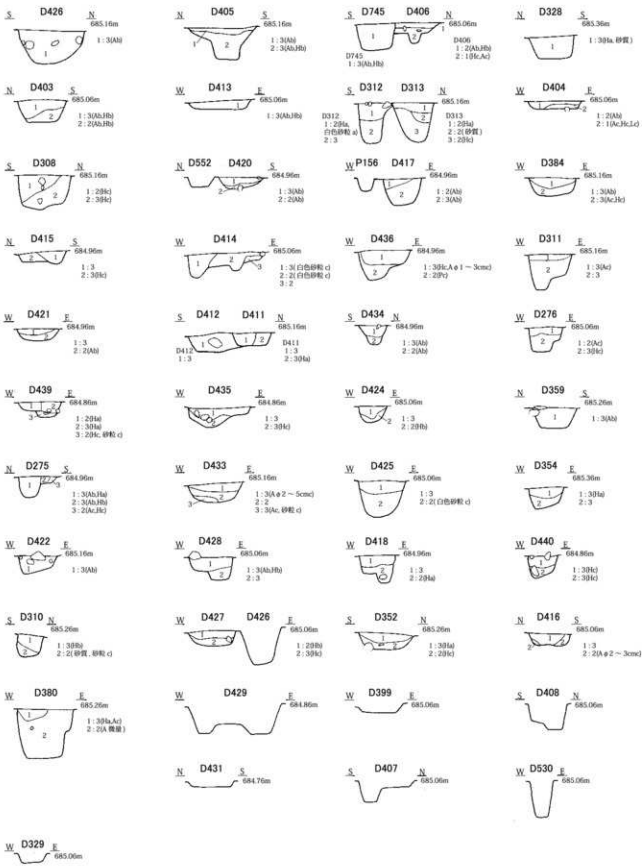

D426
S 685.16m N
1 : 3(Ah)
D405
N 685.16m S
1 : 3(Ah)
2 : 3(Ah,Hb)
D745
D406
S 685.06m N
D406
1 : 2(Ah,Hb)
2 : 1(Ac,Ac)
D745
1 : 3(Ah,Hb)
D328
N 685.36m S
1 : 3(6a, 砂質)
D403
N 685.06m S
1 : 3(Ah,Hb)
2 : 2(Ah,Hb)
D413
W 685.06m E
1 : 3(Ah,Hb)
D312
D313
S 685.16m N
D312
1 : 2(Ha,
白色砂粒 a)
2 : 3
D313
1 : 2(Ha)
2 : 2(砂質)
3 : 2(Hc)
D404
W 685.06m E
1 : 2(Ah)
2 : 1(Ac,Hc,Lc)
D308
S 685.16m N
1 : 2(Hc)
2 : 3(Hc)
D552
D420
N 684.96m S
1 : 3(Ah)
2 : 2(Ah)
P156
D417
W 684.96m E
1 : 2(Ah)
2 : 3(Ah)
D384
W 685.16m E
1 : 3(Ah)
2 : 3(Ac,Hc)
D415
N 684.96m S
1 : 3
2 : 3(Hc)
D414
W 685.06m E
1 : 3(白色砂粒 c)
2 : 2(白色砂粒 c)
3 : 2
D436
W 684.96m E
1 : 3(6c,A φ 1 ～ 3cmc)
2 : 2(Pc)
D311
W 685.16m E
1 : 3(Ac)
2 : 3
D421
W 684.96m E
1 : 3
2 : 2(Ah)
D412
D411
S 685.16m N
D412
1 : 3
D411
1 : 3
2 : 3(Ha)
D434
S 684.96m N
1 : 3(Ah)
2 : 2(Ah)
D276
W 685.06m E
1 : 2(Ac)
2 : 3(Hc)
D439
W 684.86m E
1 : 2(Ha)
2 : 3(Ha)
3 : 2(Hc, 砂粒 c)
D435
W 684.86m E
1 : 3
2 : 3(Hc)
D424
W 685.06m E
1 : 3
2 : 2(Hb)
D359
N 685.26m S
1 : 3(Ah)
D275
N 684.96m S
1 : 3(Ah,Ha)
2 : 3(Ah,Hb)
3 : 2(Ac,Hc)
D433
W 685.16m E
1 : 3(A φ 2 ～ 5cmc)
2 : 2
3 : 3(Ac, 砂粒 c)
D425
W 685.06m E
1 : 3
2 : 2(白色砂粒 c)
D354
W 685.36m E
1 : 3(Ha)
2 : 3
D422
W 685.16m E
1 : 3(Ah)
D428
W 685.06m E
1 : 3(Ah,Hb)
2 : 3
D418
W 684.96m E
1 : 3
2 : 2(Ha)
D440
W 684.86m E
1 : 3(Hc)
2 : 3(Hc)
D310
S 685.26m N
1 : 3(Hb)
2 : 2(砂質 , 砂粒 c)
D427
D426
W 685.06m E
1 : 2(Hb)
2 : 3(Hc)
D352
S 685.26m N
1 : 3(Ha)
2 : 2(Hc)
D416
N 685.06m S
1 : 3
2 : 2(A φ 2 ～ 3cmc)
D380
W 685.26m E
1 : 3(Ha,Ac)
2 : 2(A 微量)
D429
W 684.86m E
D399
W 685.06m E
D408
S 685.06m N
D431
N 684.76m S
D407
S 685.06m N
D530
W 685.06m E
D329
W 685.06m E
0 2m
1 : 80

図41　遺構土層(3)

D307
D323 D322 D321
D305 D306
D363
D376
D346
D335
D320
D476
D323 D322
D300
D325
D373
D332 D333 D334
D304
D473
D356
D378
D480
D477
D481
D278
D374
D479
D349
D331
D347
D634
D248
D250 D538
D254
D442
D237
D456
D555 D255
D249
D447
D236
D273
D454
D260
D455
D438
D437
D450
D457
D534
0
2m
1 : 80

図 42　遺構土層 (4)

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物出土状況

第１節　概観［図 12～15］

縄文時代の遺構・遺物はＡ区の谷状低地南縁～南微高地に集中し、Ａ区からＢ区南半にかけて広がる谷状低地にも若干存在する。第Ⅲ層が包含層で、第Ⅲ層中に残される礫群も、遺構と重なるように南微高地～谷状低地全域に広がる。谷状低地南縁斜面には大量の遺物が残されており、長期にわたって利用され、時期ごとに少しずつ地点を移してゆく、遺物の廃棄場であったことが判明した。

把握できた遺構は、住居、竪穴、炉、埋甕、配石、土坑・ピットで、土坑には墓坑が若干含まれる。住居は 31 基発見された。遺存状況が悪いため、住居の掘り方の把握が難しく、床しか検出できない住居も少なからずあった。敷石住居もあったはずだが、明瞭に把握できたのは１基のみであった。恐らくは大半が竪穴住居もしくは敷石住居やその系譜を引き継ぐ住居なのだろうが、確定できない住居が多かった。土坑とするには大きすぎ、住居とするには炉などの施設が無い遺構を「竪穴」とした。２基あるが、住居に準ずる扱いをした。炉は５基発見されたが、いずれも住居の施設だと思われる。埋甕は 11 基ある。埋甕は敷石住居などに付随する施設として構築されることが多いが、エリ穴遺跡の埋甕はそうではない。土器棺１基と、単独・独立の埋甕 10 基である。配石は 23 基発見された。最大でも径 3m に満たず、小規模で、使用する礫も小さく、複雑な構造を持たない。下部に墓坑を伴うのは１基だけで、残りは明瞭な掘り方を持たない。松本市教育委員会の発掘調査では、ピット類のうち、径 50cm 以上を土坑、それ以下をピットと命名してきており、エリ穴遺跡の調査でもその区分を踏襲した。土坑は 677 基、ピットは 294 基であるが、全てについて平面図には記録してあるものの、土層を記録できなかった土坑・ピットも少なからずある。土坑もピットも時期比定・性格付けが難しい。出土土器の小破片で時期を決めるわけにはゆくまい。時期比定が可能か、重視すべき情報を得られた土坑・ピットは個別に取上げ、それ以外は割付図のみに留め、個別遺構図は省略した。

第２節　礫群［図 14、写真図版 4］

遺物包含層である基本土層Ⅲ層中から多量の礫が検出された。配石遺構などの可能性もあると考えて礫群と命名し、精査と記録化を行なった。基本的には第Ⅲ層中に収まり、南微高地の上だけでなく、谷状低地全域にも広がる。その中で密集して上面を揃えてあると判断できたものを配石遺構として抽出し、個別に番号をあたえた。結果、第Ⅲ層中の礫から配石遺構を除いたものが礫群として残った。礫群は個々ばらばらの礫からなるが、礫が数個体密接しても配石遺構とは考えないので、そうした礫の小規模な集合も含んでいる。明瞭な構造を持たず、重なりや厚みもないので、積極的に遺構と認定することはできない。遺物包含層中にあるので、縄文時代の遺構の一部分であったり、残骸であったりする可能性はあるが、多くは遺構から遊離した礫や基本土層に含まれていた礫なのではなかろうか。特に、敷石住居の構築材として外部から持ち込まれたり、基本土層から採取された礫は少なくなかったはずで、住居廃絶後、再利用・転用によって礫を含む構築物が損壊、散乱したのだろう。縄文時代の遺構と同時に検出された平安時代の６号住居周辺には、礫群の量は少なかったとの所見が残されている。平安時代には第Ⅲ層は埋没してしまっており、第Ⅲ層まで掘り込んだ竪穴住居によって、付近の礫群はいったん取り除かれたのだろう。住居が埋没する過程で、礫群由来の礫が６号住居埋土に混入したとすれば、礫の少なさが説明できる。同時に、礫群は平安時代より前に埋没したことが推測できる。谷状低地にも礫群が広がっており、谷状低地の南縁ではその量が多い。南微高地からの転落品が集まり易かったからだろう。

第３節　遺構

1　住居跡・竪穴・炉

(1)　1号住居と配石１　［図 43 ～ 50、写真図版 5］【堀ノ内１式】

N3W45 ～ S3W48 の 6 グリッドにかけて、谷状低地の中に位置する敷石住居である。第Ⅲ層下部の礫群を除去したところで配石 1 と 1 号住居の炉を検出、炉の周辺を精査して、黄褐色土を薄く貼った床面を検出した。その範囲を図示したが境界は鮮明ではなく、壁の立ち上がりも発見できなかったので、平面形は確定できず、埋土も把握できなかった。1 号住居と配石 1 は隣接する別遺構と把握し、遺物も別々に取り上げたが、配石 1 は 1 号住居の出入り口施設や礫堤等の施設の下部である可能性は十分にあった。1 号住居の床は土坑 17 と土坑 18 に切られる。発掘段階で把握できた施設は炉とピット 1 基 (P1) だけだ。径 50cm ほどの範囲に円礫を配置した石囲炉は、半壊状態で北辺の縁石が失われ、焼土はなく掘り方は不明である。P1 の性格は不明だが、P1 出土の土器片は 1 号住居から取り上げられた唯一の遺物で、床面出土遺物は無い。

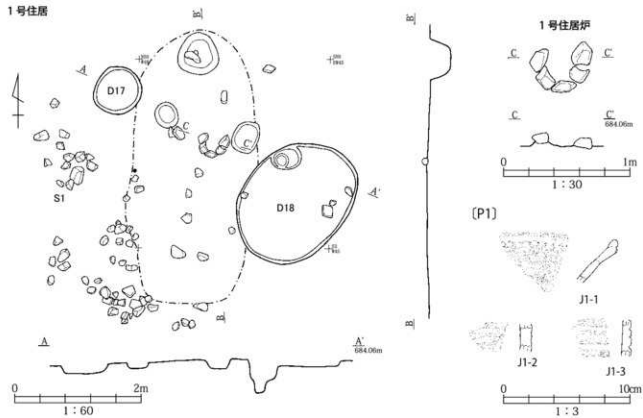
配石 1 出土土器 [S1-1 ～ S1-24] は、中期中葉の S1-23 と時期不明の S1-24 を除けば、堀ノ内 1 式にほぼ限定できる。無文粗製深鉢 S1-5 は器壁が厚く、口縁外側が若干肥厚し、口唇部は尖り気味となる。この肥厚部位は堀ノ内 1 式朝顔形深鉢口縁部文様帯に対応し、文様帯に充填すべき単位文・横帯文を全面的に省略したのではなかろうか。S1-6、S1-7 も同類で、それ以外にもエリ穴遺跡には類例があるので、これらは松本盆地独特の堀ノ内 1 式粗製土器ではなかろうか。破片が大きい S1-1、S1-2、S1-24 の 3 点は堀ノ内 1 式、それ以外の小破片も堀ノ内 1 式と推測できる。S1-23、S1-24 は混入品として除外でき、純度の高い一括資料と考えることができる。

1 号住居 P1 出土土器（J1-1 ～ J1-3）は貧弱で、J1-1 は堀ノ内 1 式だが、他の 2 片は時期不明だ。だが、時期別個体数・重量表に示すとおり、1 号住居が位置する 6 つのグリッド出土土器（J1・G1 ～ J1・G158）は、N3W45 と S3W45 を除いて堀ノ内式が圧倒的多数を占め、そのほとんどは堀ノ内 1 式で、大きな破片も少なくない。図中除外すべきなのは、J1-G27 ～ J1-G35、J1-G48 ～ J1-G50、J1-G73 ～ J1-G89、J1-G116 ～ J1-G128、J1-G129 ～ J1-G134、J1-G151 ～ J1-G155 だが、曽利式の J1-G129 を除けば小破片ばかりで、堀之内 2 式以外は量も少ない。堀之内 1 式の純度はかなり高いと考えたい。なお、S3W45 からは佐野 2a 式の半完形品が出土しているが、配石 2・3 を中心とした谷状低地の祭祀行為スペースに関連する遺物だと思われるので、第 2 分冊で報告する。

周辺グリッドを含め、1 号住居と配石 1 は堀ノ内 1 式が主体を占める。出土土器からも両者は一体の敷石住居であった可能性が高い。また、出土した堀ノ内 1 式土器はすべて器表面がかなり荒れている。谷状低地は湿地状態になりやすく、雨水が集まれば小規模な水流も発生すると推測されるので、住居廃絶・埋没後の遺存条件が良くなかったのではなかろうか。なお、1 号住居を切る 2 基の土坑出土土器は細片ばかりだが、堀之内 1 式が大半を占める。住居廃絶直後に構築された可能性が高いだろう。

(2)　2 号住居 (新)　［図 51 ～ 56、写真図版 5、6、38、39］【長野県史・中期中葉Ⅲ期】

S9W48 ～ S12W54 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。礫群下の第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、同時に 3 号住居と切り合い、埋甕 10(中期後葉Ⅰ期) に切られることを確認した。調査時点では 2 号住居が 3 号住居を切ると判断して調査し、記録化した。だが、3 号住居で説明するように、前後関係は断定できない。また、完掘後、床下から 2 号住居 (旧) を検出した。2 号住居 (新) は 2 号住居 (旧) の埋土の上部を切って上に乗る。掘り方の平面形は、直径ほぼ 5.0m の円形を呈する。埋土は 3 層程度に細分されるが、その評価は難しい。壁はほぼ直立で最大 30cm ほど残る。床は叩き締められて硬い。住居中



1号住居・配石1・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数 （上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量g）

地点	総重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
1号住									1									1
	70								20									10
配石1			1						4								3	2
	1265		100						910								50	170
N 3W45				2	1	1		4	21	2	1	1				8	2	9
(1住)	10910			40	30	10		140	610	60	10	40				130	20	980
N 3W48				1	1	2		4	15	2						7		13
(1住)	7460			10	20	40		100	410	40						120		750
NS0W45			1	5				2	14	5	1		2	2		10	3	15
(1住)	10765		30	180				40	280	60	30		30	60		110	70	490
NS0W48				3			2	3	45	2	1			1		5		11
(1住・配1)	8975			100			20	40	1320	30	50			10		70		290
S 3W45			1	3	1	2			4	4		2		6	1	14	1	8
(1住)	9635		80	40	30	20			90	40		50		1330	10	160	10	270
S 3W48			1			3	2	4	20					1		3	4	4
(1住)	6590		30			50	130	100	310					10		50	100	140

図43　1号住居実測図、出土土器拓影

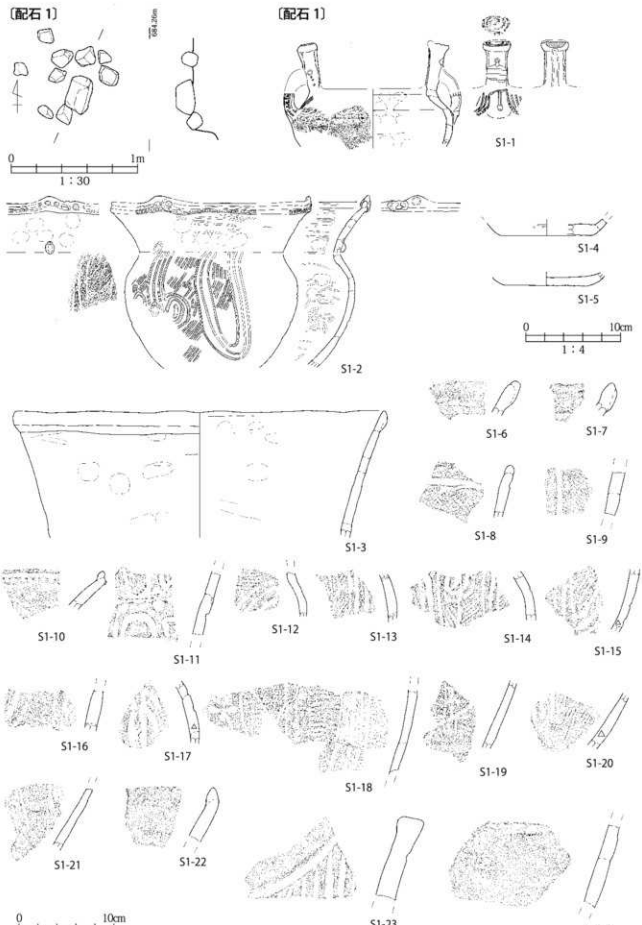


図 44　配石 1 実測図、出土土器実測図・拓影

〔N3W45〕

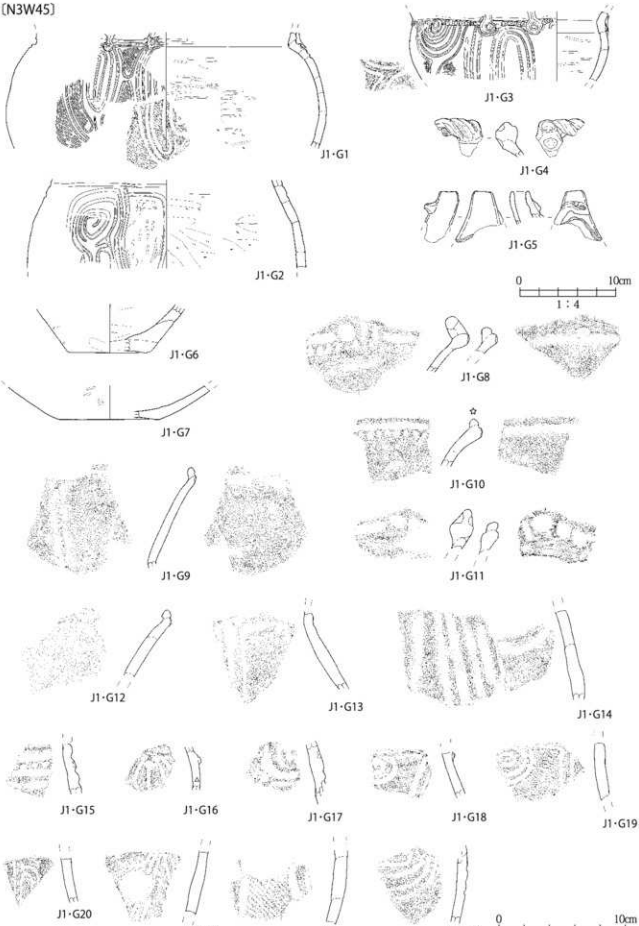


図 45　1 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器・拓影（1）

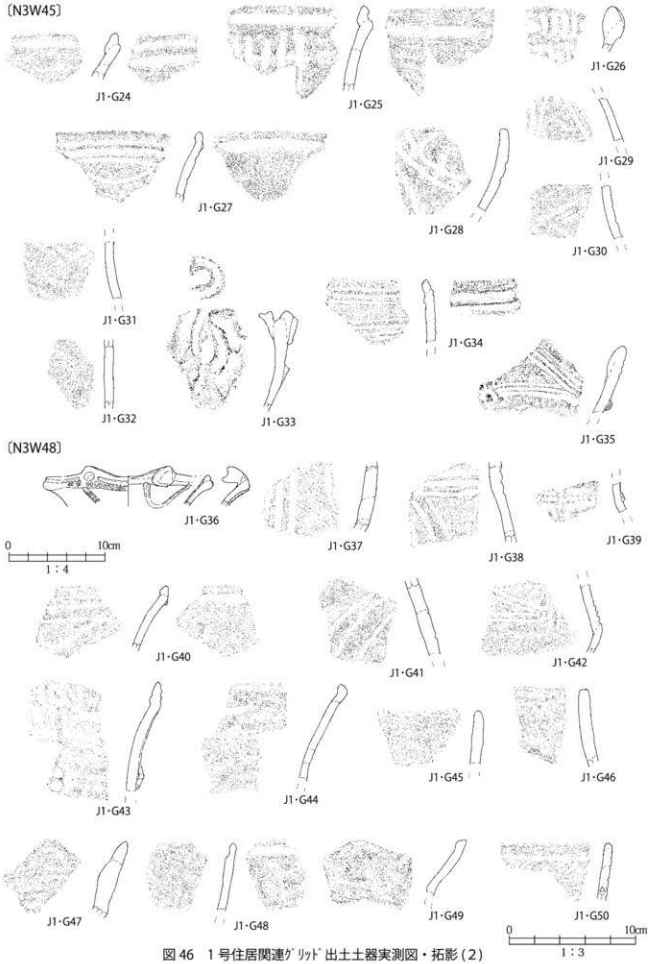


図46　1号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

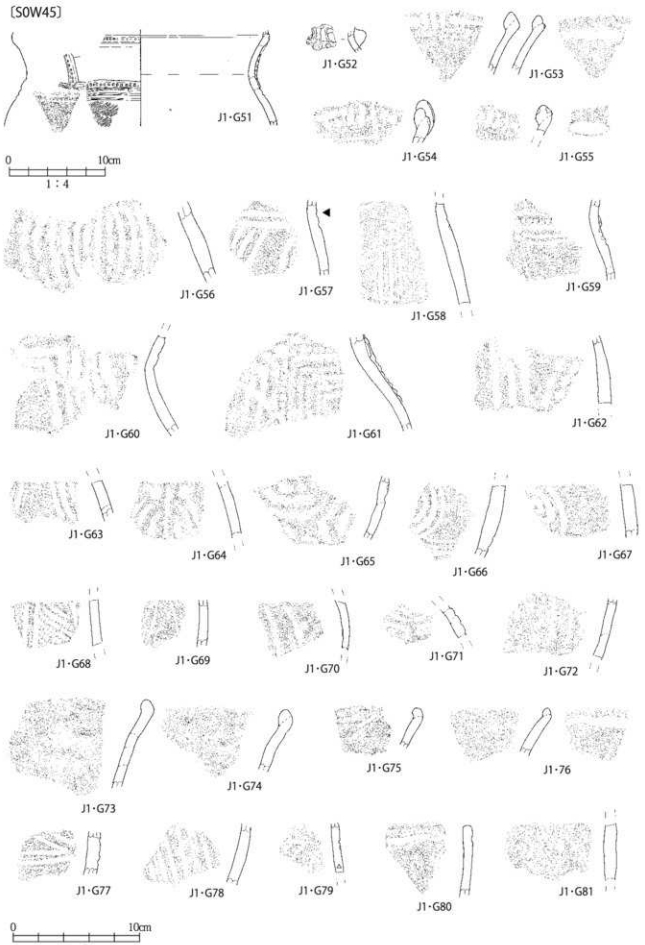


図47　1号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（3）

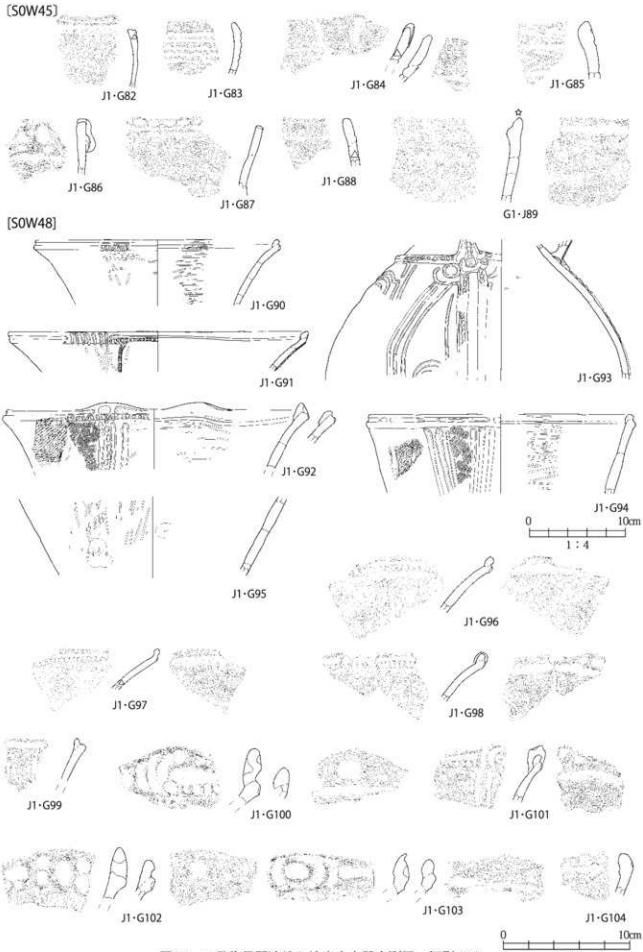


図48　1号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（4）

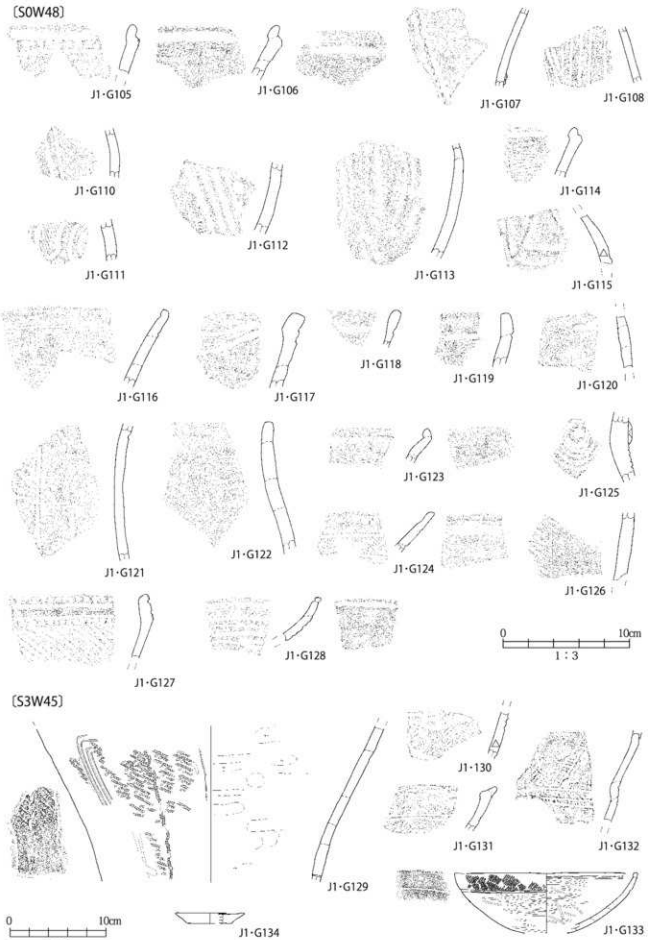


図 49　1 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（5）

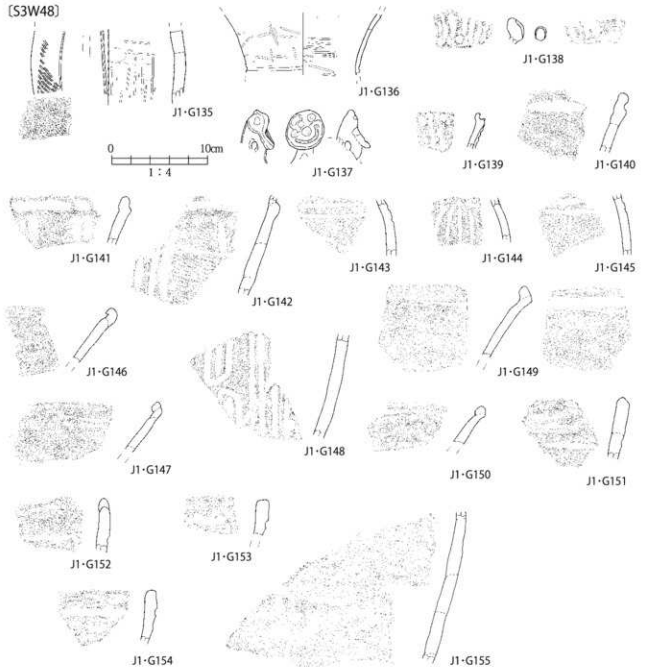


図 50　1 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（6）

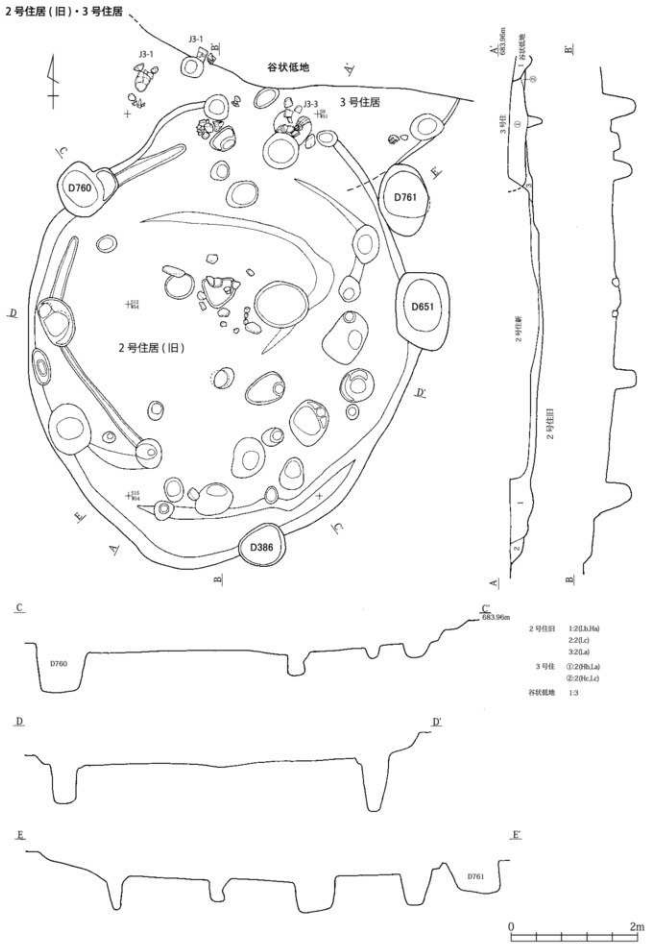
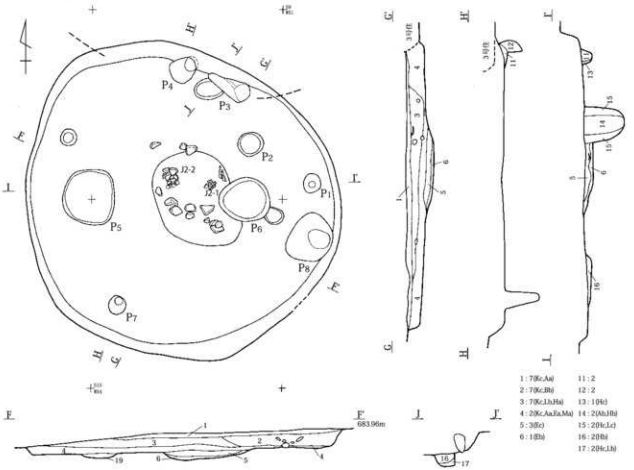
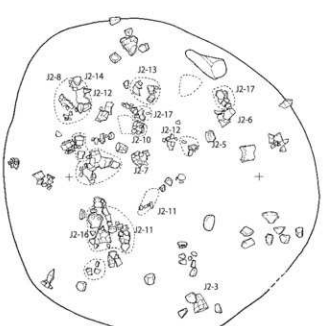


図51　2号住居(旧)・3号住居実測図

2号住居（新）





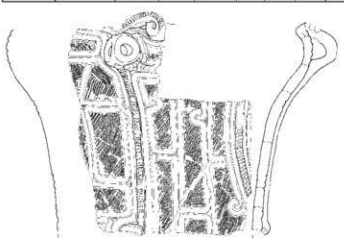
2号住居（新）遺物出土状況

0 2m
1 : 60

図52　2号住居（新）実測図

2号住居・3号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
2号住		61	19	8		19	21		4	3	4			3		7	1	2
	63610	24,980	2,240	270		2,590	2,610		60	70	120			240		150	10	70
3号住		1	8	18	1		10		2	1	1			1		5	1	1
	21520	1400	1770	630	60		760		20	10	20			20		60	60	10
S6W51		2	1	6		1	4	1	2	3	2		2	1		8	1	12
(3住)	5235	60	10	110		20	150	30	20	20	20		30	30		60	10	230
S9W48			1	3		4	7		8	1	2		3	4		25		18
(2･3住)	9995		10	90		80	510		270	20	30		80	30		680		990
S9W51		2	4	10		10	8	1	3		2		1	1	1	18		15
(2･3住)	12230	30	80	180		370	480	10	20		10		10	10	10	100		310
S12W48		0	4	6		2	10		6	7	5		1			23	1	13
(2住)	9975		340	130		100	530		120	150	90		50			330	10	480
S12W51		8	9	10		3	7	1	5	4			1	1		11	1	7
(2住)	9605	170	220	320		60	150	10	110	40			30	10		140	30	110
S12W54																		
(2住)	865																	
S15w51		3	1	4		4	5		9	3				1		12	1	11
(2住)	5590	270	30	150		80	220		140	50				10		180	10	240
S15W54																		
(2住)	95																	



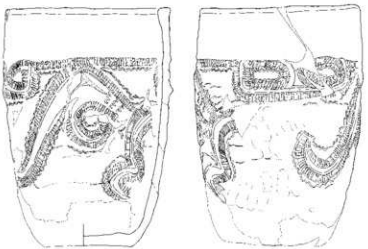
J2-1

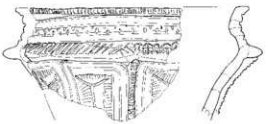
J2-2

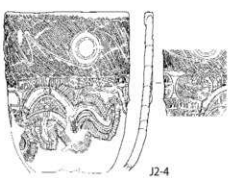
0 10cm
1：4

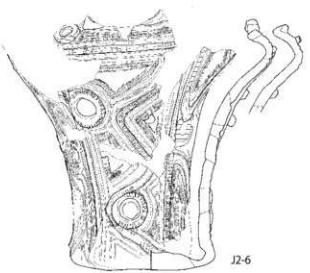
[2 号住居（新）]

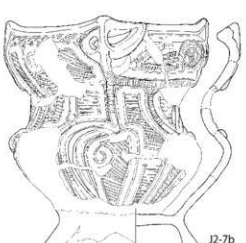
図 53　2 号住居（新）出土土器実測図（1）

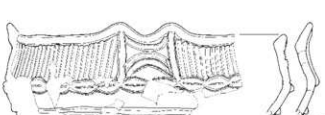












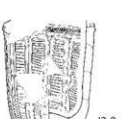
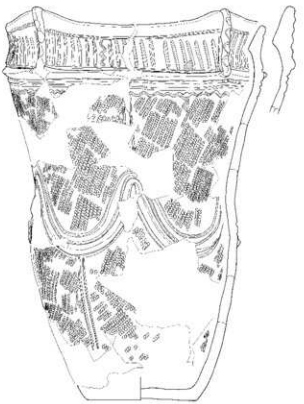


図 54　2 号住居 (新) 出土土器実測図 (2)

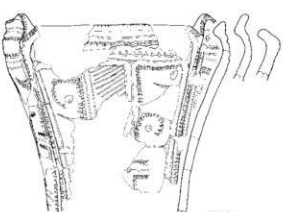
[2 号住居 (新)]

J2-10

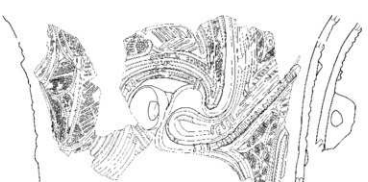


J2-11

J2-12



J2-13



J2-14

J2-15

0 10cm
1 : 4

図 55　2 号住居 (新) 出土土器実測図 (3)

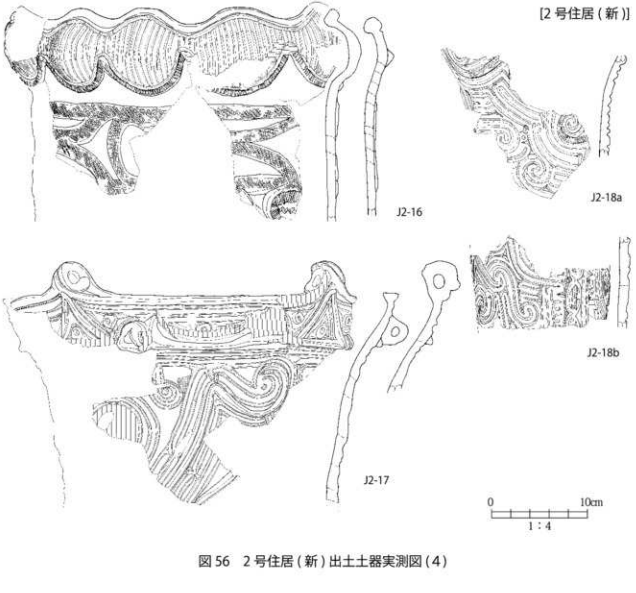


図 56　2 号住居 (新) 出土土器実測図 (4)

央が南北 150cm × 東西 130cm ほど浅くくぼみ、拳大の礫が散在し、焼土、炭、灰などは無いものの、損壊した炉の可能性は残るだろう。それに隣接した P6 は直径 40cm ほどと大きく、柱痕跡を残す。床面のピットはわずかで、P7 以外は浅い。柱穴は P6 と P7 にその可能性があるとするに留まる。北辺中央に柱状で長さ 40cm 程の巨礫が、壁にもたれかかるように横倒しになっており、その脇の P4 は壁に向かって斜めに掘り込まれて、40cm 程の深さがあった。両者は一連の存在で、祭壇に関連する可能性があろう。埋土 2 層～ 3 層 (床面直上) にかけて、完形品を含む多数の土器が残されていた。

実測可能な土器は 40 点近くあったが、そのうち 17 点を図示した (J2-1 ～ J2-17)。J2-15、J2-18 以外は床面直上かそれに近い位置からの出土品である。大半は中期中葉Ⅲ期に属すると思われるが、中期中葉Ⅵ期や中期後葉Ⅰ期が若干含まれる。また、J2-18 は北陸方面の土器だと思われる。

(3)　2 号住居 (旧) ［図 51、写真図版 6］【長野県史・中期中葉Ⅲ期より前】

S6W51 ～ S15W54 の 10 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。2 号住居 (新) の床面を除去し 10cm 弱下げて別の床面を検出、2 号住居 (旧) と判断した。2 号住居 (新) 床以下は 2 号住居 (旧) の埋土と考え、2 号住居 (新) の壁外の埋土層の広がりを手掛かりに掘り方を検出した。3 号住居と切り合い、土坑 386、651、760、761 と、埋甕 10 に切られることも平面的に確認した。南北 6.6m、東西 5.0m 程で、

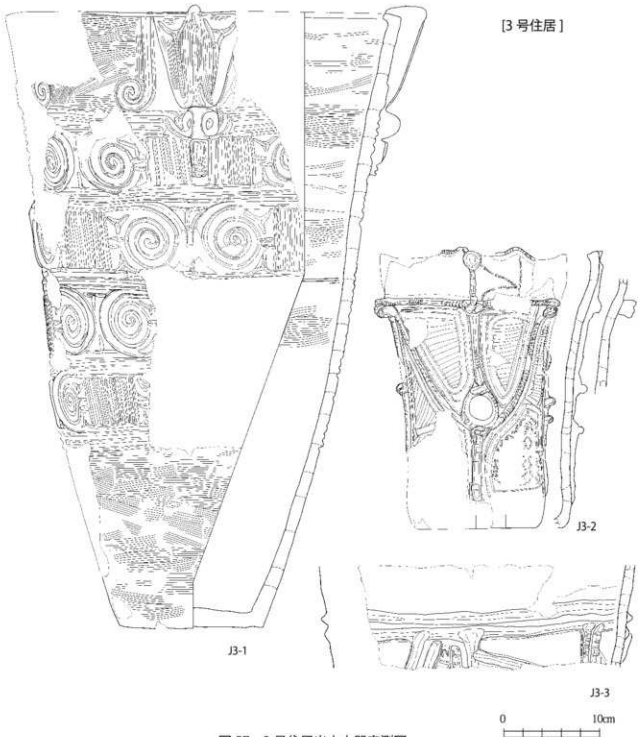


図 57　3 号住居出土土器実測図

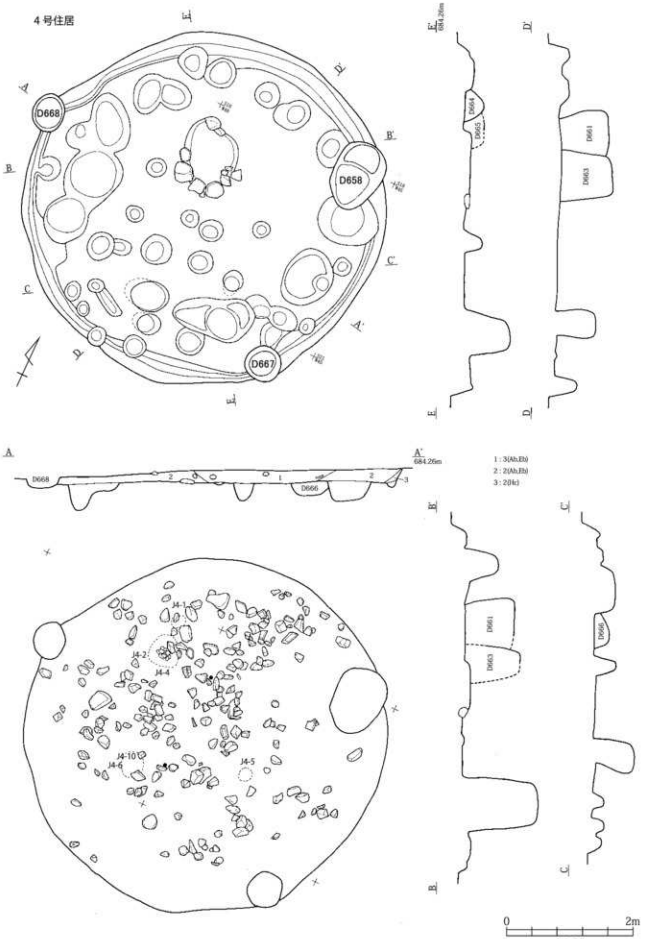

4号住居
D668
D658
D667
D664
D665
D661
D663
D666
J4-1
J4-2
J4-4
J4-10
J4-6
J4-5
1 : 3(Ah,Bh)
2 : 2(Ah,Bh)
3 : 2(Hc)
0
2m
1 : 60

図 58　4号住居実測図

4号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期							後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
4号住		3	7	62	8	16	27		2	1	1			1		5	1	1
	43055	100	260	10390	3550	370	2320		20	10	20			20		60	60	10
S15W45		1		7		2	4		7	6	2	4	1			30		7
(4住)	8100	30		380		70	120		80	90	40	50	40			310		320
S15W48			1	7		2	6		7	10	5	5	1	1		28	1	15
(4住)	9545		10	230		50	180		60	180	70	200	10	60		500	10	420
S18W45			2	21	7	5	8		2	5	4	1	3	1		21	3	20
(4住)	20700		40	1330	210	110	260		10	100	70	10	30	10		310	40	870
S18W48		2	2	26			13		4	3	4		1	1	1	26	1	9
(4住)	18575	10	30	940			690		120	80	60		20	10	10	370	10	240
S21W45		1		4					1	2	5					18		13
(4･7住)	5680	20		160					10	60	40					330		740
S21W48		1		4	2	2			12	38	40	6	3	2		58	10	35
(4･7住)	20090	10		120	50	30			110	1310	1140	420	30	80		890	50	980

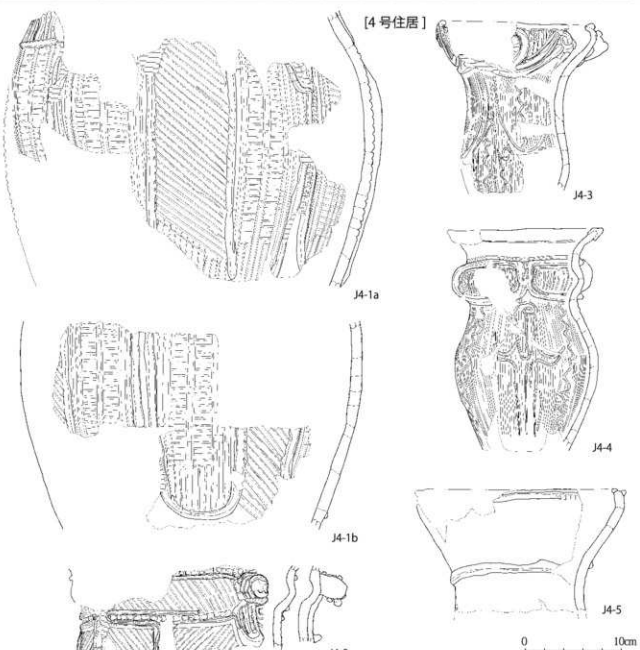


図 59　4 号住居出土土器実測図（1）

[4 号住居]

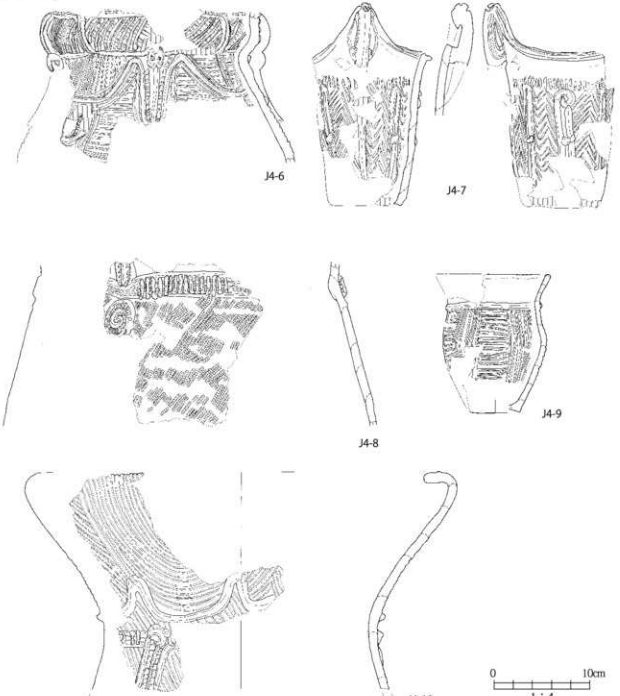
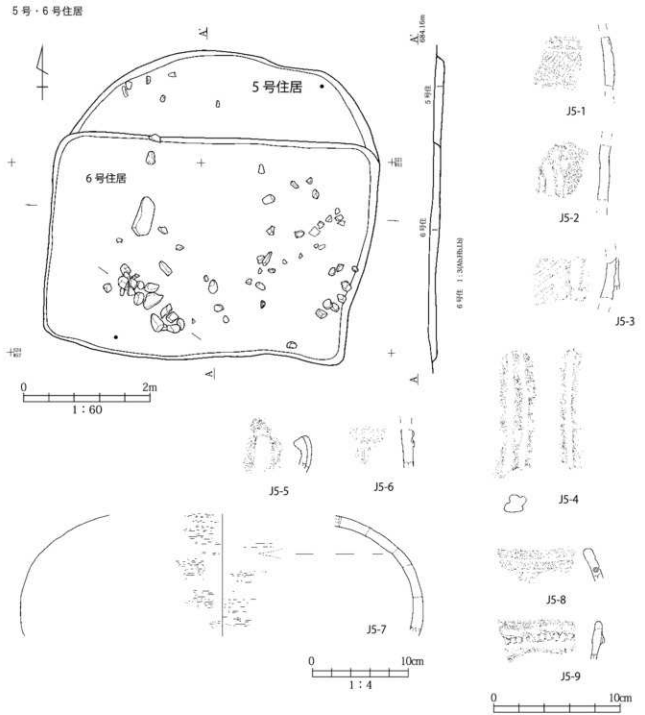


図 60　4 号住居出土土器実測図 (2)



5号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
5号住				1									1				1	
	1695			10									20				20	
S18W51			1	2		1		2	4	5	1		2			6	1	6
(5住)	3265		30	70		20		50	70	80	10		20			40	10	270
S18W54		1	1									1						
(5住)	1420	40	80									10						

図61　5号住居実測図、出土土器実測図・拓影

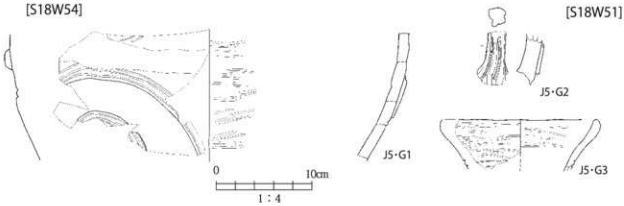


図 62　5 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影

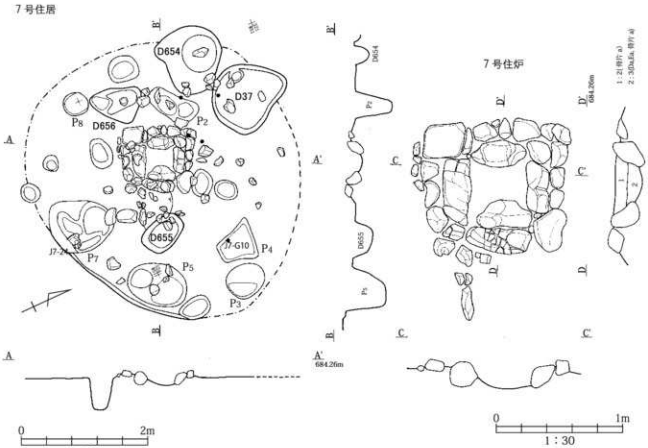
基本形は円形に近いが、北辺には 2 ヶ所突出箇所があり、南辺は全体がテラス状に拡大して、南北方向が長くなっている。埋土は北辺・南辺の縁辺以外は 1 層で分層できず、意図的な埋め戻しの可能性を考えても良いだろう。壁はほぼ垂直で、深さは最大 50cm ほどあり、床は硬くない。住居ほぼ中央に径 40cm 程度の不整形な浅い窪みがあり、その縁辺に拳大の礫が数個残されていた。焼土や灰などは見られなかったが、炉の可能性があろう。西壁より幾分内側に壁溝らしい小溝が認められ、北壁～北東壁より幾分内側にはわずかな段差があり、住居拡張の痕跡の可能性がある。住居南半を中心に、壁と小溝・段差との間に相当するスペースにはピットが多数設けられ、その多くが 50cm 程度の深さを持つ。組合せは不明だが主柱穴の可能性があるだろう。遺物はほとんど発見されず、図示し得る土器は無い。2 号住居新との切り合い関係から、中期中葉Ⅲ期以前と判断する。

(4)　3 号住居　［図 51、57、写真図版 6、40］【長野県史・中期中葉Ⅴ期～Ⅵ期】

S6W48～S9W51 の 4 グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で 2 号住居(新)の掘り方を検出するなかで、2 号住居と土坑 761 に切られ、谷状低地と重複する 3 号住居を検出した。しかし、検出できた掘り方や切り合いの線には不明瞭な点が残り、2 号住居（新）との前後関係だけでなく、住居の認定にも不安を残していた。谷状低地の第Ⅲ層・黒色土層が住居に大きく食い込んでおり、調査時点では谷状低地に切られると考えた。しかし、第 2 章第 1 節で述べたとおり、3 号住居の大部分は谷状低地埋土中に構築されたはずだ。住居廃絶後の浸食作用でその南縁以外が失われたと考えるべきで、調査時の所見を変更する。遺構図は訂正しようがないので、旧見解のままとするが、結果的に誤った図にはなっていない。住居の平面形・規模は不明で、埋土はほぼ 1 層と見られる。わずかに残った南東辺で、壁高は 10cm に満たない。小規模のピットが幾つか残るが、いずれも浅く性格は不明である。床面直上で J3-3 が、床面直上からなかば流路 1 埋土にかかって J3-1 が出土した。

出土土器は少なく、3 点を図示した。J3-1 と J3-3 は中期中葉Ⅴ期～Ⅵ期に属すると思われる。より古そうな土器 (J3-2) もあるが、この 2 点を根拠にすれば、3 号住居は中期中葉Ⅴ期～Ⅵ期に属することになる。

出土土器からは 3 号住居のほうが 2 号住居（新）より新しく、調査時の所見とは整合しない。調査時点の断面所見の中に、2 号住居（旧）の埋土中に 3 号住居の床を貼った、との記載もあり、調査時点でも 3 号住居の方が新しいとする見解があったようだ。だが、2 号住居（新）出土の倒れ掛かった立石は 3 号住居に食い込んでおり、2 号住居（新）が 3 号住居を切るのでなければ説明がつかない。今となっては明瞭な結論は出せないが、3 号住居は残骸的状態で検出され、掘り方も不鮮明な箇所があって、その存在自体が危う



7号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
7号住		6		2					3	4	1					2		2
	3665	160		40					1250	250	20					20		90
S21W45		1		4					1	2	5					18		13
(4･7住)	5680	20		160					10	60	40					330		740
S21W48		1		4	2	2			12	38	40	6	3	2		58	10	35
(4･7住)	20090	10		120	50	30			110	1310	1140	420	30	80		890	50	980
S24W45			1	6	1	1			1	3	11	1	5	1	1	21	1	17
(7･9住)	8325		10	160	10	10			10	40	220	10	40	20	20	430	10	560
S24W48		2		15	2	1		1	3	31	15	2	4	2		25	2	22
(7･9住)	13475	40		740	50	10		70	80	840	500	10	50	30		430	10	870

図63　7号住居実測図

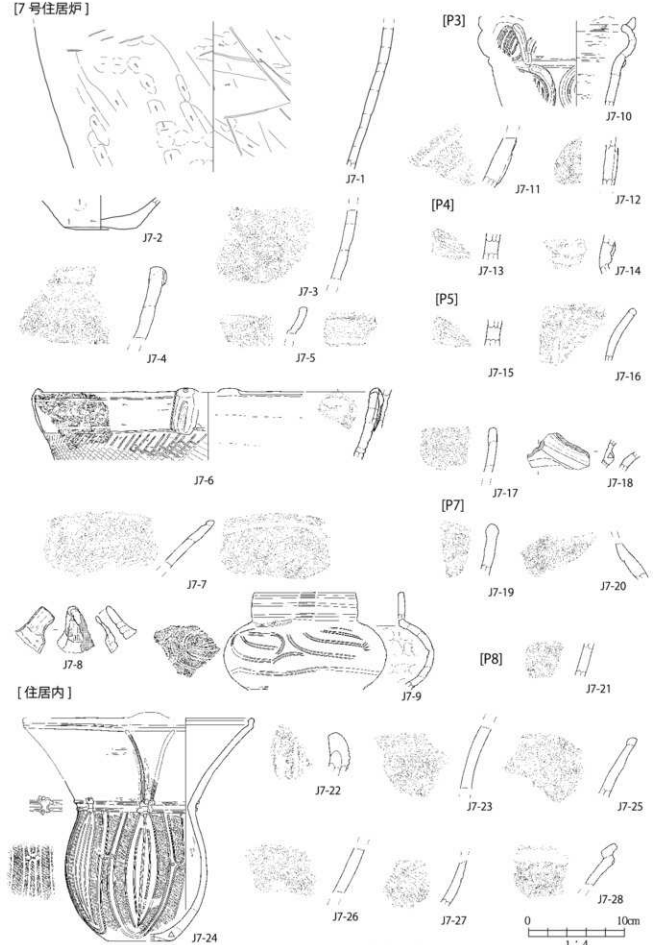


図 64　7 号住居出土土器実測図・拓影

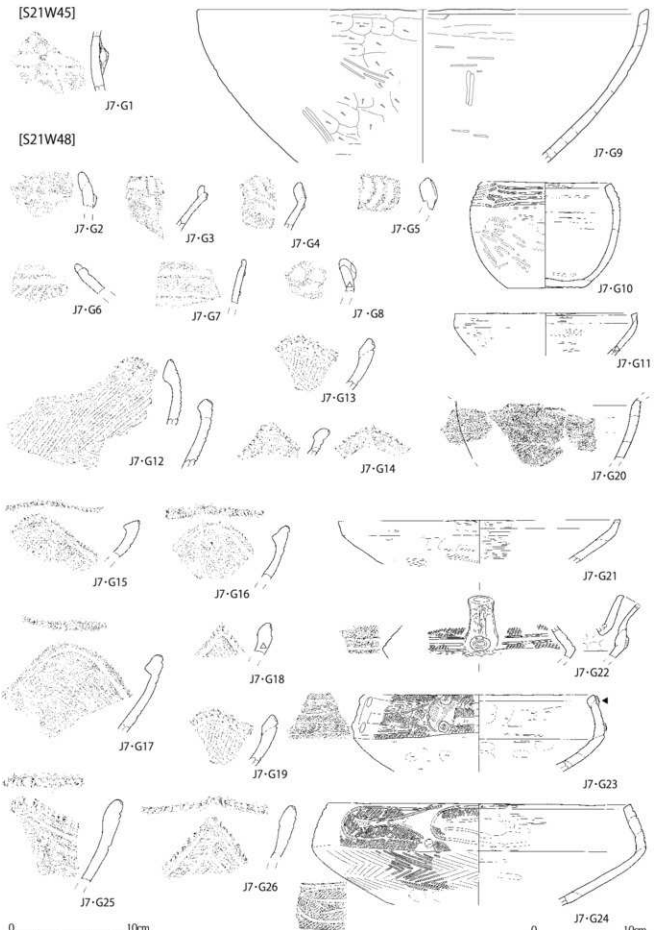


図 65　7 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影 (1)

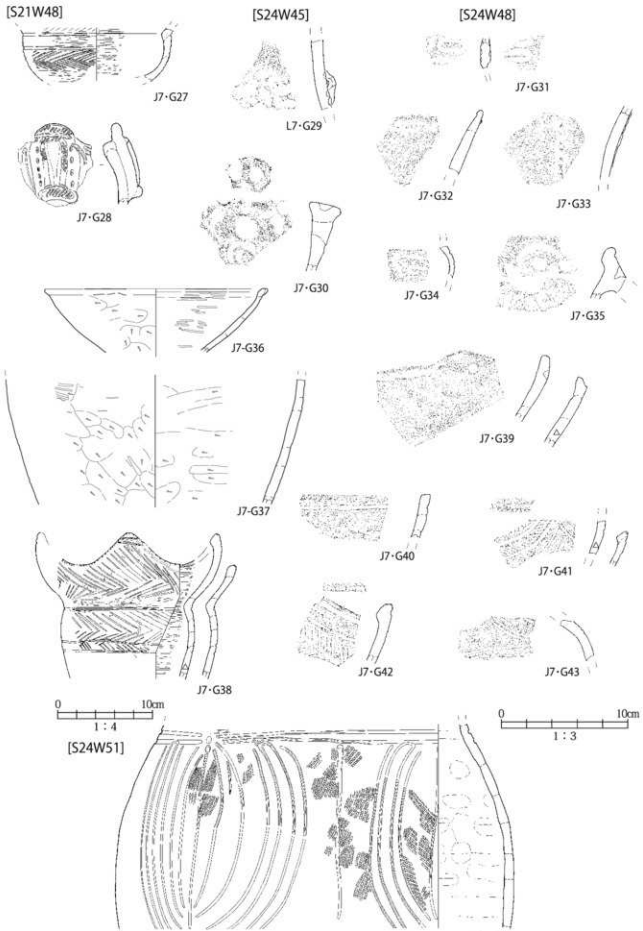


図 66　7 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

く、住居以外の何らかの遺構だった可能性もある。

2号住居・3号住居の遺構図は、3号住居 ⇒ 2号住居（旧）⇒ 2号住居（新）の順に構築されたとする調査時の所見に従って作成した。

(5) 4号住居 ［図 58 ～ 60、写真図版 7、40］【長野県史・中期後葉Ⅰ期～Ⅱ期】

S15W45 ～ S21W48 の 7 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、同時に 7 号住居の炉を検出したことから、7 号住居が 4 号住居の上に乗ることを確認し、土坑 658、土坑 667、土坑 668 を切ることも確認した。また、完掘後の床面で土坑 657、土坑 659 ～土坑 666、土坑 669 を検出、これらの土坑が 4 号住居に先行することを確認した。南北 5.6m、東西 5.7m のほぼ正円形で、埋土は水平方向には分層できず、住居中央だけがやや異なった埋土だった。壁はほぼ垂直で、壁高は 20cm ～ 30cm を測り、炉の周辺の床は叩き締められて硬い。住居中央の北辺に寄った辺りに、南北 130cm、東西 70cm、深さ 10cm 程度の浅い掘り方の縁に、人頭大の礫の平坦面を上向きに揃えて並べた石囲炉があるが、内部には焼土等はなかった。壁直下には浅い壁溝がほぼ全周する。壁溝の内側に沿うように、大形のピットが多数並ぶ。いずれも 30cm ～ 50cm の深さがあり、これらの中に柱穴が含まれるのではなかろうか。床面直上出土遺物はほとんど無く、大半が床から 10cm 程度浮いて出土した。

完形品を含め土器大形破片が 30 点以上あり、そのうち 10 点を図示した。その大半は中期後葉Ⅰ期で、J4-3、J4-4 、J4-7 などは中期後葉Ⅱ期に下がる。中期後葉の土偶胴部上半と脚先端が 1 点ずつ出土しており、いずれも 4 号住居に帰属する可能性があるだろう。また、後期以降の土偶脚部破片が 1 点混入している。出土土器から見て 4 号住居は中期後葉Ⅰ～Ⅱ期に属するだろう。

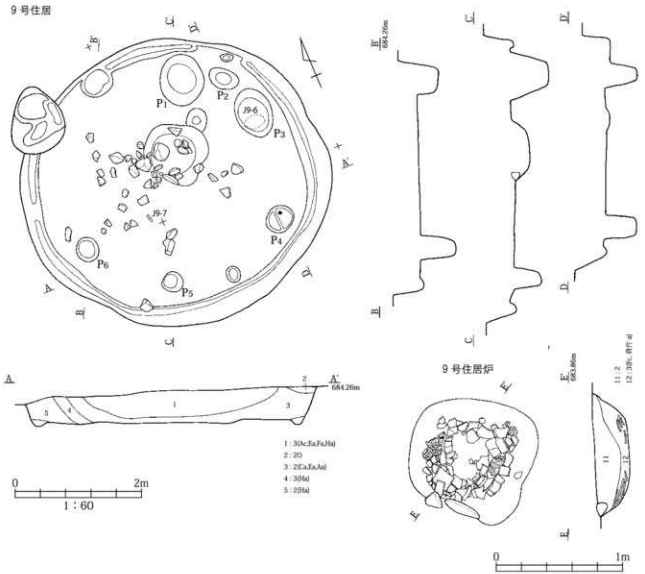
(6) 5号住居 ［図 61・62、写真図版 8］【長野県史・中期中葉前後】

S18W51 ～ S18W54 の 2 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅲ層は薄く、第Ⅲ層中の礫群を除去したところで掘り方を平面的に検出し、同時に 6 号住居に切られることも確認した。東西 4.8m 以上の円形基調の平面形で、埋土は分層できなかった。壁はほぼ垂直で、壁高は 10cm 程度しか残っていなかった。床はほとんど硬化していない。住居の 2/3 程度は 6 号住居に切られて失なわれた為、床面施設は不明である。土器は全て埋土出土だが、埋土は浅いので床面近くの出土だと考えてよい。壁・床とも曖昧で施設も全くないので、誤認遺構の心配もある。

唯一の大形破片は J5-7 で、中期中葉前後かと推測するが確証はない。J5-1 ～ J5-6(中期後葉)、J5-9(晩期初頭) は小破片に過ぎない。住居周辺のグリッドも遺物がわずかしかないが、大きめの破片を探して図示した。J5•G1 は全体像が不明だが J5-7 に近いのではなかろうか。それ以外は中期後葉かと思われる。中期中葉前後に属する可能性がある住居だが、その認定は不安である。

(7) 7号住居 ［図 63 ～ 66、写真図版 8、9、40］【加曽利 B2 式後半 (堀ノ内 1 式後半？)】

S21W45 ～ S24W51 の 6 グリッドにかけて位置する住居である。第Ⅳ層上面で 4 号住居や 9 号住居とほぼ同時に炉を検出し、その形態から縄文時代後期の住居の存在を予想した。しかし掘り方はほとんど把握できず、9 号住居と重複する南東辺のみ、9 号住居埋土を切る輪郭を把握した。炉周辺を掘り下げてから検出した土坑 37、土坑 654 ～土坑 656、土坑 669 は、7 号住居が上に乗ると判断した。南東辺以外不明なので、平面形は不明、規模は径 4.0m 以上との推測ができるに留まり、埋土は残っていない。炉は 120cm × 100cm 程の浅い掘り方の縁辺に二重に人頭大以上の礫を配置した、方形の石囲炉である。炉内には焼土がわずかに残されていた。縁石は被熱して表面がぼろぼろになっていた。中越遺跡 (上伊那郡宮田村) から



9号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
9号住		5	3	64			23	1	33	33	13	5	3			58	4	36
	54235	50	200	16070			2180	10	570	1820	270	70	30			1080	20	940
S24W45			1	6	1	1			1	3	11	1	5	1	1	21	1	17
(7･9住)	8325		10	160	10	10			10	40	220	10	40	20	20	430	10	560
S24W48		2		15	2	1		1	3	31	15	2	4	2		25	2	22
(7･9住)	13475	40		740	50	10		70	80	840	500	10	50	30		430	10	870
S27W45		1	1	4				1	4	2	6	1				16	1	9
	5950	90	20	70				10	70	10	130	10				920	10	230
S27W48		2		8		1					3					5	4	6
	6945	80		680		10					20					40	20	470

図 67　9号住居実測図

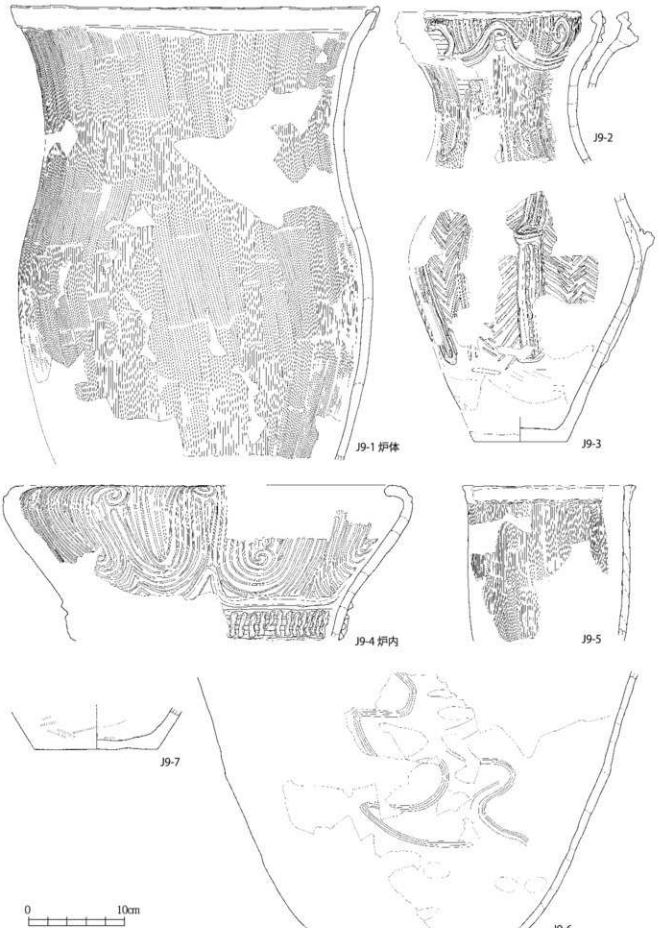


図 68　9 号住居出土土器実測図

は加曽利 B1 式～上ノ段式の不整円形竪穴住居や方形石囲住居、多重の石囲炉などが発見されている［小池 2002］が、中でも 339 号住居（上ノ段式）の炉は、7 号住居の石囲炉とそっくりである。硬化した床面も無く、炉と同レベルを床面と考えて精査した結果、ピットを 10 基ほど検出した。このうち南東辺の P3、P5、P7 は 50cm 程度の深さで規模も大きく、柱穴や出入り口施設などの一部の可能性があろう。床面出土として取り上げられた遺物はわずかで、大半は炉やピットからの出土である。住居唯一の完形土器 J7-24 は、P7 に半分入り込んだ状態で出土した。

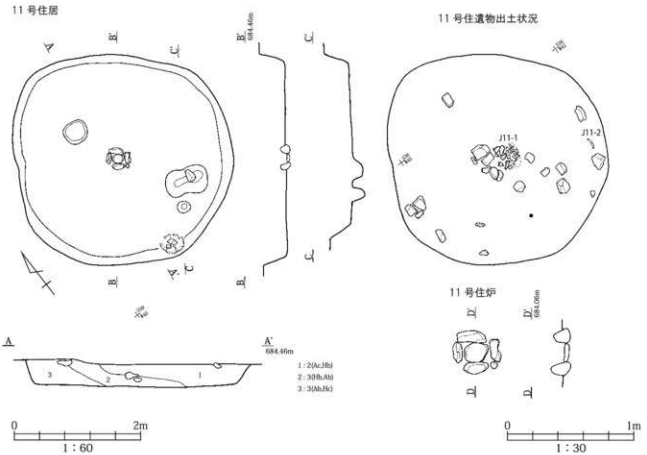
炉の形態からは後期前葉～後葉に帰属することが推測される。では、土器からはさらに時期を絞り込めるか。J7-1 ～ J7-9 は炉内、J7-10 ～ J7-12 は P3、J7-13・J7-14 は P4、J 7-15 ～ J7-18 は P5、J7-19 ～ J7-20 は P7、J7-21 は P8 からの出土である。炉内出土の J7-1 は器壁が厚い無文粗製深鉢体部破片で、1 号住居出土の S1-3 のような堀ノ内 1 式の類例の可能性があるが、J7-4 のような加曽利 B2 式の無文粗製深鉢も体部破片はよく似ており、識別は難しい。J7-3 ～ J7-7 は加曽利 B2 式後半の特徴を備えている。時期不明の J7-8 と「つ」の字文が崩れた J7-9 は加曽利 B2 式に後続する可能性があるが、時間的に大きく隔たることは無いだろう。J7-1 が加曽利 B 式の粗製土器なら、ほぼ加曽利 B2 式後半に限定的なひとまとまりの資料となるかもしれない。P3、P4、P8 出土土器はいずれも中期だが、J7-10 を除けば細片ばかりなので、7 号住居が切る中期の 9 号住居からの混入品ではなかろうか。P5、P7 も細片で時期決定の決め手にはなりそうもない。問題は完形品の J7-24 で、堀ノ内 1 式後半に位置づき、炉内出土土器とは整合しない。施設外出土品は小破片で、中期（J7-22、J7-23）、堀ノ内 2 式（J7-25）、加曽利 B2 式以降（J7-26 ～ J7-28）と時間幅がある。

7 号住居の土器の時期別個体数・重量表では堀ノ内式が突出するが、完形品 J7-24 を除けば加曽利 B2 式の方が優勢だ。周辺グリッド、特に住居と完全に重複する S21W48 では堀ノ内式は微量で、加曽利 B 式と上ノ段式が圧倒的多数を占める。J7-24 の出土状況を積極的に評価すれば、7 号住居は堀ノ内 1 式後半に位置づくことになるが、炉内出土資料のまとまりの良さやグリッドを含めた土器の出土状況からは、加曽利 B2 式後半に帰属する可能性の方が高いのではなかろうか。なお、周辺グリッド出土の堀ノ内 1 式、加曽利 B2 式後半、上ノ段 1 式を、参考までに図示した。なお、J7・G8 と J7・G10 は加曽利 B1 式である。

(8) 9 号住居 ［図 67、68、写真図版 9、10、41］【長野県史・中期後葉Ⅱ期】

S24W45 ～ S27W48 の 4 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、同時に土坑 57、土坑 704、土坑 706 を切り、土坑 54 に切られること、最終的には 7 号住居にも切られることも確認した。南北 4.6m、東西 4.8m の正円形の平面形で、埋土は大きく 2 分でき、壁際には別の埋土層も見られ、一定の時間をかけた自然埋没の可能性がある。壁はほぼ垂直で、壁高は 50cm 程度と比較的良好に残っていた。床は中央が硬化しており、壁際には深さ 10cm 程の壁溝が全周する。住居中央やや北辺寄りに、径 100cm、深さ 50cm ほどの略円形の掘り方を設け、その底に土器片を敷き詰めて炉を構築している。土器片は外面を上に向けて置いたものが多い。いわゆる土器敷炉で、この炉体土器（J9-1）が住居の時期決定の最大の根拠となる。壁溝内側沿うようにピットが並んでいるが、30cm ～ 70cm の深さがあり、柱穴の可能性がある。遺物は床面よりわずかに浮いて出土した。

実測可能な土器は 10 点以上あるが、そのうち 7 点を図示した。炉体土器 J9-1 は中期後葉Ⅱ期前後、それ以外も J9-6 を除けばほぼ同時期ではなかろうか。なお、後期以降と思われる耳飾 1 点、晩期前葉の耳飾 1 点が混入している。



11 号住居・関連ﾌﾟﾘｯﾄ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期						晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K		前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
11 住		7		1		1	6		1								4		
	3160	1130		30		10	410		10								30		
S33W42		1		2		3	4		5	1							7		5
(11 住)	4705	40		80		30	180		70	10							60		160
S36W42		2	2	2	2	12			13	3	3			1			20		16
(11 住)	7155	50	70	160	50	50			140	40	30			10			150		310
S36W45		2	1	2		3	0		4	3		1			1	2		6	1
(11 住)	3260	150	70	30		130	0		10	40		10			30	20		50	10

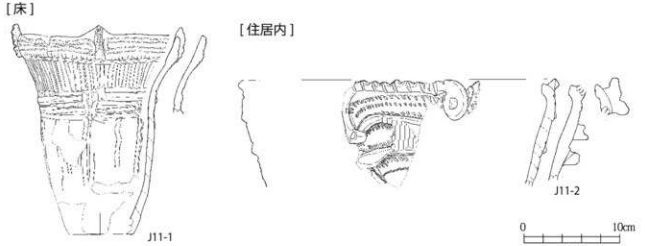


図 69　11 号住居実測図、出土土器実測図

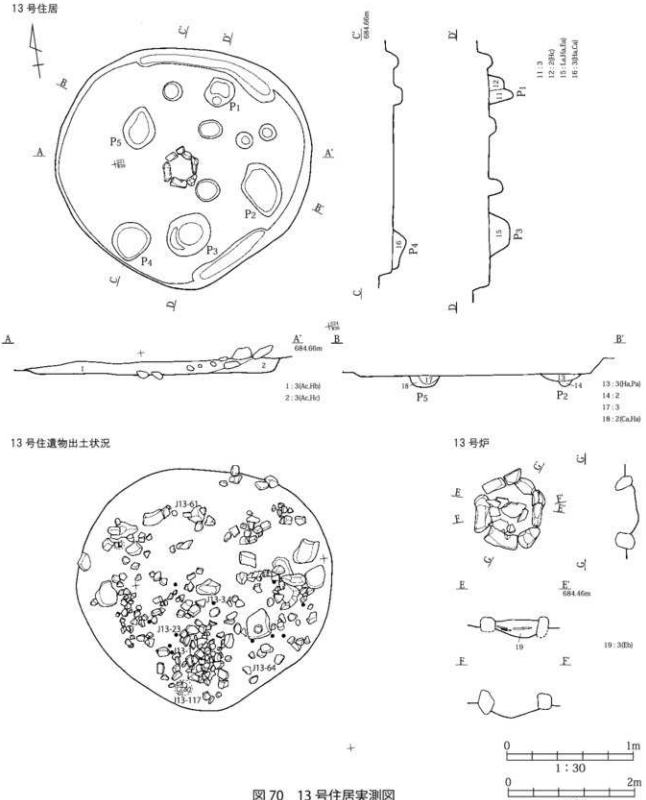


図 70　13 号住居実測図

13 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
13 住				3			3		1	5	7	6	44	19	1	202	5	65
	36150			120			90		10	90	170	70	1350	1200	70	5600	100	3610
S18W36			1						5	5	10	12	17	6	6	122	6	59
（13 住）	26645		360						40	70	170	290	360	70	110	1920	40	2120
S18W39			1	4			3		3	3	7	6	10	2	1	51	1	26
（13 住）	12840		10	180			1030		30	40	90	100	190	20	20	1180	10	880
S21W36				1					2	8	9	5	39	39	9	211	18	110
（13 住）	41430			60					20	130	190	100	700	580	180	2750	170	4280
S21W39					1					4	7	6	8	8	3	46	3	37
（13 住）	11280				20					70	120	90	200	180	60	870	40	2330

［炉］

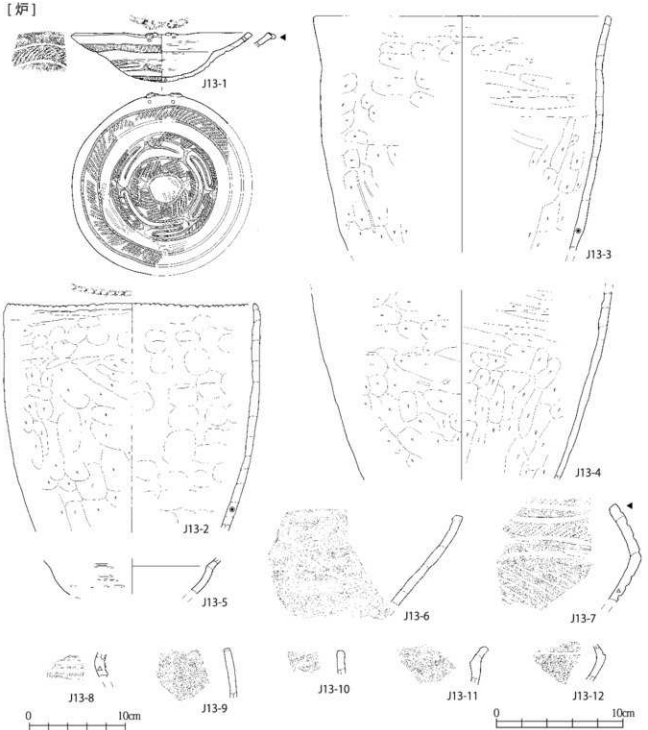


図 71　13 号住居出土土器実測図・拓影（1）

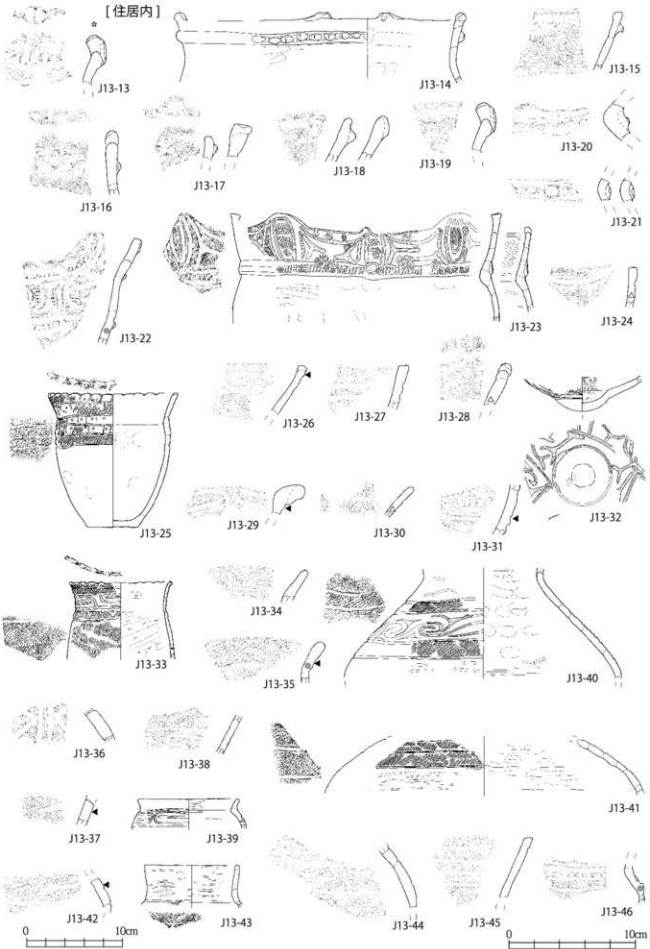


図 72　13 号住居出土土器実測図・拓影（2）

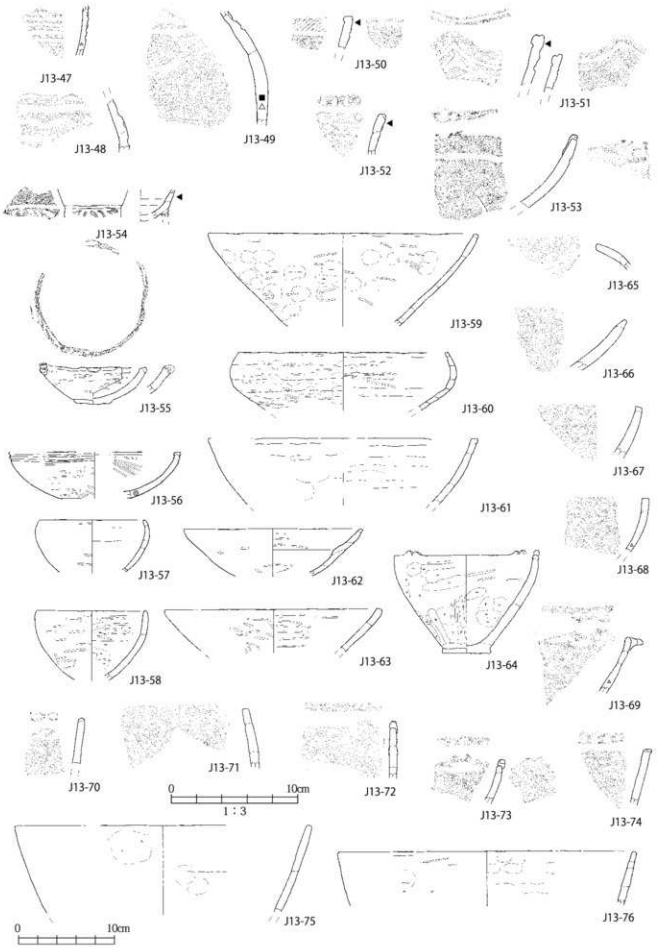


図 73　13 号住居出土土器実測図・拓影（3）

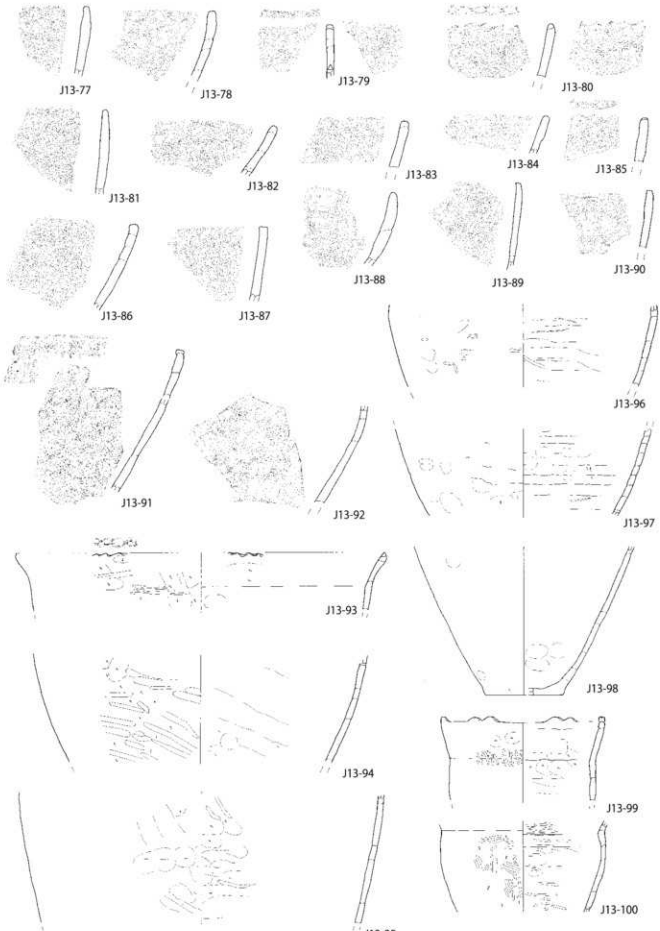


図 74　13 号住居出土土器実測図・拓影（4）

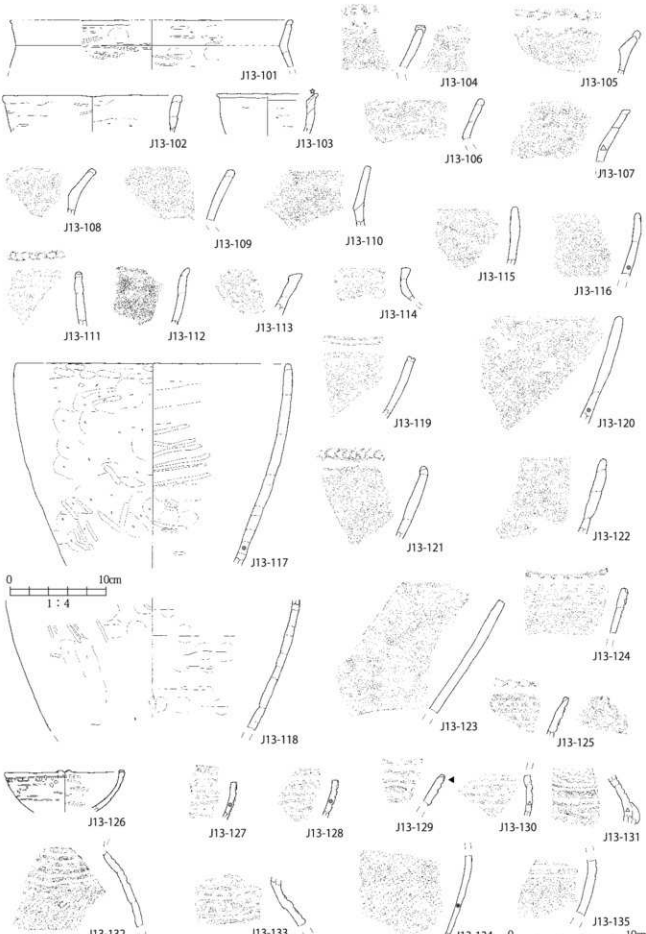


図 75　13 号住居出土土器実測図・拓影（5）

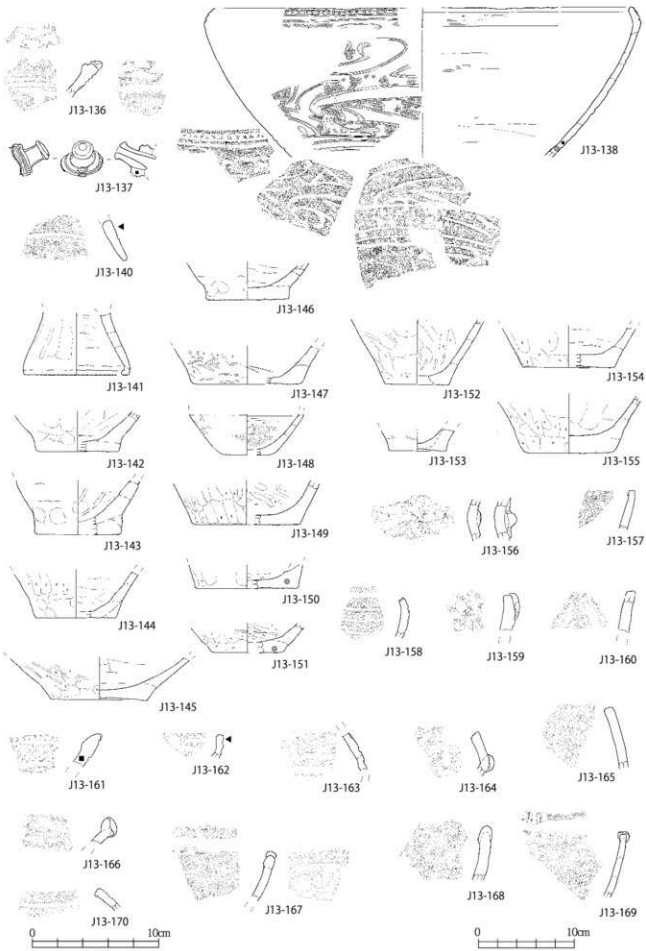


図 76　13 号住居出土時実測図・拓影（6）

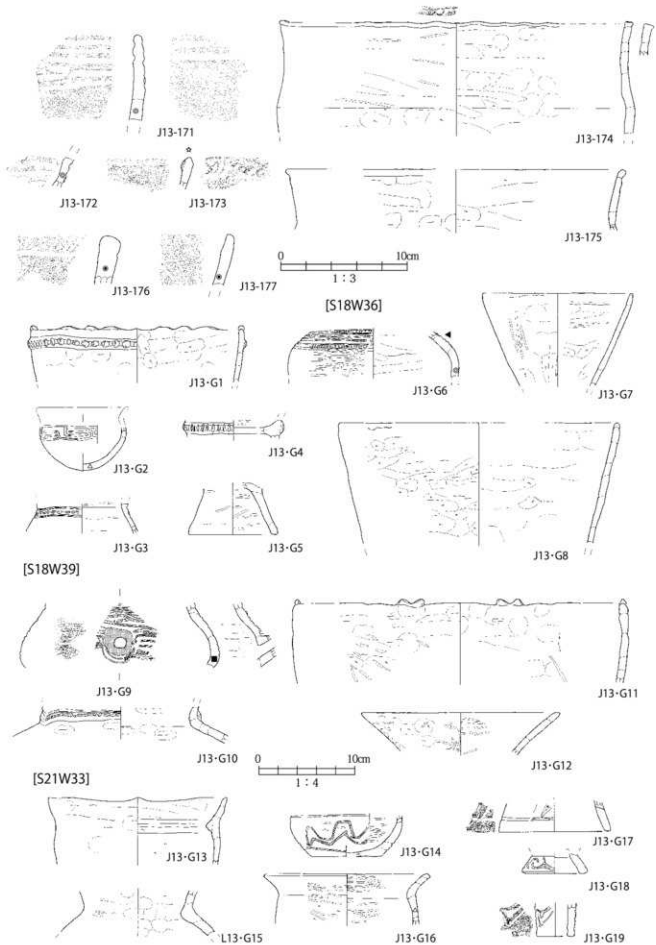


図 77　13 号住居出土土器実測図 (7)、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影 (1)

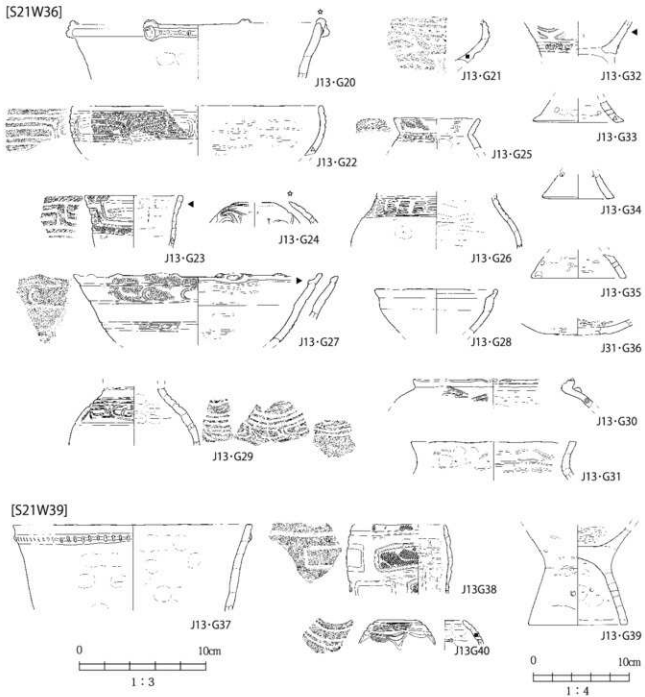


図 78　13 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

(9) 11 号住居 ［図 69、写真図版 10、11、41］【長野県史・中期中葉Ⅱ期～Ⅳ期】

S33W42 ～ S36W45 の 4 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、同時に土坑 164、土坑 731、土坑 732 を切り、埋甕 1 に切られることを確認した。南北 3.6m、東西 3.6m、小形で正円形の平面形をもつ。埋土は 3 層に分層でき、住居北辺側から埋まっていったように見て取れるので、人為的な埋め戻しの可能性、あまり時間をかけない自然埋没の可能性などを考慮したい。壁はほぼ垂直で、壁高は 30cm ～ 40cm ある。床は住居中央が叩き締められて硬い。住居ほぼ中央付近の径 40cm ほどの範囲に、床をわずかに窪めて平石を置き、その四周に礫 4 個を立て並べて縁石とした小さな石囲炉がある。炉内に焼土はない。炉を除いて、床面には浅いピット 1 基以外の施設は発見できなかった。遺物は少ないが、床面直上から J11-1 が出土した。

実測可能な土器は図示した 2 点だけで、中期中葉Ⅱ期～Ⅳ期の幅の中に収まるだろう。

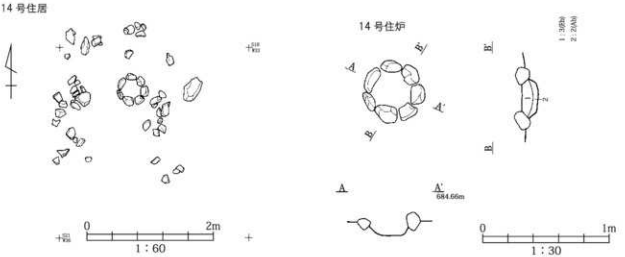
(10) 13 号住居 ［図 70 ～ 78、写真図版 11、12、41］【佐野 1a 式～佐野 1 b 式】

S18W33 ～ S21W39 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で検出した配石 7 の完掘後に、その下から住居の掘り方を平面的に検出し、同時に土坑 97、土坑 627 を切ることを確認した。南北 3.9m、東西 4.0m、小形で円形の平面形である。埋土は水平方向には分層できず、住居東辺側から埋まったように見えるので、人為的な埋め戻しの可能性もありうる。壁高は南東側 20cm ～北西側 10cm 程度で、辛うじて壁を把握したと言えよう。北辺と南辺の壁際には浅い壁溝が認められる。床の硬化面は炉の周辺にだけ認められる。住居中央付近の径 60cm ほどの範囲をわずかに窪め、窪みの縁辺に人頭大の円礫 8 個を立てて並べた石囲炉がある。炉床には焼土は無いが、縁石の一部は被熱していた。炉内には大きめの土器片が残される。大き目のピット 5 基 (P1 ～ P5) は深さ 20cm ～ 40cm とやや浅いが、柱穴の可能性があるだろう。住居内出土遺物は少なくないが、埋土の薄さからして床面近くからの出土品ばかりだ。中でも J13-1、J13-3、J13-4、J13-23、J13-155 等は床直上で取上げられたが、その内、J13-1、J13-3、J13-4 は炉内出土破片と接合した。

炉内出土の無文粗製深鉢の半完形品 J13-2 が、時期決定の鍵を握る。J13-2 は外面こそ広汎にケズリが行なわれるが内面はオサエ痕がまるごと残り、器壁も薄く、中ノ沢 B 類型の隆帯文深鉢と共通の成形・整形技法を示す。炉内出土の小破片 J13-6、J13-9 も同様である。炉内出土とした無文粗製深鉢はあと 2 点あるが、J13-3 は炉内から出土した小破片 3 片が床直上出土の大破片と接合し、J13-4 も同様だったので、厳密には炉内出土とは言い切れない。J13-3 は外面・内面とも全面的にケズリを行って器面はフラットに近く、佐野 2 式に近い成形・整形技法を示すが、典型的な佐野 2 式より器壁が薄く、精度の高い隆帯文深鉢とならばかなり近い。J13-4 も一見すると J13-3 同様の全面的ケズリで仕上げているが、隆帯文深鉢で卓越する深いオサエ痕が消しきれておらず、器壁に帯状の凹部が明瞭に残存する。隆帯文深鉢と佐野 2 式深鉢の両者の様相を備えているかのごとくである。ともあれ、炉内出土土器からは、13 号住居が晩期初頭～中葉の幅の中に位置づきそうなことが推測できる。

J13-7、J13-12、J13-156 ～ J13-170 は後期に属し、破片も小さいので混入品として除外できる。J13-13 ～ J13-19 は中ノ沢 B 類型の隆帯文深鉢で、J13-13 以外はその末期・中ノ沢第 5 段階だ。この器種はエリ穴遺跡では完形品も多く、その第 5 段階までは器種構成の中核を占めていたと思われる。だが 13 号住居のそれは小破片ばかりで、主要な構成要素とは言い切れなくなっている。隆帯文土器からは、晩期初頭ではなく前葉以降の様相だと推測できる。

入組文・三叉文系の土器のうち、J13-22 や J13-23 は外反する幅広い口縁部を文様帯とする深鉢で、口縁端部に隆帯を巡らす場合があるタイプだ。隆帯文土器との繋がりを考慮すべきで、晩期初頭～佐野 1a 式



14 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
14住																3		
	440															300		
S15w30		1	1	3					3	8	29	16	18	9	1	102	14	45
(14住)	19555	10	60	50					10	70	470	310	290	110	10	960	170	2050
S15W33			1	2		1			1	6	8	9	12	11	2	76	8	57
(14・15住)	12995		170	100		30			10	60	180	160	200	140	40	880	80	2330
s15W36				1				1	5	11	8	5	11	21	1	104	10	59
(15住)	27165			40				50	60	130	160	90	200	480	70	1110	90	2120
S18w30				1					1	8	12	5	2			34	1	12
(14住)	6405			20					10	220	240	120	10			320	20	600
S18W33				1					1	8	5	14	27	10	6	112	5	57
(14住)	26130			20					10	110	90	170	370	140	180	1330	30	1970
S18W36			1						5	5	10	12	17	6	6	122	6	59
(13住)	26645		360						40	70	170	290	360	70	110	1920	40	2120

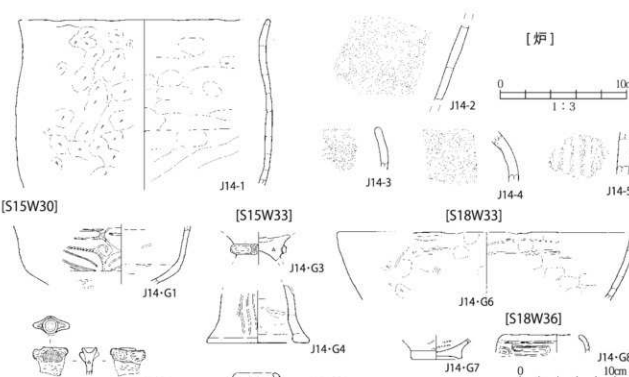


図 79　14 号住居実測図、出土土器実測図・拓影、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（1）

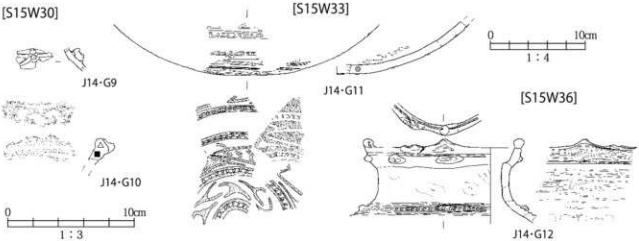


図 80　14 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

段階（宮崎遺跡 2 号住居段階）まで幅がありそうだ。J13-25 は文様帯が肩部にまで拡大しており、J13-23 等に後続するのではなかろうか。中村中平遺跡で指摘された壷形鉢は、深ければ壷形、浅ければ浅鉢形をとり、J13-1、J13-32、J13-39 などはその仲間と思われる。J13-1 は破片の 1 片が炉内出土で、底部まで施文されるが、その構図は環形耳飾と関連性があるかもしれない。J13-40、J13-41 も壷形鉢に似た器形だが、大形なので別器種とすべきかもしれない。肩部文様帯の多段化に注意しておこう。鍵ノ手文をもつ J13-33 と J13-45 は別器種で、J13-33 は佐野 1a 式に近く、J13-45 はより新しいだろう。J13-171 はハンガー形の構図ではなさそうだが、唯一の佐野 2b 式だ。大洞式系の土器のうち J13-127、J13-128、J13-133 は大洞 BC 式、J13-137 と J13-138 は大洞 C1 式に関わるだろう。総じて晩期初頭はわずかで、佐野 1a 式～ 1b 式が主体のように見受ける。

粗製土器は平縁隆帯文深鉢と同一技法で造る J13-95 等と、第 2 分冊で報告する土坑 200 出土一括資料に含まれる佐野 2a 式と同一技法で造る J13-117 等が並存する。後者が佐野 1b 式以前に遡る可能性は十分にある。J13-174 の肩部に稜を持つ深鉢は、浮線文期の甕の祖形になる可能性があって後出的だ。浮線文甕も 1 点含まれる（J13-175）。粗製深鉢の位置付けにはまだ暫くかかりそうだが、入組文・三叉文系の土器の様相とは矛盾しないだろう。13 号住居出土土器は時間幅がありそうで評価は難しいが、佐野 1a 式～佐野 1b 式の幅の中には収まりそうだ。なお、隣接グリッド出土の晩期前葉～中葉の主要な土器を参考までに掲載した。

土製品のうち土版 1 点とボタン状を呈する土製品（東北北部のボタン状土製品とは異なる）、スタンプ形土製品、遮光器系中空土偶の脚部 1 点、耳飾 3 点は 13 号住居の主体的な土器と整合しそうだが、浮線文期の土偶の手先 1 点はより新しく、耳飾 2 点は後期の産だ。これらは、第 3 分冊で図示する。13 号住居周辺のグリッド出土土器のうち、佐野 1a 式～佐野 1b 式に関わりそうな土器を参考までに図示した。なお、J13･G9 は後期末の注口土器である。

(11)　14 号住居　［図 79 ～ 80、写真図版 13］【晩期初頭～前葉型式】

S18W33 グリッドに位置する炉のみ把握できた住居である。その範囲は不明だが、S15W30 ～ S18W33 の 4 グリッドに広がっていた可能性があるだろう。第Ⅲ層下位～第Ⅳ層上面で石囲炉を検出したが、床は不明瞭で、壁の輪郭も発見できなかった。炉縁石の基底部と同レベルで、15 号住居の石囲炉上部が検出されたので、15 号住居埋土中に 14 号住居は構築されたと判断される。15 号住居以外に切り合う遺構は無く、平面形も規模も不明である。石囲炉は推定される床面を径 40cm、深さ 10cm 程度掘り窪めて、人頭大の縁

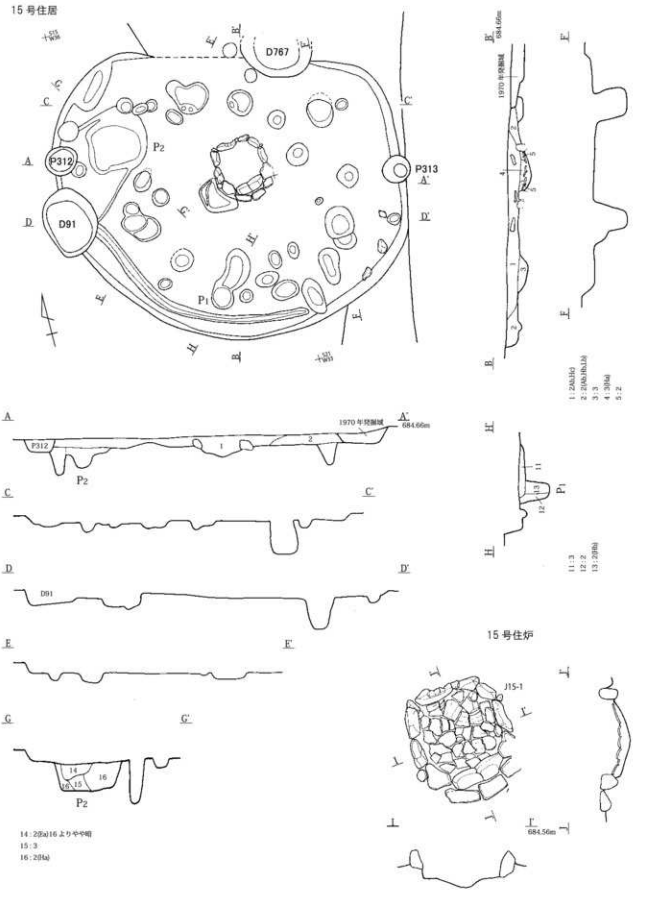


図 81　15 号住居実測図

15 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K		前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
15 住			1	3	2		7										1		
	15225		60	130	80		460										10		
S15W33			1	2		1			1	6	8	9		12	11	2	76	8	57
(14･15 住)	12995		170	100		30			10	60	180	160		200	140	40	880	80	2330
s15W36				1				1	5	11	8	5		11	21	1	104	10	59
(15 住)	27165			40				50	60	130	160	90		200	480	70	1110	90	2120

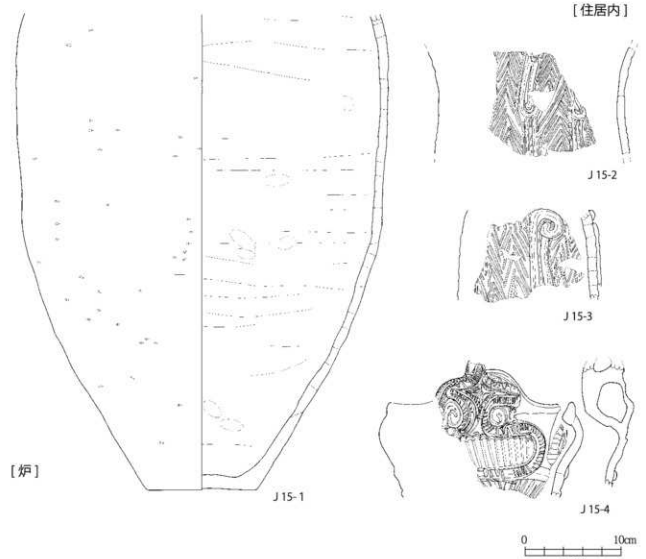


図 82　15 号住居出土土器実測図

石を円形に配置する。縁石の一部は被熱で風化が進み、炉内に焼土は無く、炉以外の施設は発見できなかった。

輪郭も床面も把握できなかったので、14 号住居出土として取り上げることができたのは、炉内出土土器だけで、図示しうるのは 5 点のみである。唯一の大形破片 J14-1 は無文粗製深鉢で、プロポーションや、器壁が薄くオサエ痕が顕著に残る技法などは平縁隆帯文深鉢中ノ沢 B 類型 4 段階～5 段階に近似する。一方、J14-1 の外面は全面的にケズリで仕上げるが、これは佐野 2 式でも全面的・普遍的に採用される技法だ。判断に迷うところだが、佐野式の器壁はもっと厚めなので、J14-1 は佐野 2 式よりは平縁隆帯文深鉢に近いだろう。こうした技法が後期末葉の中ノ沢 K 式まで遡るのかどうかは、定かではない。細片の J14-2、J14-3 も、J14-1 と類似した技法を用いる。J14-5 は中期後葉の混入品、J14-4 は時期不明である。

14 号住居の時期決定は J14-1 に頼らざるを得ず、断定はしきれないものの、晩期初頭～前葉あたりに位置づくのではなかろうか。参考までに、14 号住居周辺グリッドから晩期初頭～前葉の土器を抜き出して、J14･G1 ～ J14･G8 に図示した。J14･G6 は J14-1 と酷似した技法である。また、晩期中葉の良好資料も J14･9 以下に図示した。J14･G10、J14･G11 は大洞 C1 式をかなり忠実に踏襲している。

(12) 15 号住居 ［図 81、82、写真図版 13、14］【長野県史・中期後葉Ⅱ～Ⅲ期】

S15W30 ～ S18W36 の 6 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で、14 号住居の炉に引き続いて、15 号住居の炉縁石上面を発見、周囲を精査して、掘り方を平面的に検出した。同時に土坑 91、土坑 767、ピット 312、ピット 313 に切られることと、14 号住居が埋土の上に乗ることを確認し、さらに、1968 年と 1970 年の発掘調査のトレンチによって、住居北辺～東辺の一部が切られることも把握した。南北 4.7m、東西 5.8m の長円形の平面形で、北辺の一部は不明である。埋土は水平方向には分層できない。住居縁辺から時間をかけずに埋まったか、人為的な埋め戻しの可能性も考慮したい。壁はほぼ垂直で、壁高は最も残りの良い南辺で 20cm 程度ある。南辺から西辺にかけての壁際には浅い壁溝が巡る。床は住居中央が硬化している。住居の中央付近を径 80cm、深さ 30cm ほど窪め、人頭大の礫を方形に立て並べ、南辺のみ平石を置いて石囲とし、中央には土器片を敷き詰めた炉が構築される。土器片は外面側を上に向けて敷かれたものが多い。炉内には焼土が残され、炉縁石の一部は被熱で風化していた。壁際から 1m ほど中央に寄ったあたりに、深さ 30cm 以上の深いピットが構築され、それらは円形に近い配置を取る。柱穴の可能性があろう。

石囲炉の炉底に敷き詰められていた土器片を復元したのが J15-1 で、特大の無文深鉢である。炉の形態は中期後葉Ⅱ～Ⅲ期に見られるので、J15-1 もその時期の産物だろう。そのほか大きめの破片を図示したが、中期中葉Ⅳ期～中期後葉Ⅲ期くらいの幅があるだろう。なお、後期中葉以降の土偶頭部が 2 点、後期末葉の耳飾が 1 点、晩期前葉の耳飾が 1 点混入している。

(13) 16 号住居 ［図 83 ～ 85、写真図版 15、42］【長野県史・中期中葉Ⅲ期～後葉Ⅱ期】

S6W33 ～ S12W36 の 7 グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、ほぼ同時に、土坑 82 に切られることと炉 5 が住居埋土中に構築されること、谷状低地と重複することを確認した。第Ⅱ章第 1 節で述べたとおり、谷状低地の斜面に住居の北辺が構築され、廃絶後に浸食作用で喪失したと考えるべきで、「16 号住居は谷状低地に切られる」とする調査時の所見を変更する。遺構図は訂正しようがないので、旧見解のままとするが、結果的に誤った図にはなっていない。南北 4.8m 以上、東西 5.9m の南北に長い長円形を呈すると推測する。埋土は壁際とそれ以外にしか分層できないので、短期間の自然埋没を考慮してよいかもしれない。壁はほぼ垂直で、壁高は最も残りの良い南辺でも 20cm ほどしかない。床は住居中央に硬化面が認められる。住居中央よりやや東辺に寄った辺りに、径 70cm ほどのご

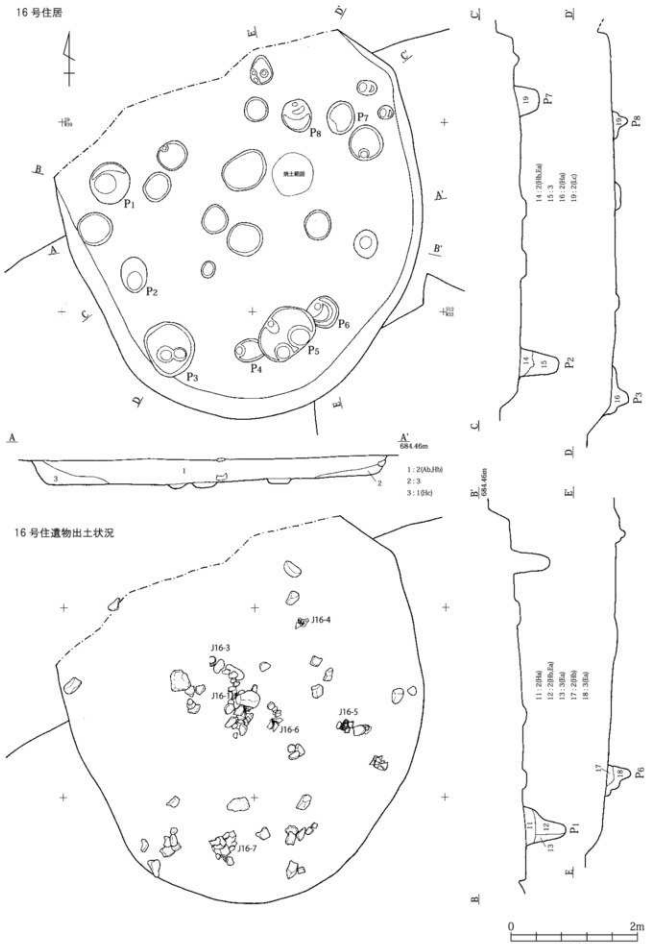


図 83　16 号住居実測図

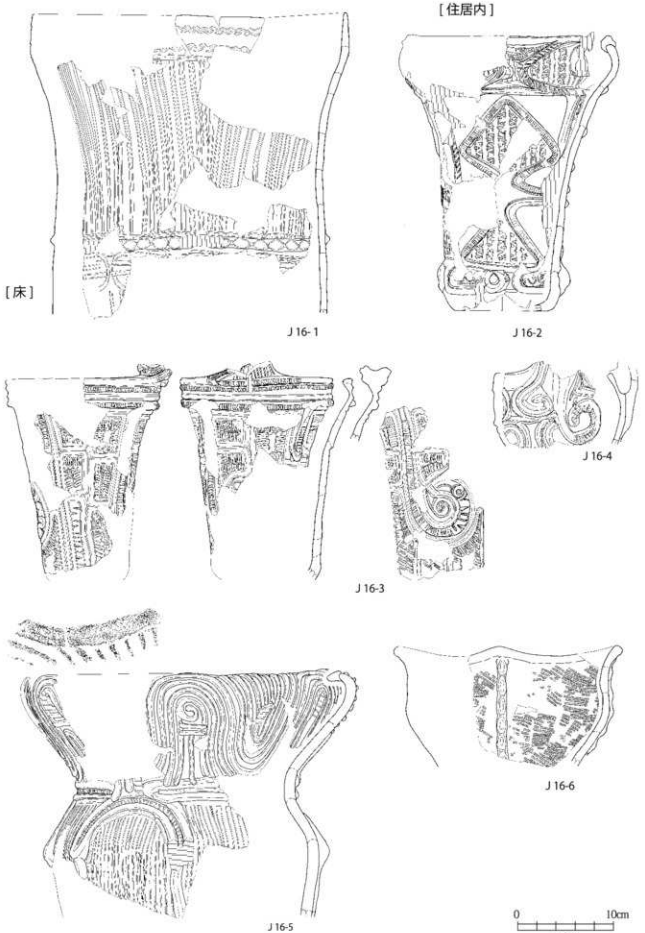
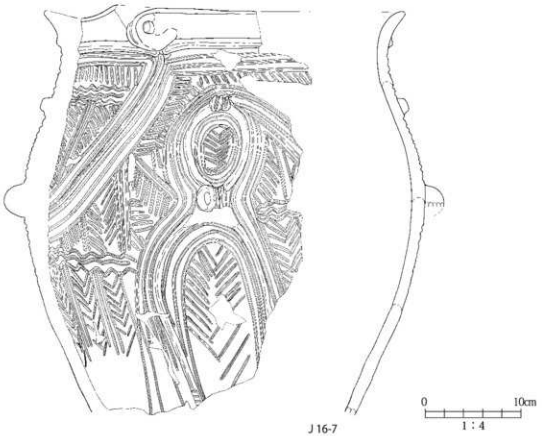


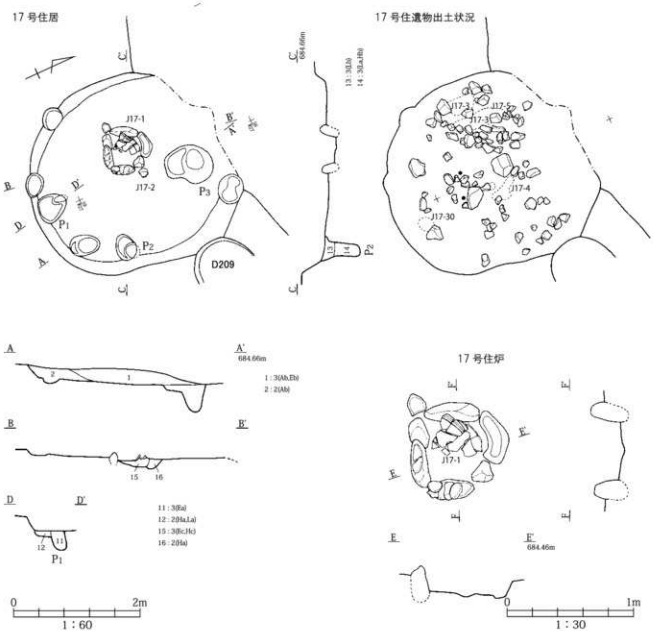
図 84　16 号住居出土土器実測図 (1)



16 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加Ｅ	不明	底部	称名	堀内	加Ｂ	上段	中Ｋ	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
16住		14	6	4	1	1	19		1	9	4	2	6			23	6	
	23445	5560	540	1920	40	30	1250		10	130	100	20	100			470	50	
S6W33		1	1	6		1	4			6	8	3	6	7		32	3	31
(16住)	10505	60	70	230		30	160			80	120	40	110	100		520	40	1120
S9W33		5	3			1	12	1	2	5	7	5	10	14	1	39	2	29
(16住)	13810	250	170			30	550	40	10	200	300	110	210	390	50	730	20	1150
S9W36		2					3		8	10	6	8	54	23	2	179	5	75
(16住)	44445	330					170		80	230	60	170	1330	590	160	4440	40	4820
S12W33											1	1	8	5	2	31	1	24
(16住)	7080										30	10	150	100	550	1480	30	1050
S12W36		2		1		1	2	1	11	30	12	18	34	16	3	111	5	64
(16住)	29895	20		30		10	50	20	110	650	190	600	460	360	30	2210	30	2400

図 85　16 号住居出土土器実測図（2）



17 号住居・関連ﾌﾟﾘｯﾄ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
17 住		1	1	1				1	3	41	51	20	7	4		104	7	64
	28500	30	20	10				30	20	650	11.310	1.010	170	60		810	60	12040
S6W24		1	1	6	1	2			10	57	28	27	79	66	31	593	25	194
(17・18 住)	106440	10	100	130	10	20			50	880	750	680	1490	2370	1590	10180	200	9730
S6W27		1		2		1			3	17	20	30	56	108	85	583	21	213
(17 住)	122045	20		50		30			120	250	280	770	1060	2100	3620	15430	190	14100
S9W24			1	1	1	3		1	1	80	52	23	40	13	2	241	40	85
(17・18 住)	47160		130	30	50	100		30	70	990	720	590	880	160	20	3550	350	2240
S9W27		1		3	2				5	26	29	16	24	21	7	200	22	73
(17 住)	36420	10		130	20				50	1250	490	420	390	280	160	3570	260	3120

図 86　17 号住居実測図

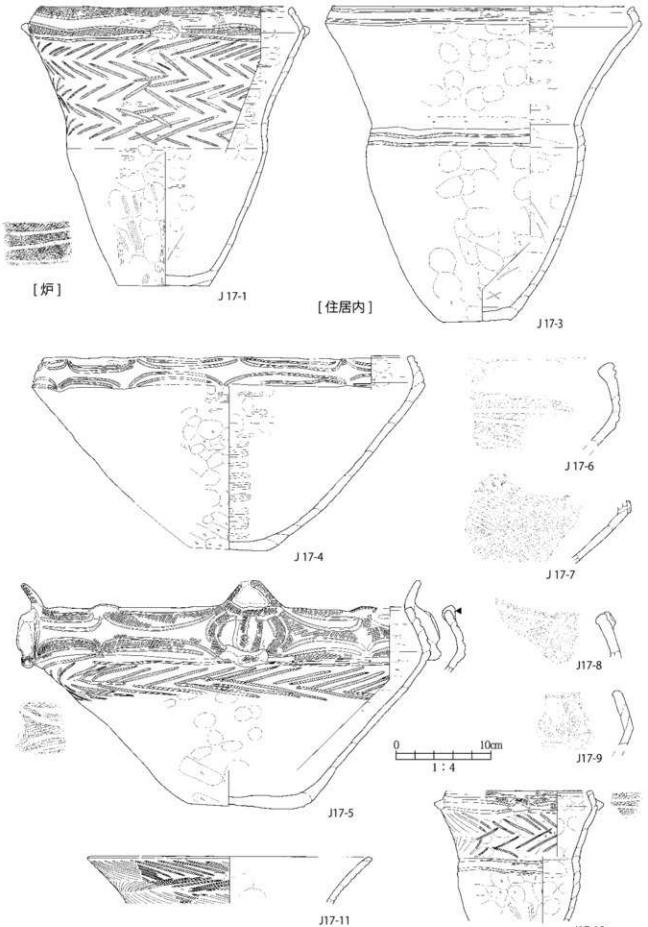


図 87　17 号住居出土土器実測図・拓影（1）

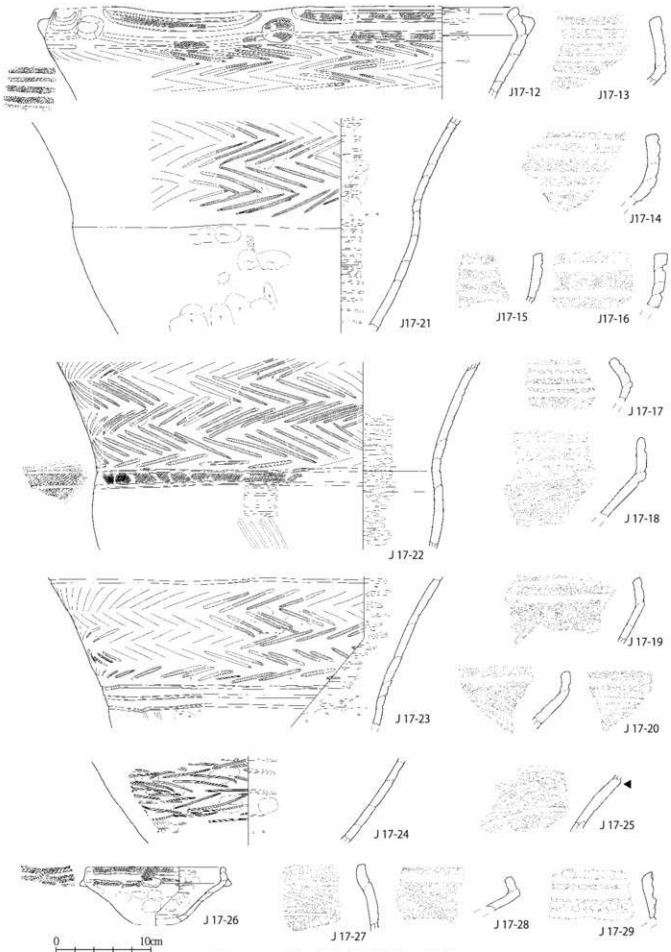


図 88　17 号住居出土土器実測図・拓影（2）

図 89　17 号住居出土土器実測図・拓影（3）

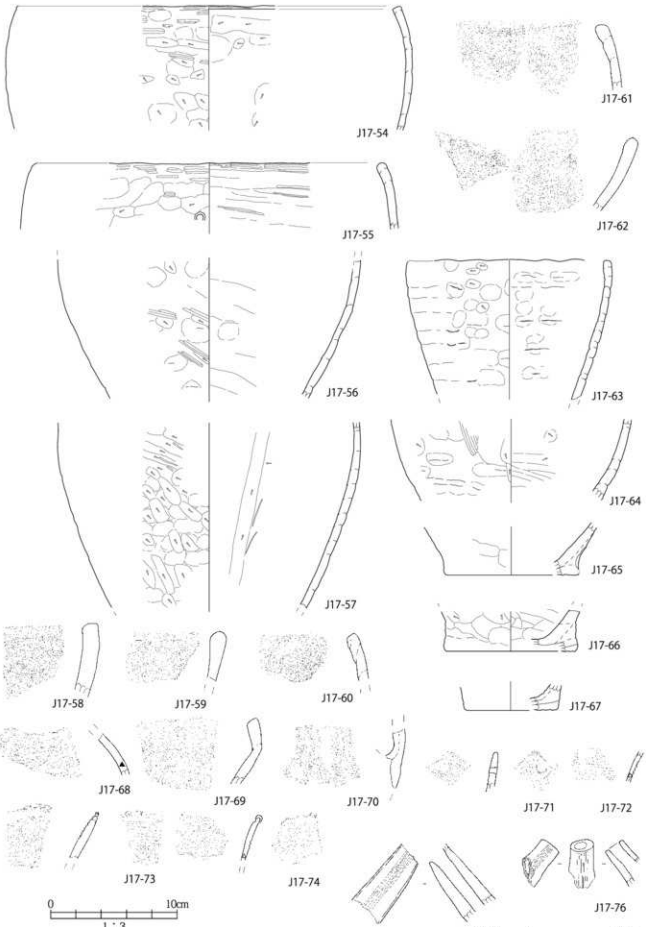


図 90　17 号住居出土土器実測図・拓影（4）

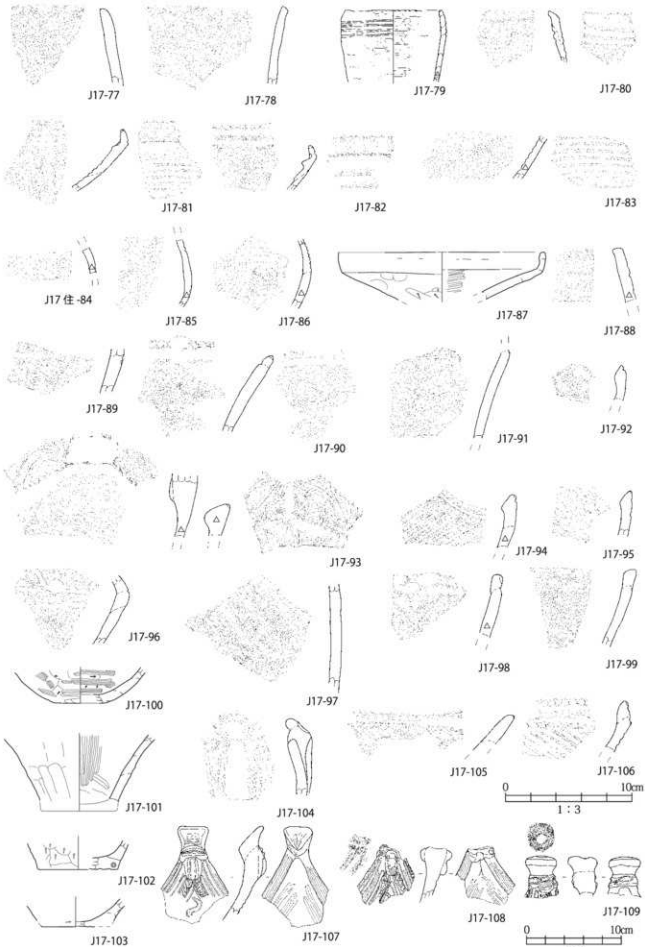


図 91　17 号住居出土土器実測図・拓影（5）

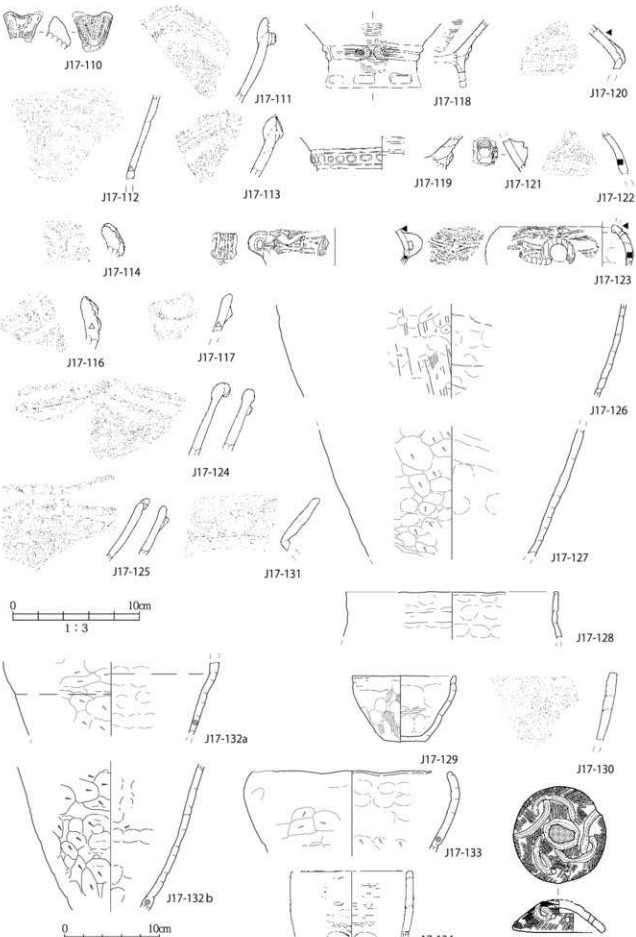


図 92　17 号住居出土土器実測図・拓影 (6)

くわずかな窪みがあり、被熱で赤化していた。地床炉或いは縁石が取り去られた石囲炉の可能性がある。壁際からやや中央に寄ったあたりに、深さ30cm以上の深いピットが構築される。P3、P5、P6、P7がそれで、壁に沿って円形に並ぶ。柱穴の可能性があろう。遺物の大半は床面よりやや浮いて出土したが、J16-1は床面直上出土である。

床面出土のJ16-1や、J16-2～J16-4は中期中葉Ⅲ期、J16-5～J16-7は中期後葉Ⅰ～Ⅱ期で、少々時間幅がある。J16-1のみ床面出土だが、この1点だけでは決めきれない。中期中葉かと思われる土偶1点があり、この住居に帰属するかもしれない。そのほか、後期以降と思われる種別不明の土製品が1点、晩期の耳飾が2点出土している。

(14) 17号住居 ［図86～92、写真図版16、17、42～44］【上ノ段2式～3式】

S6W24～S9W27の6グリッドにかけて位置する竪穴住居である。第Ⅳ層上面で住居掘り方を平面的に検出し、同時に、北辺が谷状低地の埋土と重複し、土坑209に切られることを確認した。調査時には17号住居北辺が谷状低地に切られると判断し、遺構図もそのように作図した。第Ⅱ章第1節で述べたとおり、住居北辺は第Ⅲ層中に構築され、廃絶後に浸食作用で喪失したと考えるべきで、調査時の所見を変更する。遺構図は訂正しようがないので、旧見解のままとするが、結果的に誤った図にはなっていない。

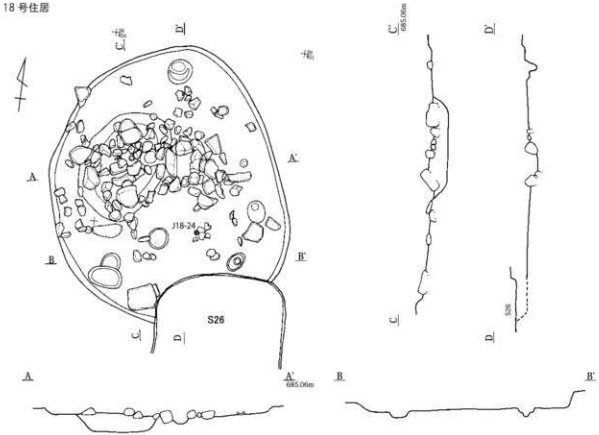
住居の規模は小さく、南北3.2m以上、東西3.1mの南北にやや長い長円形を呈すると推測する。埋土は壁際とそれ以外にしか分層できないので、短期間の自然埋没かと推測する。壁はほぼ垂直で、壁高は最も残りの良い南東辺で30cmほどと、後期以降の住居の中では最も残りがよい。床は住居中央に硬化面が認められる。住居中央よりやや西辺に寄った辺りに、径60cm、深さ20cmほどの窪みをつくり、その縁辺に人頭大でやや長めの円礫を6個並べて、石囲炉が造られる。炉縁石のうち北辺の1個分は抜き取られて痕跡だけが残り、残った縁石はすべて被熱で風化していた。窪み内部は被熱で赤化し、炉内に完形土器(J17-1)が転落していた。壁際から壁斜面にかけてピットがあるが、P2・P3以外は浅い。住居内出土遺物はかなり多く、中でも略完形品のJ17-3～J17-5、J17-22は床面直上出土である。

炉内出土のJ17-1は略完形の上ノ段3式「つ」の字文深鉢で、時期決定の最有力根拠となる。炉周辺の床面直上出土のJ17-4は上ノ段2式、J17-3、J17-5、J17-22の3点は同2式か3式で、これらも有力な根拠になる。J17-6～J17-9は上ノ段2式、J17-10～J17-27は上ノ段3式、J17-28～J17-32は上ノ段4式である。J17-33～J17-35などの浅鉢類や、J17-36～J17-43の注口土器、内面文の浅鉢J17-46～J17-50も上ノ段式の構成器種である。J17-42、J17-43は東北系の注口土器だが、装飾の起点になる瘤はJ17-36やJ17-37の上ノ段式瘤入組注口土器のそれとそっくりで、その祖形候補ではなかろうか。釣手土器J17-53も未確定ながら組成に加わる可能性がある。J17-68とJ17-69は上ノ段式と並行する東海系譜の土器だろう。無文粗製深鉢のうちJ17-54～J17-64、深鉢底部のJ17-65～J17-67は上ノ段式を構成する可能性が高い。

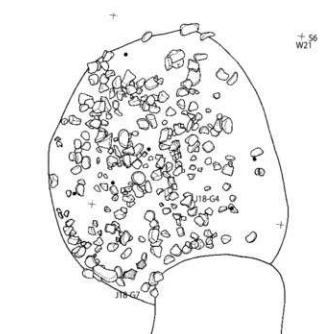
J17-70～J17-106は上ノ段式に先行する土器で、称名寺式～上ノ段1式もしくはその直前に属する。J17-107～J17-121は後続する中ノ沢K式だろう。J17-122とJ17-123は東北系瘤付土器の注口土器の仲間で、J17-122はその第Ⅰ段階に属する可能性がある。J17-124～J17-130は晩期前半、J17-131～J17-133は晩期中葉だろう。これらには大形破片も若干あるが、住居の年代観を覆すことは無いだろう。周辺グリッド出土土器の時期別個体数・重量表では、S6W24とS6W27で晩期土器が卓越するが、それらは谷状低地に形成された廃棄場に帰属する土器で、17号住居とは関わらない。なお、蓋形土器J17-135の縮尺は1:2である。

17号住居出土土器は上ノ段2～3式に集中し、その時間幅の中に帰属すると判断する。エリ穴独自の分

18 号住居



18 号住居遺物出土状況



18 号住炉

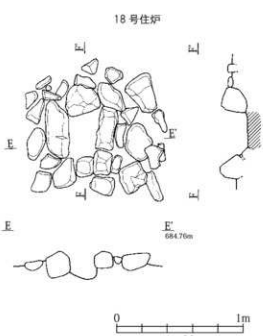


図 93　18 号住居実測図

18 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
18 住		1	2	5		2	2		34	71	4			1		89	8	74
	30465	30	100	240		40	20	450	1090	3130	270			20		1140	90	5540
S6W21									19	77	39	38	38	14		185	12	72
(18・19 住)	41155								370	1690	790	1330	540	270		3910	140	2310
S6W24		1	1	6	1	2			10	57	28	27	79	66	31	593	25	194
(17・18 住)	106440	10	100	130	10	20			50	880	750	680	1490	2370	1590	10180	200	9730
S9W21								1	5	51	30	10	12	2		69	10	29
(18 住)	23570			1				30	150	2790	1160	110	110	20		1160	130	1050
S9W24			1	1	1	3		1	1	80	52	23	40	13	2	241	40	85
(17・18 住)	47160		130	30	50	100		30	70	990	720	590	880	160	20	3550	350	2240

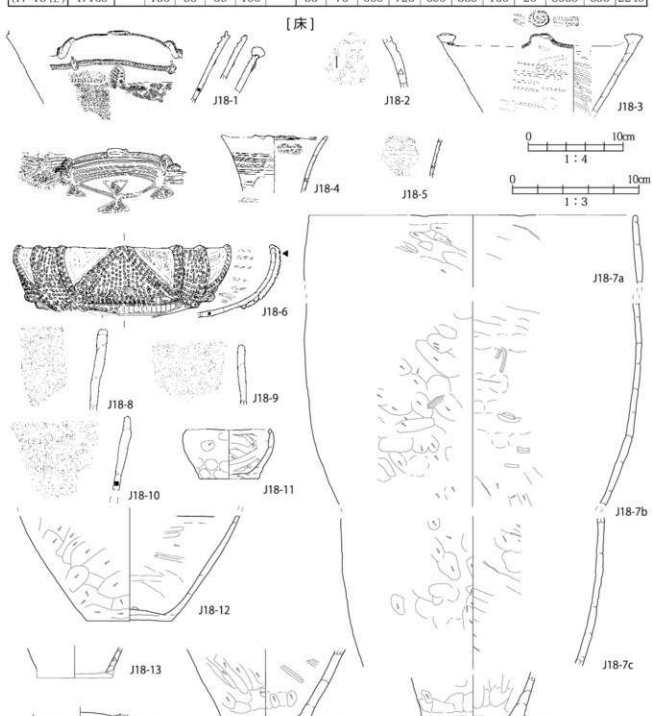


図 94　18 号住居出土土器実測図・拓影（1）

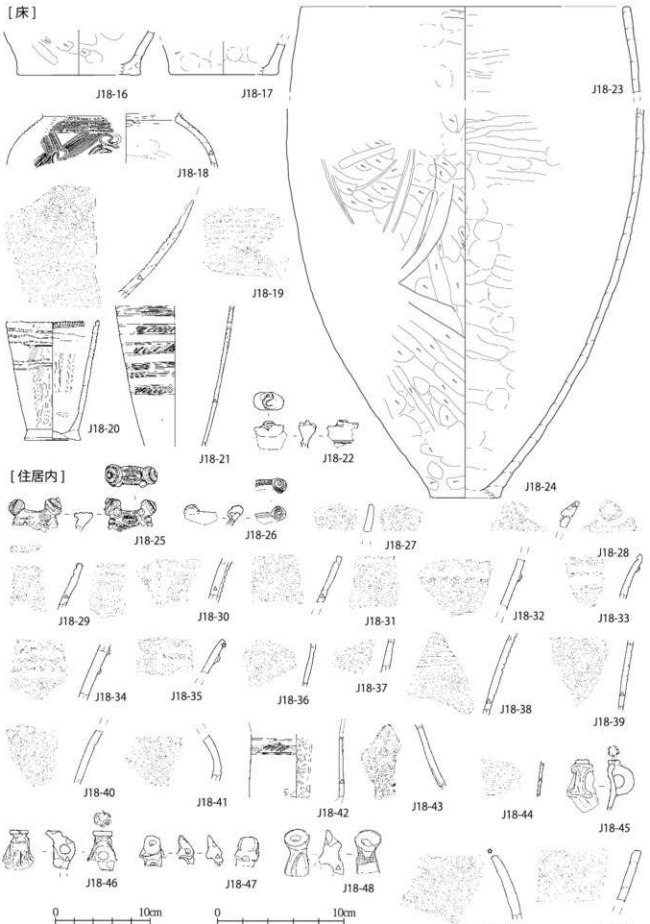


図 95　18 号住居出土土器実測図・拓影（2）

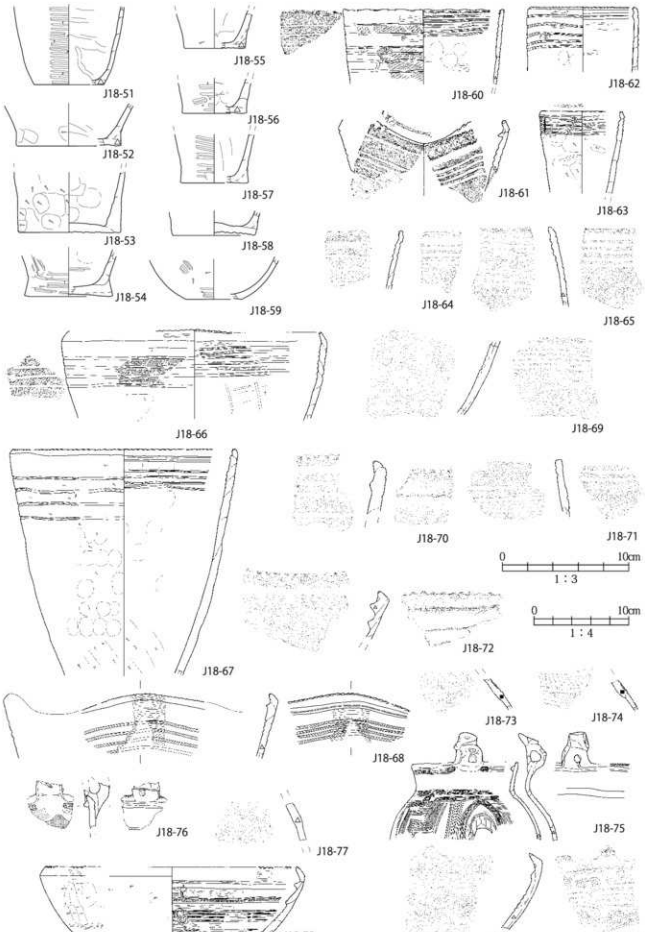


図 96　18 号住居出土土器実測図・拓影（3）

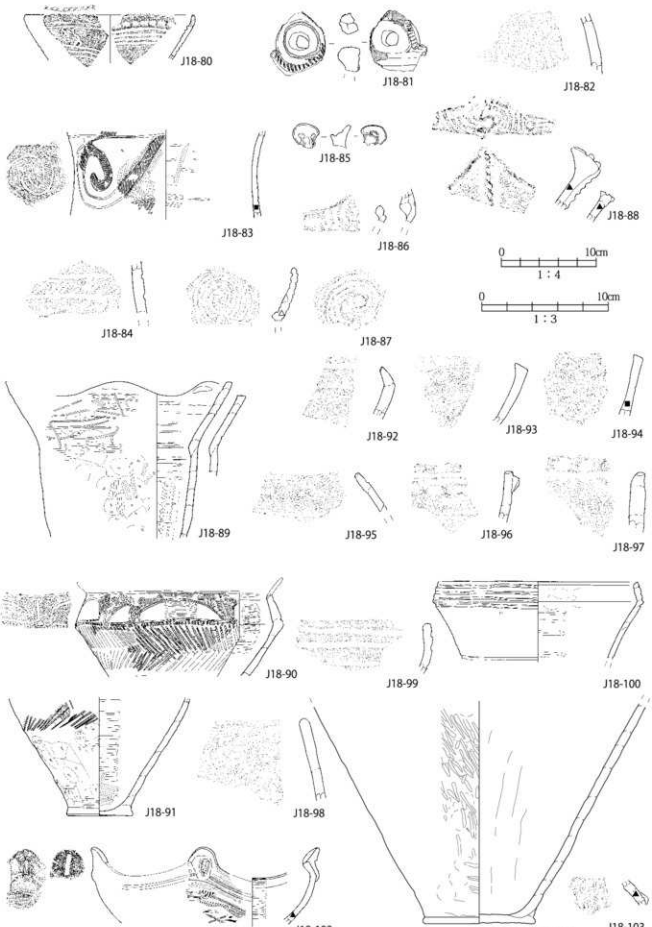


図 97　18 号住居出土時実測図・拓影 (4)

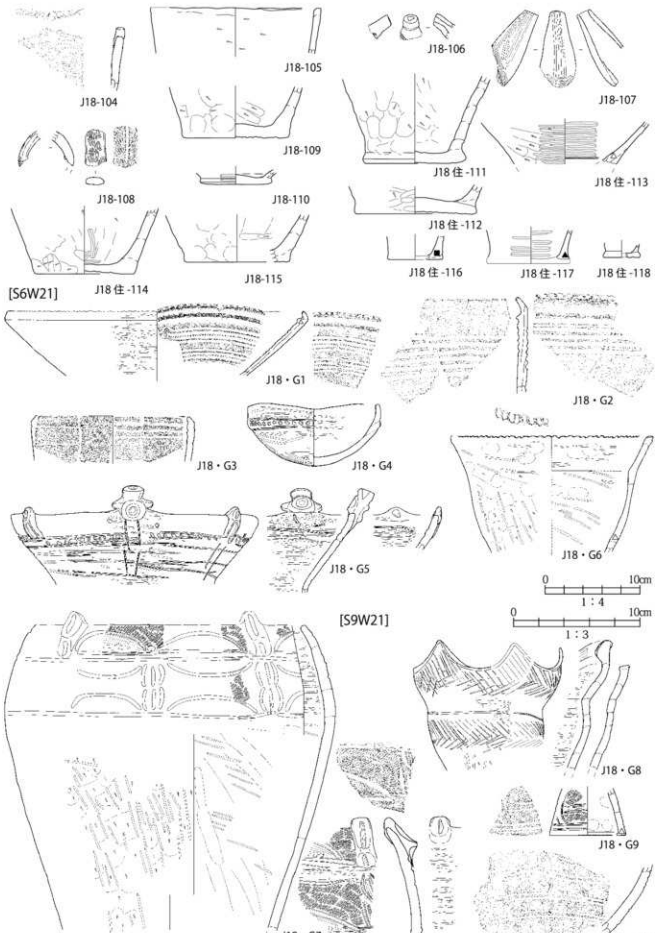


図 98　18 号住居出土土器、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（5）

銅形土偶２点、中実タイプ１点、合わせて３点の土偶は、上ノ段式土器と整合しそうで、この分銅形土偶の年代観にとって重要な根拠を与えるだろう。耳飾も４点あり、内２点は後期末葉の産だが、上ノ段式期まで遡る可能性は低い。

第２分冊で報告するが、谷状低地は廃棄場として利用される。そこに廃棄された最古の土器は上ノ段３式で、０W12 グリッドを中心にまとまった量が遺棄される。上ノ段３式より遡か以前から谷状低地は存在したが、そこを廃棄場に利用するという発想はなかった。上ノ段３式期には 17 号住居と後述する 36 号住居が構築され、いずれもその廃屋にかなりの量の遺物が残される。それと同時に谷状低地も廃棄場に利用され始める。

(15)　18 号住居　［図 93 ～ 98、写真図版 17、18、45］【堀ノ内２式～加曽利 B1 式前半】

S6W18 ～ S9W27 の６グリッドにかけて位置する住居である。第Ⅳ層上面で礫の集中箇所を検出し、精査の結果、S9W21 で配石 26 のまとまりを認定した。配石 26 の基底部と同レベルまで下げたところで２基の住居の掘り方を検出し、18 号住居が 19 号住居に切られることを平面で確認した。配石 26 は 18 号住居の上に乗る。南北 4.6m、東西 3.9m の長円形の掘り方は、残高は 10cm に満たず、住居主体部の基底部を辛うじて確認したと考える。礫を多く含む埋土は薄すぎて分層できない。礫の多さは礫堤の存在を想起させ、それなら掘り方の立ち上がりは壁になるとは限らないだろう。住居のほぼ中央に径 50cm、深さ 20cm 弱の窪みを造り、その縁辺に大形礫７個を方形に配置して石囲炉を構築する。礫のうち３個は被熱の為か風化が著しい。炉底は若干被熱していた。炉の外周には炉と同大の礫を敷くが、炉東辺側の敷設範囲は広い。炉の西隣には南北 1.8m、東西 1.4m、深さ 0.3m ほどの浅い窪みが作られ、その中に径 40cm ほどの大形礫を含む多数の礫を敷き並べる。礫上面は揃わず、敷き詰めたとは言いにくいが、敷石住居の系譜に連なる構造の一部だろう。掘り方の縁辺寄りに小さなピットが幾つか残されるが、いずれも浅く、性格は不明である。柄鏡形敷石住居の出入り口施設は基底までの掘り方が深いことが多いが、19 号住居に切られることもあって、それらしき痕跡は発見できなかった。

床面出土として取り上げられた土器のうち、J18-1 ～ J18-5 は堀ノ内２式、J18-18 ～ J18-22 は最古の可能性がある加曽利 B1 式だろう。J18-6 は類例の無い浅鉢だが、縦隆帯を斜隆帯で繋ぐ構図だと見れば、堀ノ内式と共通するのではなかろうか。無文粗製土器のうち J18-7 ～ J18-9 は堀ノ内式に、J18-23、J18-24 は加曽利 B 式～上ノ段式に共伴する可能性がある。底部の多くは朝顔形深鉢で、堀ノ内式～加曽利 B1 式だろう。

床面以外では、J18-25 ～ J18-50 は堀ノ内２式、J18-51 ～ J18-59 は堀ノ内式～加曽利 B1 式底部、J18-60 ～ J18-75 は加曽利 B1 式前半でその多くが最古の様相を見せ、J18-76 ～ J18-80 は加曽利 B1 式後半だろう。そのほか、中期中葉 (J18-81)、称名寺式 (J18-82 ～ J18-85)、堀ノ内１式 (J18-86 ～ J18-88)、加曽利 B2 式 (J18-89 ～ J18-98)、上ノ段式とその並行型式 (J18-99 ～ J18-103)、晩期初頭から中葉 (J18-104 ～ J18-106)、浮線文土器 (J18-114) もあり、時間幅は大きい。堀ノ内１式以前は混入品として除外できるが、加曽利 B1 式後半～上ノ段式や晩期土器は大形破片も含み、合理的説明がつけにくい。

床面出土土器に限れば出土土器の時間幅は小さく、無文粗製深鉢を含めればまとまった量もある。遺構形態とも整合的なので、18 号住居は堀ノ内２式～加曽利 B1 式前半の幅の中に位置づくと判断する。住居の継続的利用の可能性を考えても良いかもしれない。

遺構の残存状況からも、遺物から判断した帰属時期からも、18 号住居は柄鏡形敷石住居と断定するわけには行かず、その系譜を引く住居の可能性も考慮すべきだろう。

住居周辺のグリッド出土で、出土地点を記録して取り上げた (発掘時に目立った) 土器３点 (J14・G4、

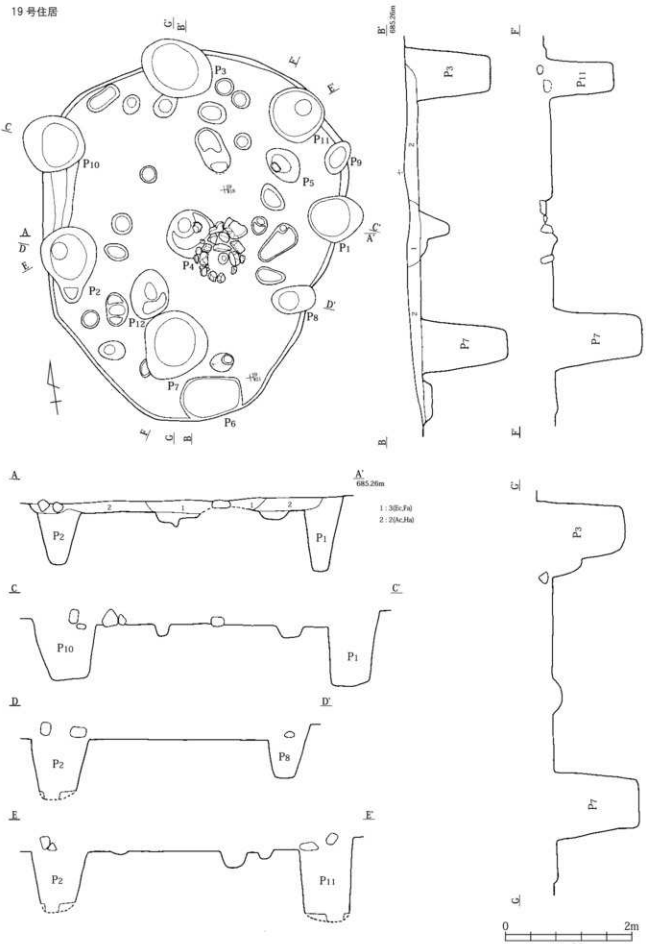
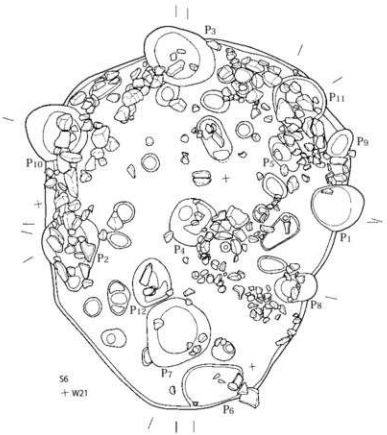
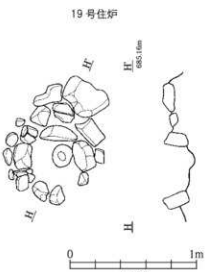


図99　19号住居実測図(1)

19 号住礫出土状況





19 号住遺物出土状況

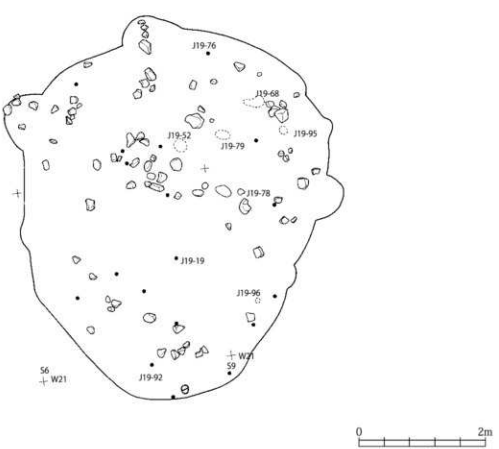


図 100　19 号住居実測図（2）

19 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	勝内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
19 住			9	6	2		4	3	43	31	18	7				76	4	57
	21780		410	200	50		450	60	1130	980	390	80				2260	30	2180
S6W15				2				3	18	5	8	8	11	7		69	5	59
(19 住)	14925			20				130	460	60	60	110	140	80		620	40	1630
S6W18				2	2				9	22	13	8	15	13	1	90	18	72
(19 住)	27490			30	110				110	790	250	140	250	210	10	1330	230	2040
S6W21									19	77	39	38	38	14		185	12	72
(18･19 住)	41155								370	1690	790	1330	540	270		3910	140	2310
S9W15				1	1				4	6	3	6	4	4		51	7	24
(19 住)	9610			10	20				20	70	50	130	80	100		990	50	760
S9W18				2	2				9	22	13	8	15	13	1	90	18	23
(19 住)	10540			30	110				110	790	250	140	250	210	10	1330	230	880

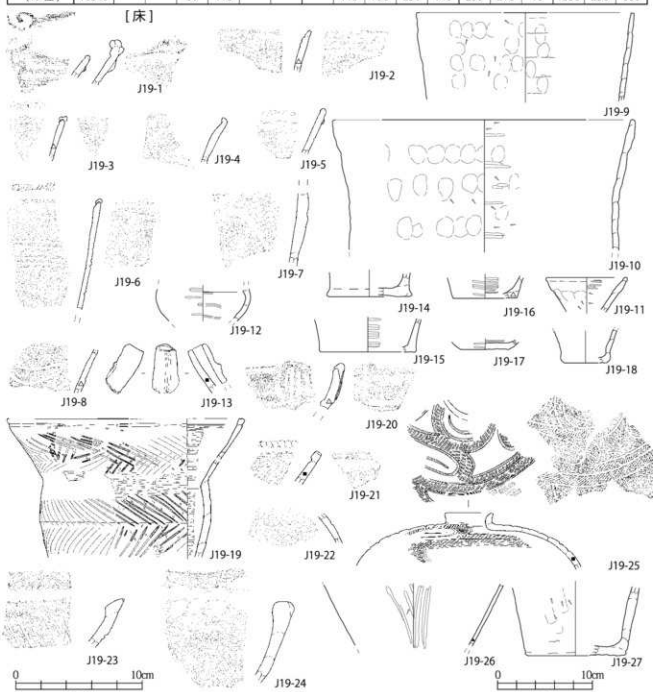


図 101　19 号住居出土土器実測図・拓影 (1)

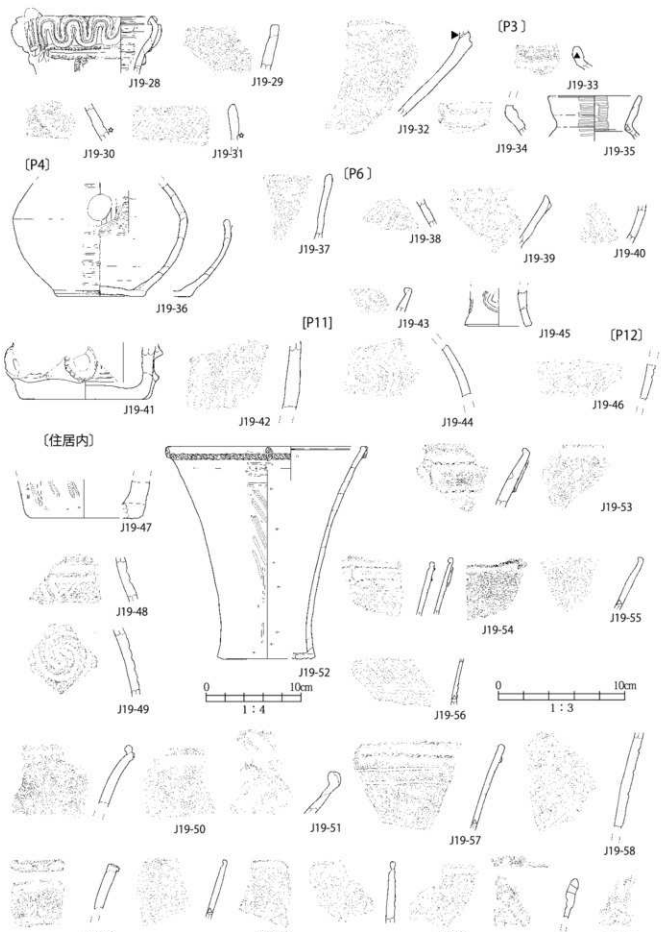


図 102　19 号住居出土土器実測図・拓影（2）

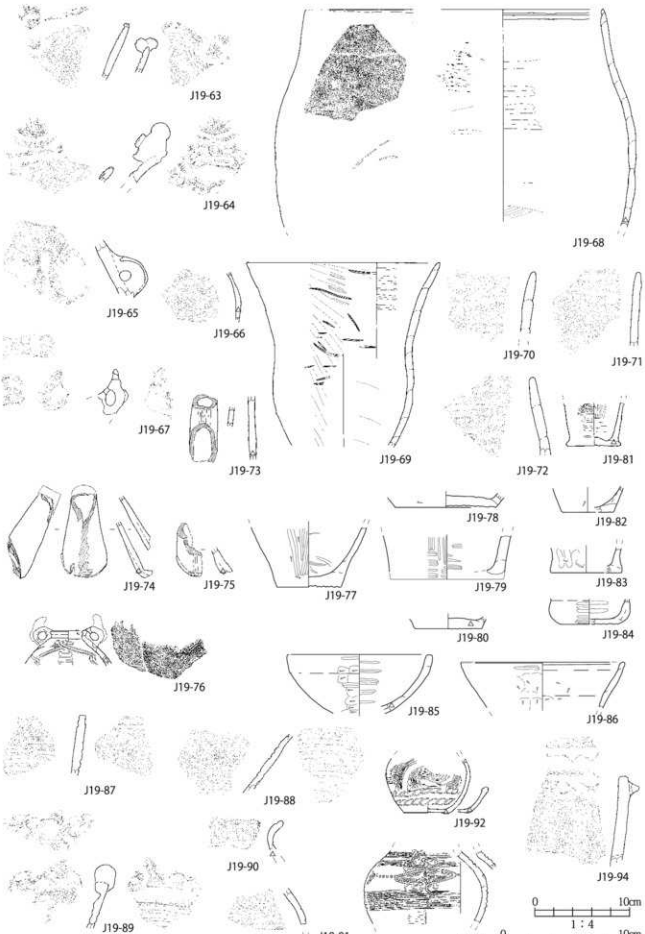


図 103　19 号住居出土土器実測図・拓影 (3)

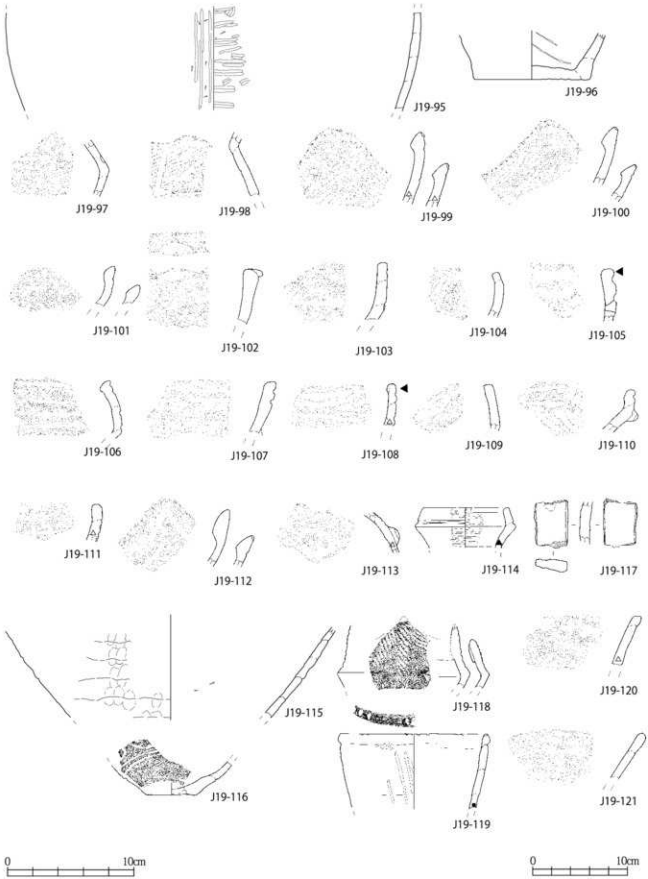


図 104　19 号住居出土土器実測図・拓影 (4)

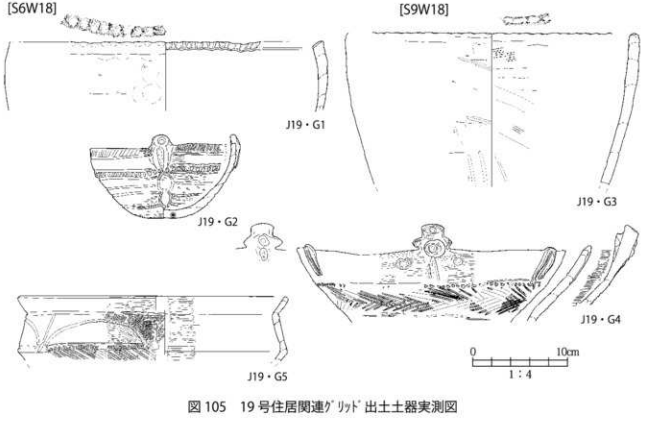


図 105　19 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図

J14・G5、J14・G7) は加曽利 B2 式で、時期個体数・重量表でも加曽利 B 式が突出する。住居埋土出土資料と併せれば、この時期にも何らかの遺構が存在したか、廃屋が廃棄場に利用された可能性があろう。加曽利 B1 式前半と、加曽利 B2 式～上ノ段式初期のグリッド出土資料の幾つかを参考までに図示した。なお、上ノ段式に関わる可能性のある中実土偶肩部とエリ穴独自の分銅形土偶の下半が 1 点ずつ出土している。また、晩期の耳飾 1 点が混入する。

(16)　19 号住居　［図 99 ～ 105、写真図版 19、20、45］【加曽利 B2 式後半 (堀ノ内 2 式？) 】

S3W15 ～ S9W21 の 8 グリッドにかけて位置する住居である。第Ⅳ層上面で礫の集中箇所を検出し、精査の結果、2 基の住居の掘り方を検出し、19 号住居が 18 号住居とピット 74 を切ることを平面で確認した。19 号住居の北辺周辺は礫がまとまっており、掘り方の検出と 18 号住居との切り合いの確定は、この礫の集中を手掛かりにした。南北 4.8m、東西 5.9m の不整長円形の掘り方は、長辺方向が直線的だとも言え、深さは東辺で 20cm、西辺では数 cm しかない。礫を多く含む埋土は薄く、住居中央のみ土質が少々異なっている。注目すべきなのは遺構検出の手がかりとなった礫のまとまりである。住居北辺～東辺にかけての壁際の掘り方基底面に、人頭大の礫多数が雑然と並ぶのだ。埋土中の礫よりはるかに大きく、組んだり上面をそろえたりはしないので、この位置に並べたとは言い切れないが、量の多さからして偶然の混入とは思えない。参考にすべきなのは、中越遺跡 (宮田村) で発見された加曽利 B1 式～ B2 式前半の方形石囲住居 [小池 2002] だろう。338 号住居と 340 号住居が該当し、平面は方形で、大形の円礫を積み上げて壁を構築する。住居中央が若干低くなっているので、浅い掘り方があるのかもしれない。山梨県には類例が多数発見されており、方形周石住居として検討が進んでいる［新津健 1992、山本暉久 2014］が、それらは竪穴住居ではないらしく、浅いながらも掘り方のある 19 号住居とは若干の相違があるようだ。19 号住居壁際の礫は、石囲住居・方形周石住居やその構造を意識した構築物の可能性が高いのではなかろうか。床には硬化面は認

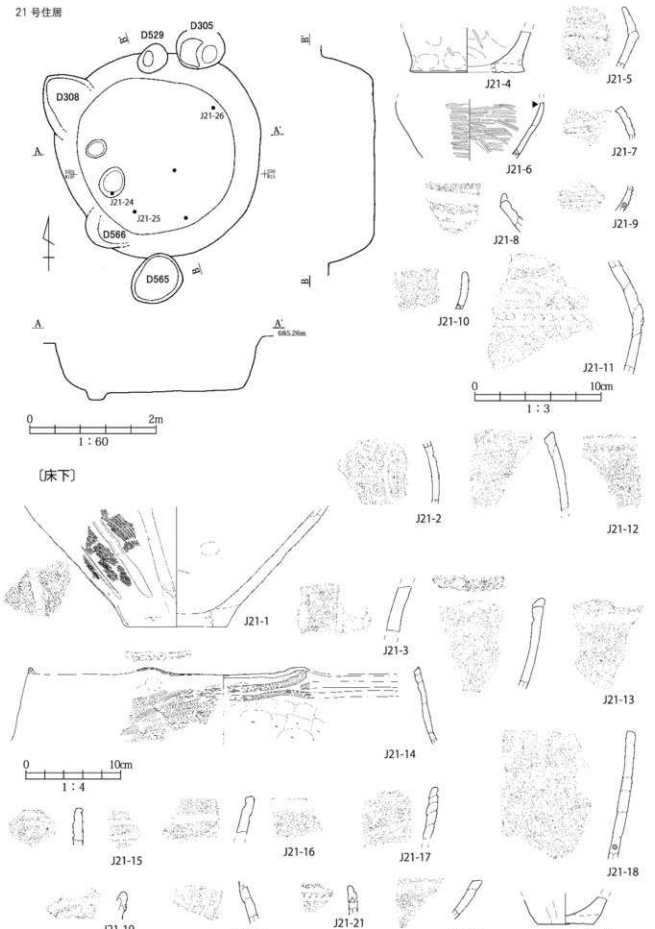


図 106　21 号住居実測図、出土土器実測図・拓影 (1)

21 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
21 住				5	2			6	2	2		2	8	51		90	4	43
	22930			130	40			140	30	30		70	90	930		2100	60	3410
S30W15				1	1	1	1		3	4			2	7		30	6	23
(21 住)	9880			40	30	40	40		60	90			20	80		420	40	1470
S30W18				1	1	2		1	7		1		5	10		43	3	26
(21・38 住)	12970			10	20	90		50	170		10		50	140		900	70	1870
S33W15								1		2	1		1	8		24	2	9
(21 住)	5775							30		20	10		10	110		330	20	250

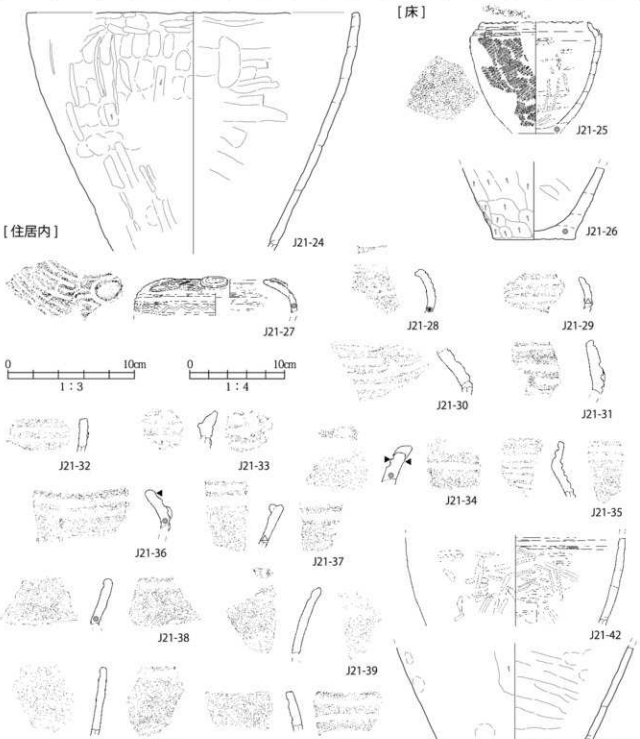


図 107　21 号住居出土土器実測図・拓影（2）

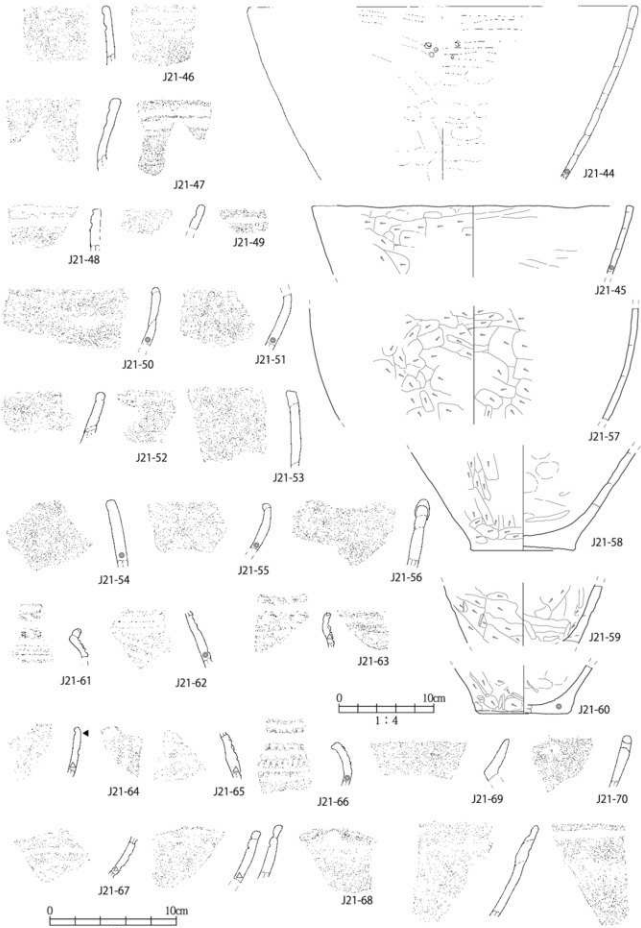


図 108　21 号住居出土土器実測図・拓影 (3)

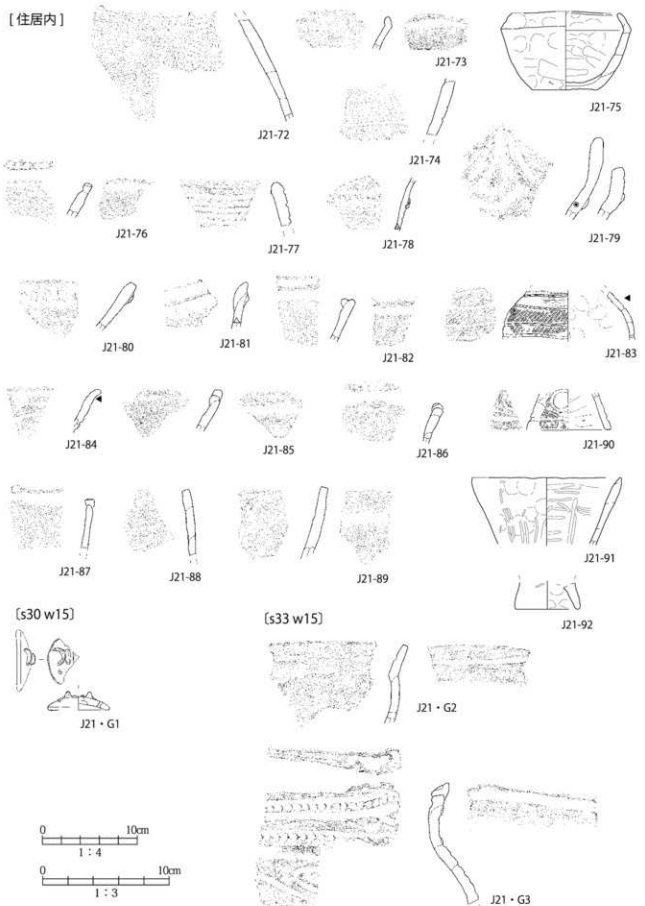


図 109　21 号住居出土土器実測図・拓影（4）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影

められないが、床に部分的な石敷きがあった可能性も否定はできない。住居のほぼ中央に、径 60cm、深さ 20cm 弱の窪みを造り、その縁辺にやや小ぶりな礫を 8 個 (1 個は喪失) を方形気味に配置して、石囲炉が作られる。縁石の一部は被熱の為か風化が著しい。炉底に焼土は無かった。炉の北辺には縁石と同様の礫がレベルをそろえて配置されるが、敷石住居の構造を継承するのかもしれない。掘り方の縁辺、半ば壁にかかるあたりに大形で深いピットが作られる。そのうち P8、P11、P12 には柱痕跡が認められる。同心円配置の柱穴の可能性があるだろう。北辺～東辺壁際からもこうしたピットが検出され、P2、P10、P11 の上には大形円礫が乗る。出入り口施設に関わりそうな礫の配置や掘り方等は認められなかった。

床面やピット内から土器が出土しており、それ以外も床面に近い位置からの出土である。堀ノ内 2 式が多数を占めるが、加曽利 B2 式も少なからず含まれていて、単純ではない。

床面出土土器のうち J19-1 ～ J19-8 は堀ノ内 2 式で、無文粗製深鉢 J19-9 ～ J19-11、注口土器 J19-12、J19-13 も堀ノ内式だろう。J19-14 ～ J19-18 は朝顔形の深鉢底部で堀ノ内式～加曽利 B1 式だが、床面には加曽利 B1 式はほとんどない。J19-19 ～ J19-24 は加曽利 B2 式後半、J19-25 と J19-26 は加曽利 B2 式～上ノ段式に並行しそうな異系統の注口土器と深鉢で、これらがひとまとまりになる可能性がある。

床面のピットのうち、P4 は完形に近い堀ノ内式注口土器 J19-36 のみが出土し、住居の時期決定の根拠になりうる。だが、それ以外のピット出土土器は小破片ばかりで、堀ノ内式が多いものの、加曽利 B 式や上ノ段式もある。晩期土器が含まれる P3 と P11 は 19 号住居址の施設だとは断定しにくい。

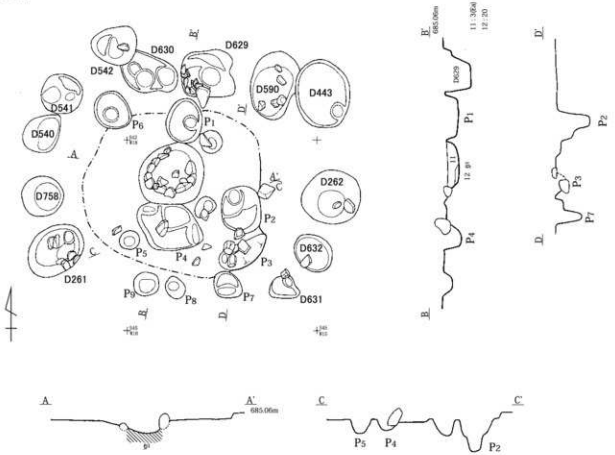
住居埋土出土土器は、堀ノ内 2 式が多い。完形品 J19-52 ～ J19-67 が該当し、J19-68 ～ J19-72 の無文粗製土器も堀ノ内式だろう。注口土器 J19-73 ～ J19-76、朝顔形深鉢底部 J19-77 ～ J19-84 や浅鉢 J19-85、J19-86 も堀ノ内 2 式～加曽利 B1 式だろう。一方、J19-87 ～ J19-94 は加曽利 B1 式、J19-97 ～ J19-100 は加曽利 B2 式後半、J19-101 ～ J19-114 は上ノ段式とそれに並行する異系統土器で、無文粗製土器 J19-95 と底部 J19-96 は、加曽利 B 式～上ノ段式だろう。佐野式に関連しそうな土器 (J19-115、J19-116) も存在する。

床面やピット出土土器を重視すれば、堀ノ内 2 式の方が質・量とも優位だが、加曽利 B2 式も軽視できない。石囲炉は時間幅があって堀ノ内 2 式に限定できず、柄鏡形敷石住居特有の出入り口施設の要素もなく、その一方、壁際に集中する礫は方形石囲住居の構成要素と共通性があるように思える。こうした点を考えれば、堀ノ内 2 式の遺構を切るか重複する位置に、加曽利 B2 式の 19 号住居が作られたと考えた方が良いのではなかろうか。ちなみに、住居周辺グリッドの時期別個体数・重量表では、上ノ段式以降も多いが、加曽利 B 式が突出しており、加曽利 B2 式後半前後の主要な土器を参考までに図示した。土偶 2 点、土製品 1 点、耳飾 1 点、ヒスイ原石 2 点、蛇紋岩破片も出土している。中実土偶の胴部は堀ノ内式と整合的で、それ以外の土製品は加曽利 B 式より新しい時期の産だろう。

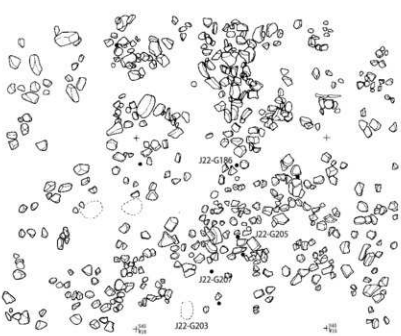
(17) 21 号住居 [図 106 ～ 109、写真図版 20] 【佐野 2 式】

S30W15 ～ S33W18 の 4 グリッドにかけて位置する。第Ⅳ層上面で掘り方を平面的に検出し、同時に土坑 303 を切り、土坑 305、土坑 308、土坑 529、土坑 565、土坑 566 に切られることも平面で確認した。南北 3.3m、東西 3.3m のほぼ正円形を呈する。埋土は記録が無い。第Ⅴ層に到達する床には硬化面は無く、浅いピット 2 基 (どちらかが P7 の可能性があろう) 以外の施設は無い。検出面から床下までは 70cm 以上あり、エリ穴遺跡としては特異な深さだ。遺物は床下出土 (J21-1 ～ J21-18)、P7 出土 (J21-19 ～ J21-23)、床面出土 (J21-24 ～ J21-26)、埋土出土 (J21-27 ～ J21-92) に別けて取上げられており、写真は床下まで調査が終了した状況と思われる。小規模で異様に深く、床面や施設がはっきりしないなど、竪穴住居と認めてよいか不安が残る。

22号住居



22 号住遺物出土状況



0 2m
1 : 60

図 110　22 号住居実測図

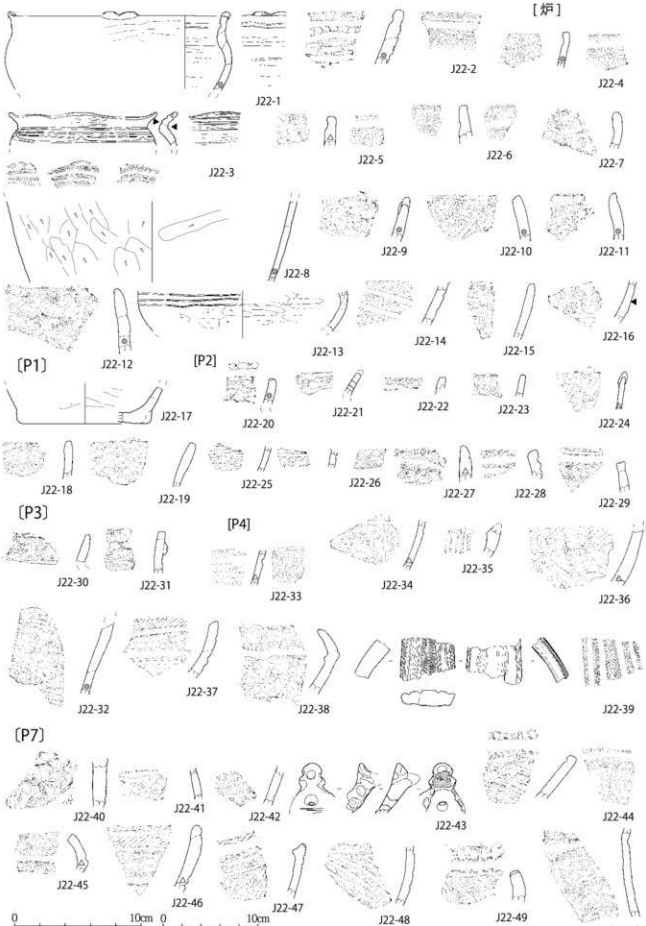


図 111　22 号住居出土土器実測図（1）

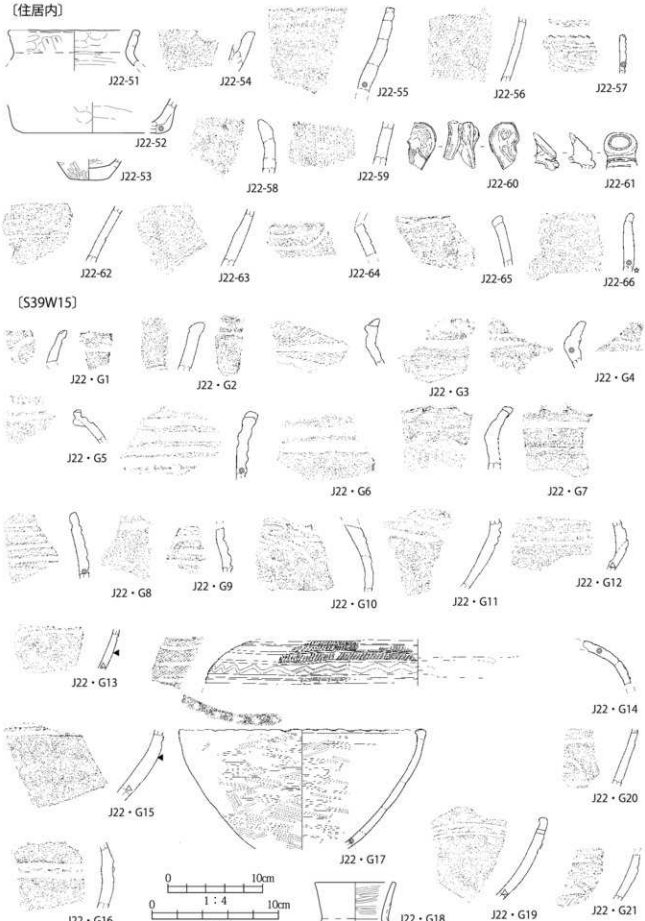


図 112　22 号住居出土土器実測図・拓影（2）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（1）

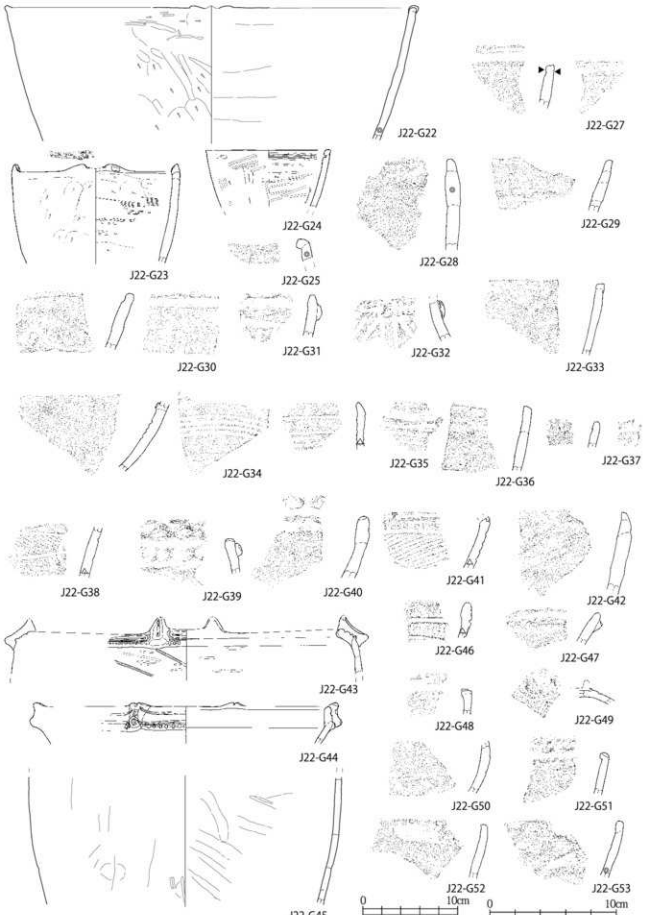


図 113　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

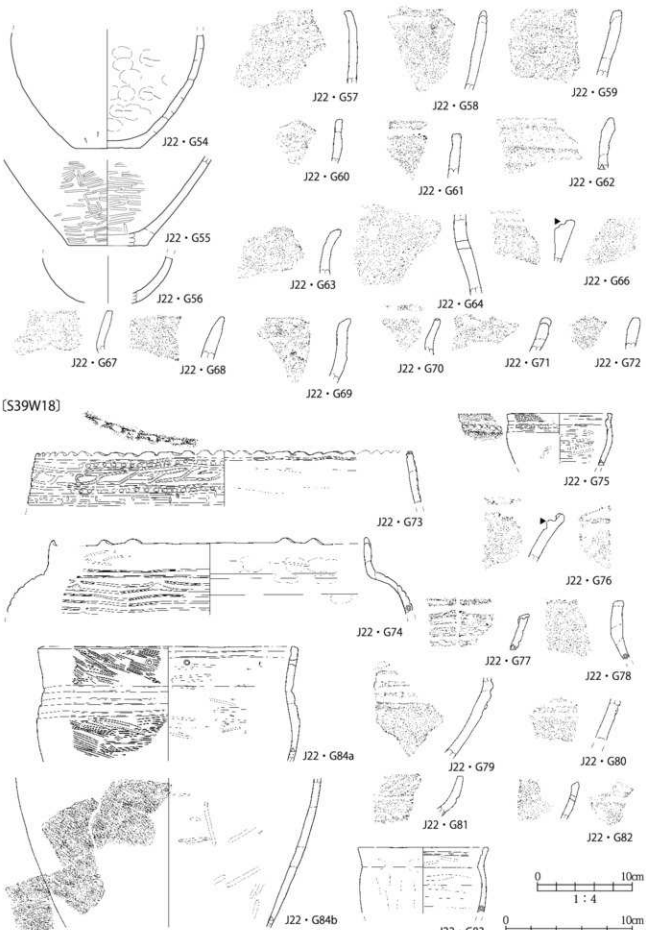


図 114　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（3）

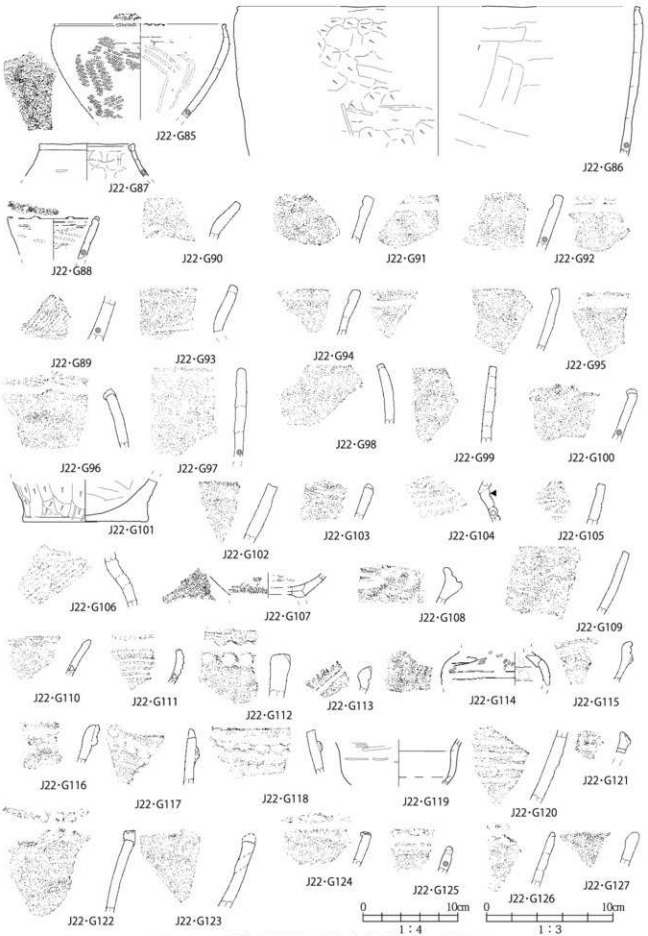


図 115　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（4）

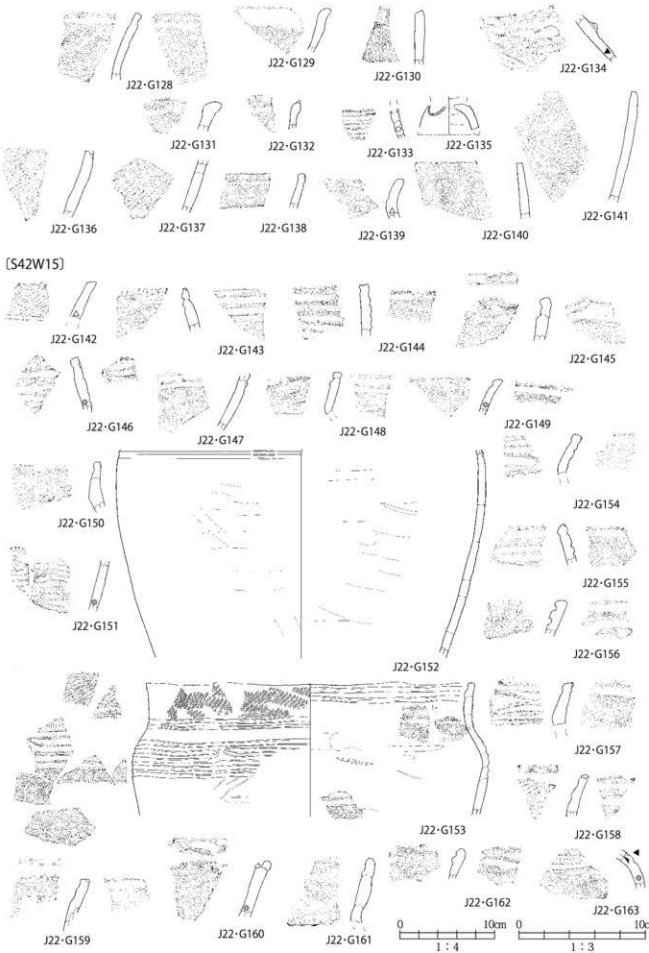


図 116　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（5）

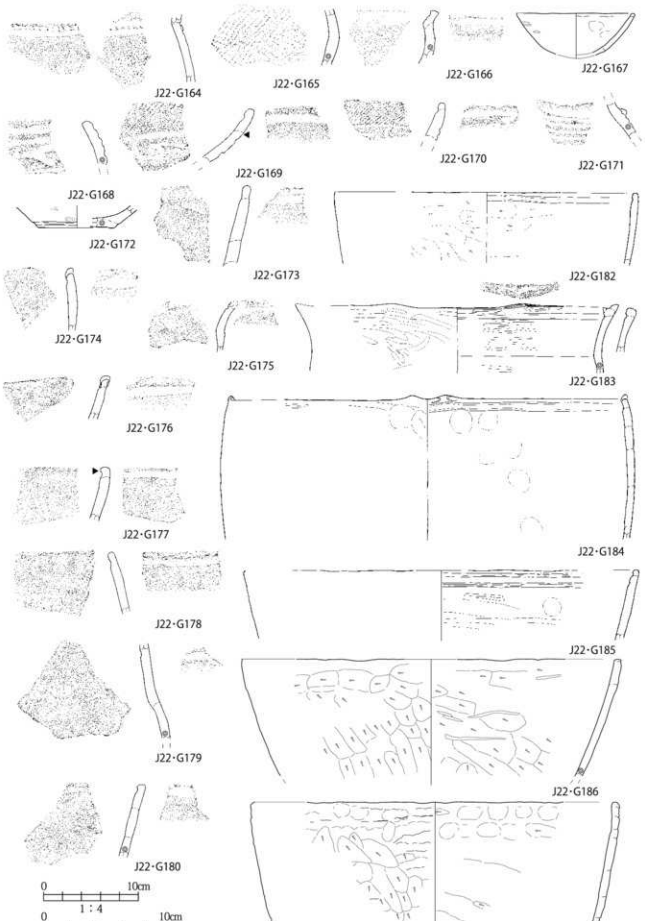


図 117　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（6）

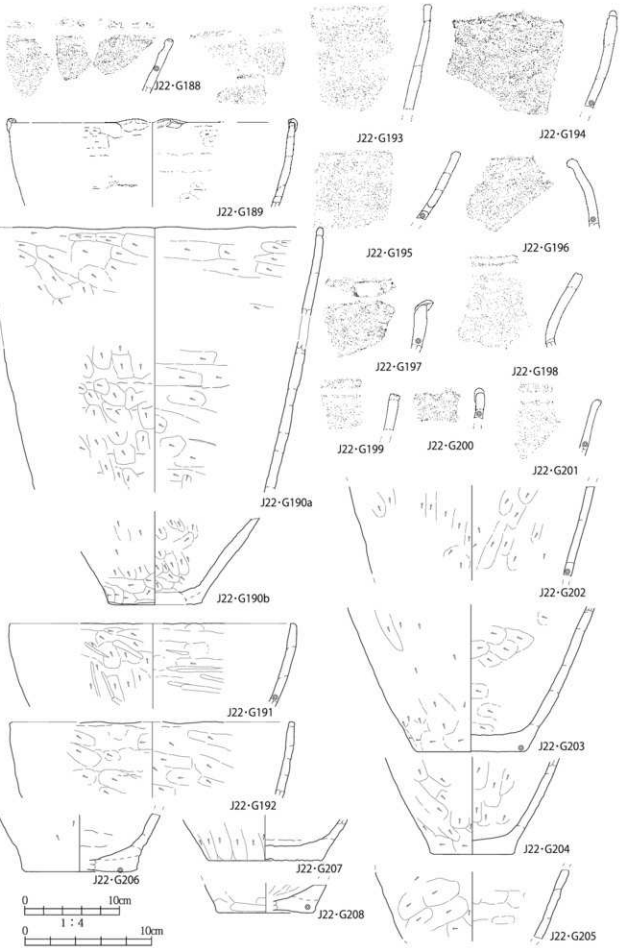


図 118　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（7）

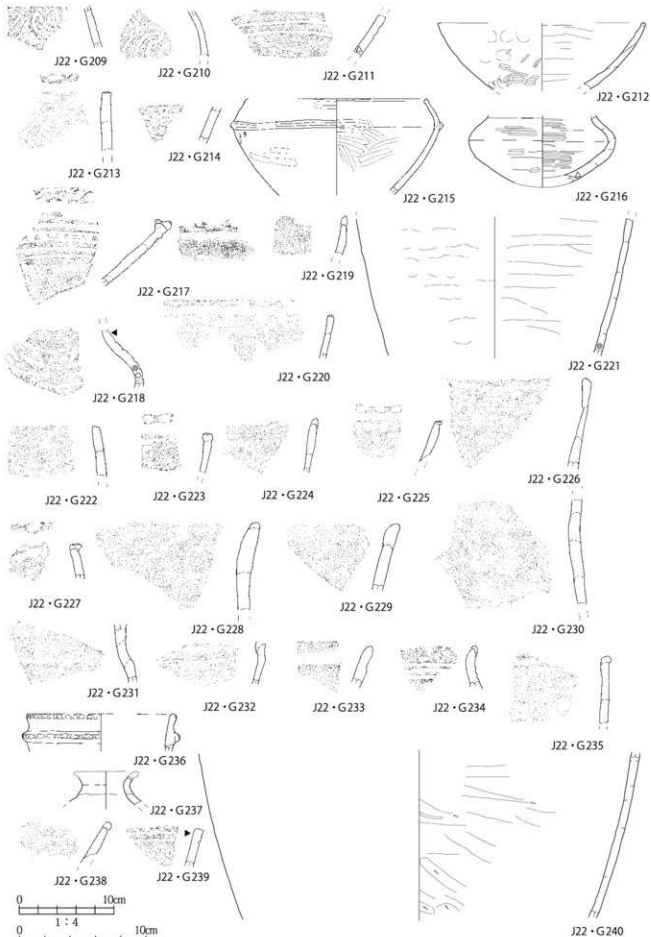


図 119　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（8）

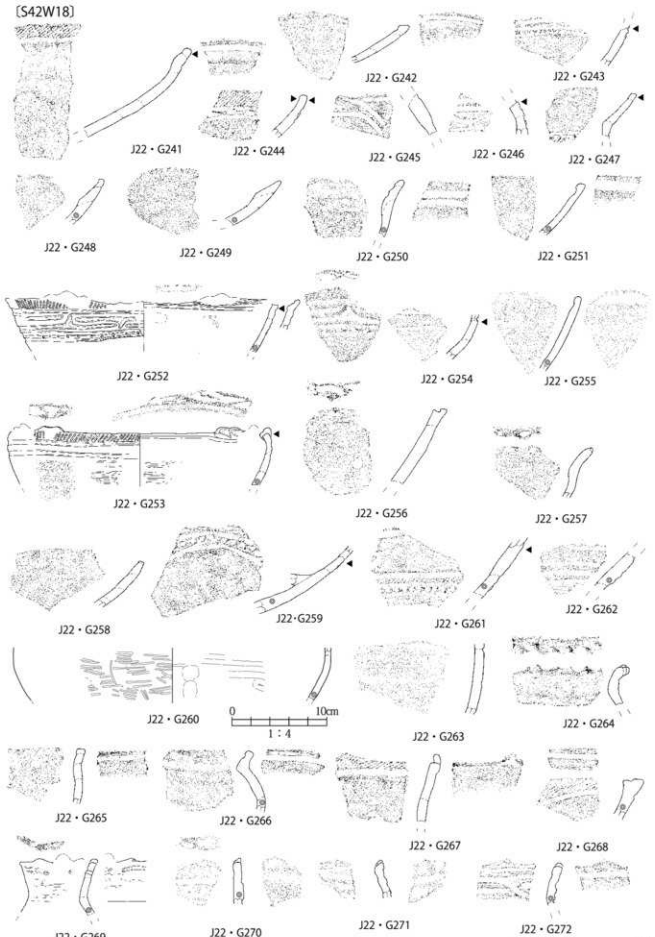


図 120　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（9）

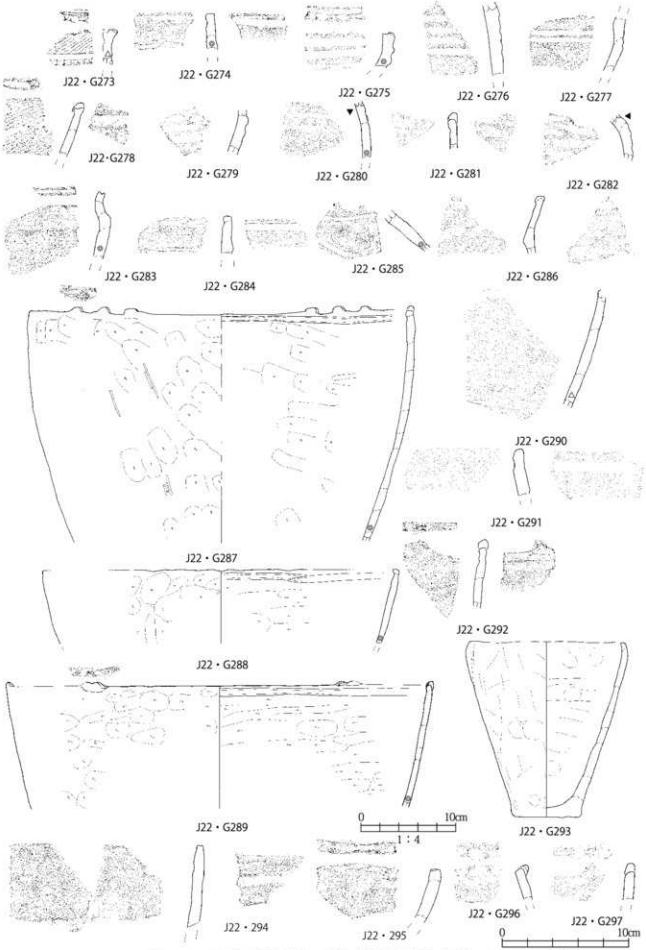


図 121　22 号住居関連グリッド出土土器実測図・拓影 (10)

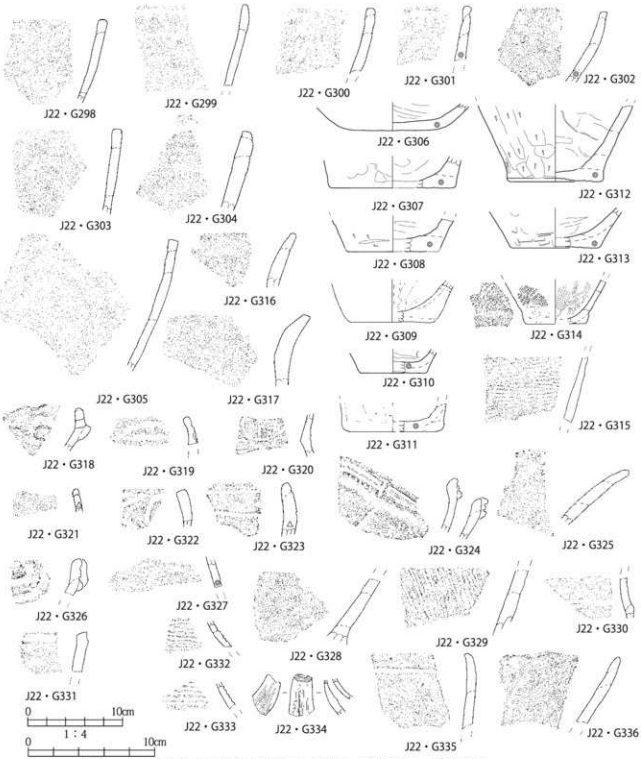


図 122　22 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影 (11)

22 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
22 住								1	1	11	2			7		23		3
	4055							40	30	230	60			200		380		140
S39W15				2	1			2	3	7	3	3	4	34	3	79	5	37
(22･40 住)	21370			80	30			30	20	90	20	100	30	1180	60	1460	40	1610
S39W18									1	6		2	9	27	5	82	2	28
(22 住)	19335								30	80		20	110	820	60	1180	10	1730
S42W15										1			6	61	4	105	16	36
(22･40 住)	31985									10			60	1330	60	2470	240	3480
S42W18									1	2	2	3	1	68	2	81	5	48
(22 住)	26910								10	20	30	60	10	3430	20	2540	40	2970

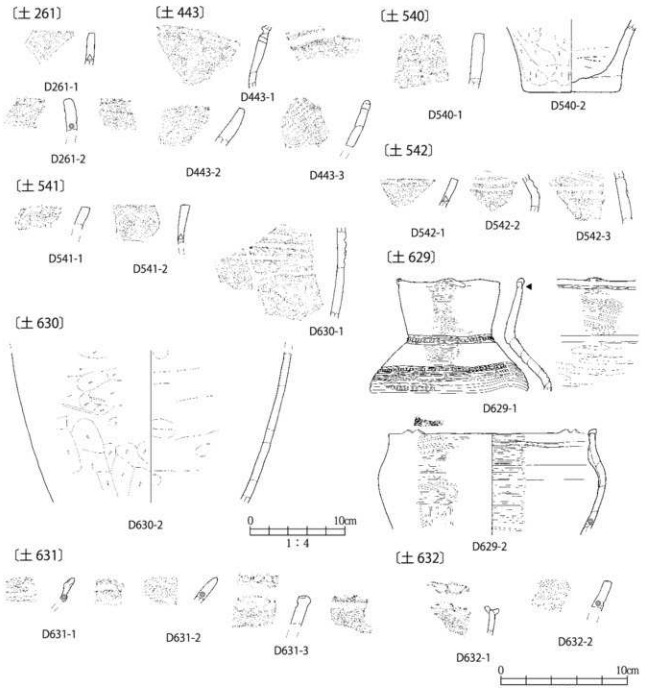


図 123　22 号住居関連土坑出土土器実測図・拓影

床下出土のうち、J21-1 ～ J21-3 の 3 点は加曽利 E 式末～称名寺 1 式と思われる。J21-4 ～ J21-7 の 4 点は不明瞭だが晩期前半あたりだろうか。J21-8 ～ J21-17 の 10 点は佐野 2 式に属し、破片も大きい。佐野式より古い土器は、住居に先行する包含層由来の混入品と理解してよいだろう。P7 は記録漏れで図中のどのピットか特定できないが、細片 5 点が出土している。中期～晩期まで含むが、佐野式は見当たらないので、全点混入品ではなかろうか。

床面出土の J21-24 と J21-26 は無文粗製深鉢で、佐野式の技法に従っていると見てよいだろう。J21-25 は大洞系の鉢で、口縁部には単純な圧痕が連続する。大洞 C1 よりは C2 式に関わるのではなかろうか。

住居埋土出土土器のうち J21-27 ～ J21-36 は佐野 2a ～ 2b 式に属する。無文粗製土器 J21-37 ～ J21-42、J21-46 ～ J21-60 の大半は佐野式の技法に従っており、隆帯文の技法に近い J21-43 ～ J21-45 も胎土には多量の石英を含んでいるので、佐野式段階の所産の可能性がある。J21-67 ～ J21-71 は佐野 1 式かと思われる。J21-61 ～ J21-66 は大洞系の小形精製器種で、大洞 C1 式～ C2 式に関わりそうだ。J21-72 ～ J21-92 は中期末から晩期前葉に属するが、いずれも破片は小さく、先行する包含層に由来する土器だろう。耳飾も 2 点あるが、後期の産だ。

床下出土品を含め、先行する時期の土器は混入品として排除できそうなので、21 号住居は主体を占める佐野 2 式に属すると判断する。構造から見て住居とは断定しきれないが、それに準ずる扱いをしておく。周辺グリッド出土の佐野 2 式土器を、参考に図示した。なお、J21･G1 の縮尺は 1:2 である。

(18)　22 号住居　［図 110 ～ 123、写真図版 21］【佐野 2 式】

発掘調査段階では、S42W15 グリッドを中心にして、S39W15 ～ S42W18 の 4 グリッドにかけて位置する住居であると判断した。第Ⅳ層上面で、炉縁石を検出し、周囲を精査して東辺の掘り方を平面的に検出した。硬化した床面はなかったが、図中に一点鎖線で示した範囲に、薄い土層が貼床状に広がっていた。その広がりの周辺で小規模なピット (P1 ～ P9) を検出し、住居の施設と考えて、その辺りまでを住居の範囲と推定した。この時点での住居範囲は南北 3.5m、東西 3.5m 程度だったことになる。また、その推定範囲を囲むように並ぶ土坑多数も検出した。住居内の調査に着手したところで、新たな炉縁石を発見し、22 号住居の下に別の住居が存在することを把握、精査して 40 号住居の掘り方の一部を検出した。炉のレベル差が把握でき、22 号住居は 40 号住居の埋土の上に乗る。

遺物の整理作業の中で、22 号住居が位置する S42W15 グリッドと隣接する S39W15 以下の 3 グリッドでは、佐野 1 式～ 2 式が圧倒的多数を占め、破片も大きく、包含層としては大変に純度が高いことが判明した。それは時期別個体数・重量表に示した通りで、佐野式が卓越する範囲は 22 号住居の当初推定範囲を超えて広がっており、22 号住居はもっと広かった可能性が高いと考えるに至った。22 号住居を取り巻くように位置する土坑 261、262、540、542、590、629、630、631 等も、22 号住居の施設の可能性があることになる。

以上のように判断を変更したが、遺構の記録に改訂の余地は無いので、22 号住居当初推定範囲と周辺の土坑をそのまま図示した。住居の施設としては、炉とピットがある。炉は直径 100cm、深さ 20cm ほどの掘り方の底面に人頭大～拳大の礫 9 個を配置して縁石としている。北東縁辺は縁石が失われていたが、残った縁石はすべて被熱で風化が進んでいた。炉内にはわずかに焼土が残されていた。P1、P2、P6 はやや大きめで柱痕跡をもつ可能性もあり、P3 も 50cm ほどの深さがあって、これらは柱穴の可能性もある。一方、当初推定範囲を取り巻く土坑はいずれも規模が大きくて深く、これらが 22 号住居の施設だとすれば、エリ穴遺跡で標準的な柱穴だとは考えにくくなる。南辺以外に規模の大きな柱列を配置した住居、などという推定が許されるかどうか。

22 号住居出土として取り上げられた土器はわずかしかない。住居の時期決定に有意でそれなりにまとま

るのは炉内出土土器である。ピット内出土土器や施設以外からの出土土器は、破片が小さい上時間幅が大きく、まとまりがない。

炉内出土の J22-1、J22-2 は佐野 2 式だろう。J22-3 は工字文を持つ鉢、J22-4 ～ J22-6 は佐野 1b 式～佐野 2 式に多用される口縁部内面沈線をもつ深鉢、J22-7 ～ J22-12 は佐野式特有の胎土か技法を持つ無文粗製深鉢で、J22-1、J22-2 と整合的である。J22-13 は異系統の壷らしく、位置付け不明だ。残りの小破片 3 点 (J22-14 ～ J22-16) は晩期前葉以前で、混入品と見てよいだろう。炉内出土土器は佐野 2 式を中心にまとまる。

P1 出土の 3 点 (J22-17 ～ J22-19) は時期的特徴がつかめない。P2 出土の小破片のうち、J22-20 と J22-21 は口縁部が鋭く外屈する粗製深鉢で、佐野式に並行するだろう。それ以外 (J22-22 ～ J22-29) は後期もしくは時期不明である。P3 出土土器のうち、J22-30 は J22-20 の同類だが、J22-31 は晩期前葉、J22-32 は時期不明だ。P4 出土土器 (J22-33 ～ J22-39) は全て後期に属し、J22-39 は釣手土器の釣手部分だ。P7 出土土器 (J22-40 ～ J22-50) もほとんどが後期で、佐野式はない。ピット出土土器は小破片ばかりだが、佐野式は少なく、後期諸型式の方が多い。後期の包含層を切り込んで構築された住居・ピットだとすれば、後期の小破片の混入は不自然ではないだろう。施設以外から出土した土器のうち、J22-51 ～ J22-57 は佐野式に関わるが、J22-59 ～ J22-65 は後期以前に属する。耳飾も 2 点あり、1 点は晩期前葉だが、もう 1 点は佐野式に関わる可能性がある。

当初の判断を変更させた 4 つのグリッドの出土土器も図示したが、それらは佐野式後半の編年観確立に大きく寄与すると思われる。S39W15 グリッド出土の J22･G1 ～ J22･G30 と遮光器系土偶 1 点、S39W18 グリッド出土の J22･G73 ～ J22･G107、S42W15 グリッド出土の J22･G142 ～ J22･G208、S42W18 グリッド出土の J22･G241 ～ J22･G315 が佐野 2 式に関わることと、それ以外は混入品であることを指摘するにとどめ、佐野式の内容は第 4 分冊で報告する。また、22 号住居の施設の可能性が生じた土坑出土の、佐野式土器や無文土器も抽出して図示したが、土坑 629 出土土器 (D629-1 ～ D629-2) は 22 号住居より幾分新しい可能性があるかもしれない。なお、土坑には加曽利 B 式の破片が多いが、住居より下位にその時期の包含層等があり、それを切り込んで構築されたからなのだろう。

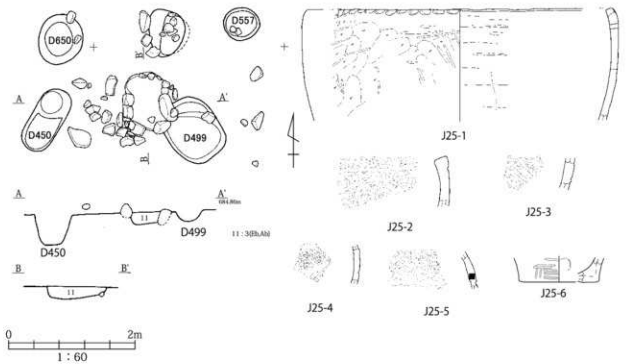
22 号住居周辺出土土器の純度の高さは、22 号住居廃絶後の窪地が佐野 2 式までの廃棄場として利用され、浮線文期以降には利用が途絶、攪乱も免れたからだと推測される。

(19) 25 号住居 [図 124、125、写真図版 21、22] 【加曽利 B2 式後半】

S42W24 グリッドに位置する炉を中心とする住居である。S39W24 ～ S42W27 の 4 グリッドにかけて存在した可能性がある。第Ⅳ層上面で炉縁石を検出し、精査したが掘り方は発見できず、炉が土坑 499 を切ることだけを確認した。床らしい硬化面ははっきりせず、住居の範囲は推定できなかった。炉は南北 90cm、東西 60cm、深さ 20cm ほどの掘り方の縁辺に円礫を並べた石囲炉で、炉縁石 5 個が残存し、北辺の縁石は失われていた。東辺の縁石は被熱で風化が著しく、炉底面も被熱で赤化していた。南西側には拳大の礫がレベルをそろえて配置されており、敷石住居の系譜を引くのかもしれない。25 号住居帰属として取り上げられ、図示できた土器は、炉内出土の 6 点に過ぎない。

唯一やや大きめの破片 J25-1 は、口縁部外面側に圧痕列を加えた砲弾形の無文粗製土器である。口縁部に圧痕付の隆帯を巡らせた西関東の粗製土器の系譜だが、中部高地にも類例が多く、その変遷の末期、加曽利 B2 式後半以降に位置づくだろう。J25-2、J25-3 も加曽利 B2 式で J25-1 に整合的だ。J25-5 は擬似縄文をもつので東海系譜の蜆塚 K2 式かと思われ、若干後出的ではなかろうか。J25-6 は朝顔形の精製深鉢底部で、加曽利 B1 式以前だろう。J25-4 は細片で詳細不明だ。いささか貧弱ではあるが、J25-1 と J25-2、J25-3 を

25 号住居



25 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期						晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加Ｅ	不明	底部	称名	堀内	加Ｂ	上段	中Ｋ	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
25 住										2								2
	980									640								80
S39W24				2					3	31	6	2	9	3	7	67	3	50
(25･26･28 住)	20825			90					30	770	190	70	170	40	240	2210	30	1690
S39W27				1		1				58	5	9	14	9		103	9	77
(25 住)	27410			70		30				1620	100	250	280	110		1610	70	2810
S42W24							1			57	18	7	11	1	2	51	1	41
(25 住)	20475						80			1670	290	260	280	20	60	540	10	1510
S42W27									1	41	14	3	6	14	3	47	3	41
(25 住)	19325								40	1180	310	40	100	260	60	1050	60	1530

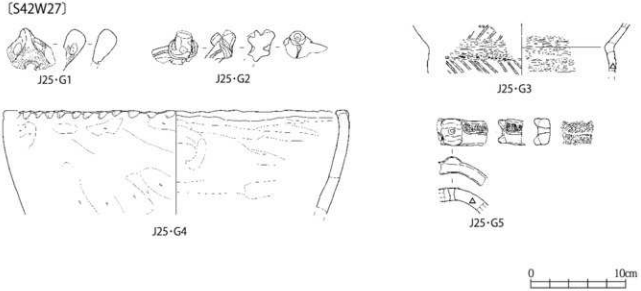


図 124　25 号住居実測図、出土土器実測図・拓影、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（1）

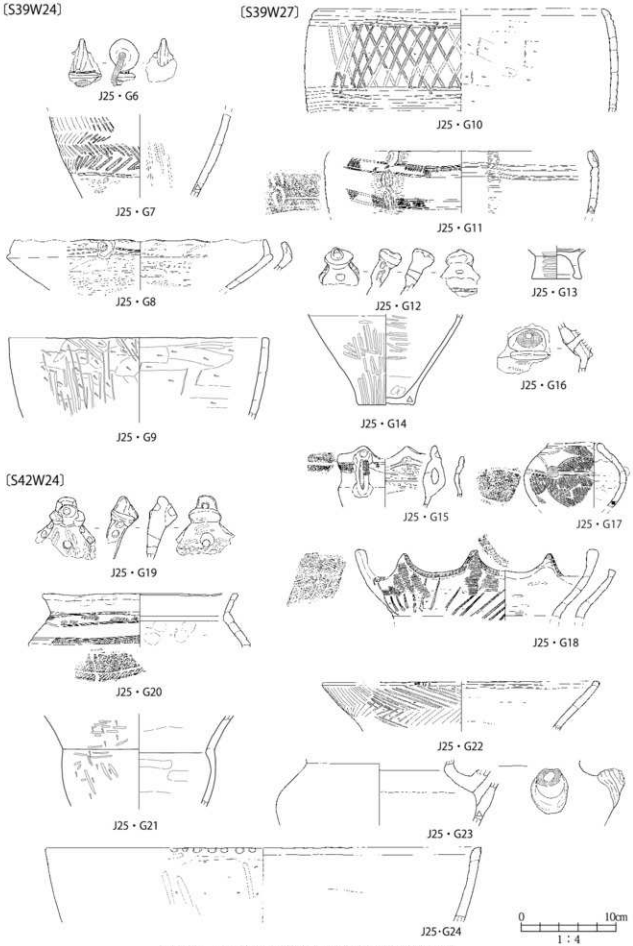
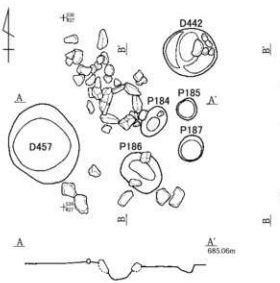
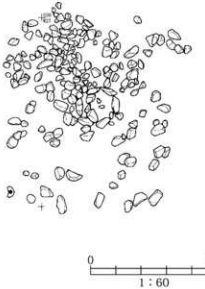


図 125　25 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図（2）

26 号住居



26 号住遺物出土状況



26 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量 g	中期						後期					晩期			後晩		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
26 住									1	4			1	6	3	14	1	4
	2050								10	90			20	1260	30	250	10	60
S33W24				2			1		10	8	3	1	1	4		31	5	25
(26 住)	10655			50			80		80	140	60	20	20	400		310	100	1890
S33W27									6	13	4	6	4	3	1	53	1	38
(26 住)	12095								90	260	50	120	80	680	30	920	10	1350
S36W24				1	1				3	23	2		31	42	2	190	20	97
(26･28 住)	43210			10	10				30	420	20		360	1120	40	3360	350	4570
S36W27				3					16	25	3	7	13	16	1	85	7	52
(26 住)	22670			160					290	530	40	120	290	300	10	1200	130	2350
S39W24				2					3	31	6	2	9	3	7	67	3	50
(25･26･28 住)	20825			90					30	770	190	70	170	40	240	2210	30	1690

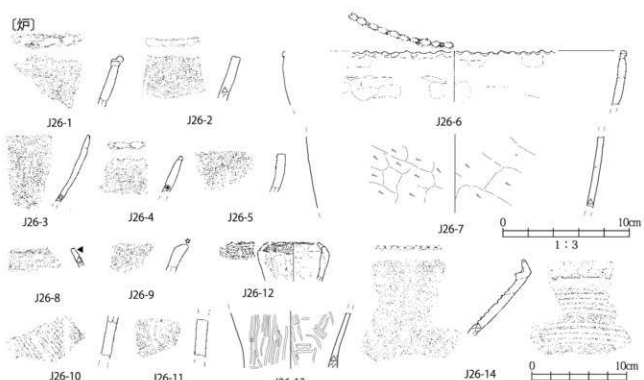


図 126　26 号住居実測図、出土土器実測図・拓影（1）

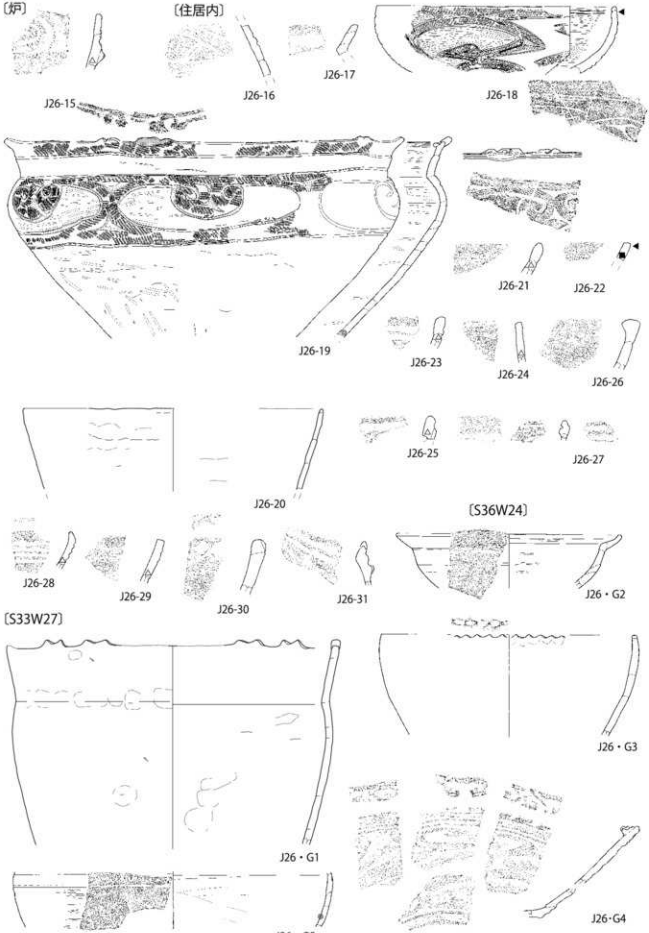


図 127　26 号住居出土土器実測図・拓影 (2) 関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影 (1)

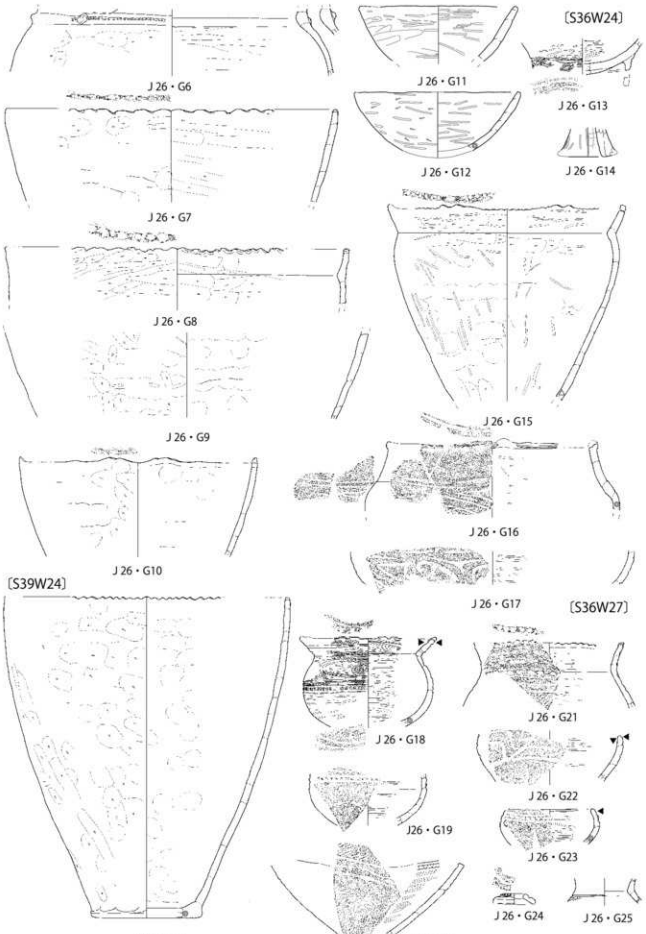


図 128　26 号住居関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図・拓影（2）

根拠に、25 号住居は加曽利 B2 式後半に帰属すると考える。

土器の時期別個体数・重量表を見れば、25 号住居周辺の 4 グリッド出土土器は加曽利 B 式が圧倒的多数を占める。発掘時には確認できなかったものの、炉と同レベルで床面の一部が残存していた可能性があると考えれば、この 4 グリッド出土の加曽利 B2 式は 25 号住居に帰属する可能性もあると推測し、実測可能な土器を抜き出して図示した。もちろん、25 号住居以外に由来する可能性も十分あるので、可能性の範疇を超えないと理解されたい。S39W24 グリッドは 28 号住居にも関わるので、J25・G6 ～ J25・G9 はそちらに由来する可能性もある。

(20) 26 号住居 [図 126 ～ 128、写真図版 22、46] 【佐野 1 式後半～佐野 2 式】

S36W24 グリッドに位置する炉のみ把握できた住居である。その範囲は不明だが、S33W24 ～ S36W27 の 4 グリッドに広がっていた可能性があろう。第Ⅳ層上面で石囲炉を検出したが、炉の縁辺以外では床の可能性がある硬化面は検出できず、壁の輪郭も発見できなかった。炉の周囲には土坑やピットが幾つかあり、26 号住居と重複するのは確実だが、前後関係は不明であった。炉は径 60cm、深さ 20cm ほど床を窪め、縁辺に人頭大以上の長めの円礫 6 個を円形に配置する石囲炉で、南西隅には縁石隙間の詰め物として、半割した拳大の円礫を差し込んでいる。縁石の一部は被熱で風化が進むが、炉内には焼土は残されていなかった。炉以外の施設は発見できなかったが、ひとつ重要な問題がある。それは S36W27 出土の人面付土版 [竹原学 1995] で、真ん中から二つに折られ、上下に重ねられて出土した。掘り方は見つからなかった。その位置は 26 号住居炉の中心から 150cm ほどしか離れておらず、レベルも 26 号住居床面より 10cm 上でしかなく、26 号住居の床面の範囲に十分入りうる。中部高地では類例の少ない遺物なので、時間的に整合するかどうかは慎重な検討を要するが、整合するなら 26 号住居内に置かれた遺物の可能性は十分あるだろう。最終結論は持ち越す。また、土版に隣接して配石 20 が存在する。小規模な配石で、土版と一連の施設の可能性もあり、26 号住居の一部だった可能性も残る。炉内出土土器が若干あり、加曽利 B1 式と佐野式に二分される。J26-6 はオサエ痕が卓越する隆帯文土器の技法だが、口縁部が外屈する可能性があり、口唇部連続圧痕も隆帯文土器とは別系譜なので、晩期中葉まで下がる可能性があるだろう。J26-7 は器壁がやや薄いが、内外面ともケズリが卓越するので佐野式の技法だ。J26-1 は雲形文の変形らしく、J26-2 の口唇部の沈線は佐野 2 式に類例を見、胎土にガラス質の石英を多量に含む J26-3 なども佐野式に関わり、詳細不明の J26-4、J26-5、J26-8、J26-9 も晩期前葉～中葉だろう。一方 J26-12 ～ J26-14 は加曽利 B1 式だ。そのほか、加曽利 E 式 (J26-10) や中ノ沢 K 式 (J26-15) も含まれる。

炉及びその縁辺の床面の可能性がある暗褐色土面しか把握できなかったので、26 号住居出土として取り上げられた土器は、床面出土だと考えられる。その中で断然目立つのは半完形品 J26-19 と大形破片 J26-18 で、ともに大洞 C1 式系譜の浅鉢だろう。次に大きい無文粗製深鉢 J26-20 は、隆帯文土器に共伴しそうなタイプなので、J26-19 よりは若干古そうだ。それ以外は小破片だが、J26-16 は肩部文様帯に櫛状入組文をもつ深鉢で、J26-19 とよく似た器形・文様帯構成をとるだろう。加曽利 B 式は小破片が若干あるだけだ。

炉内からは加曽利 B1 式がある程度出土したものの、全体的には佐野式やそれと同時期の土器が主体を占める。26 号住居は佐野 1 式後半～佐野 2 式に属すると考えられ、先行する加曽利 B1 式土器などは混入品と考えてよいだろう。なお、耳飾も 2 点出土したが、無文で特徴に乏しく、26 号住居との整合性はわからない。

26 号住居周辺グリッド出土土器の時期別個体数・重量表では、3 グリッドで佐野 1 式～ 2 式が圧倒的ではないものの最多の数値を示す。周辺グリッド出土の佐野式関連の土器は、26 号住居に付随する可能性があると見て、それらも図示した。小形精製土器は J26・G 19、J26・G20、J26・G21 ～ J26・G23 などに加え

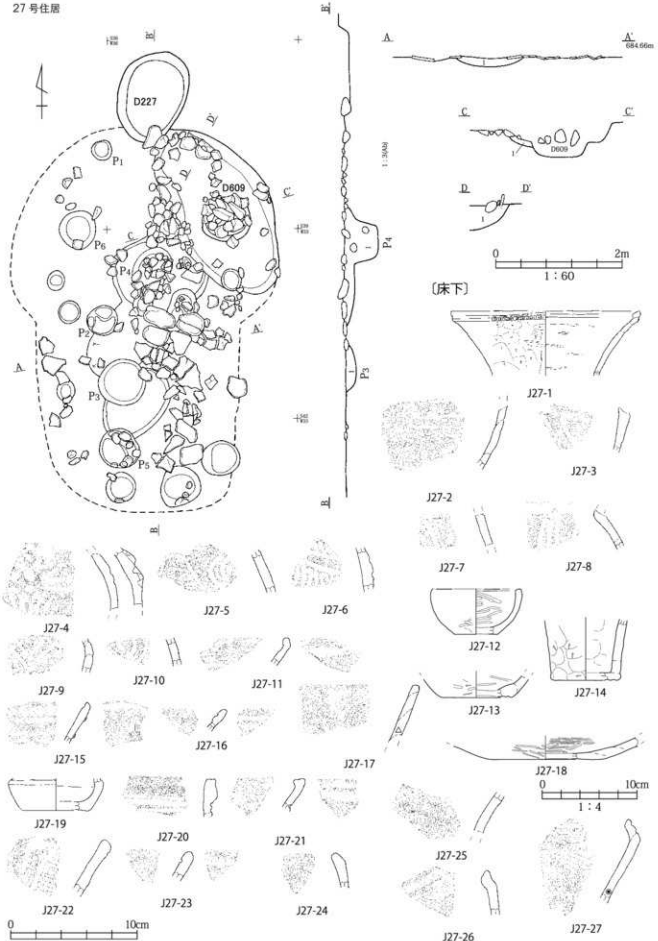


図 129　27 号住居実測図、出土土器実測図・拓影 (1)

27 号住居・関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器の時期別個体数（上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g）

地点	重量	中期						後期					晩期			後晩		
	g	藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中Ⅰ	前葉	中葉	浮線	無文	不明	底部
27 住				2				2	14	7	8	2	15	3		38	3	26
	9665			40				60	190	50	100	20	230	20		550	10	530
S36W33			1		1	1		1	6	9	2	1	10	2		34	2	16
(27 住)	7050		20		20	20		20	80	120	80	20	150	30		970	10	940
S36W36			2				1									3		3
(27 住)	1880		10				20									370		100
S39W33							1		8	6	1	3	9	1	1	30	5	12
(27 住)	4910						60		70	170	40	100	140	10	20	890	90	370
S39W36									2				1					3
(27 住)	975								10				10					40
S42W33								1	3	3	1	5	7	1		17	7	19
(27 住)	5095							20	20	40	20	150	170	20		270	60	930
S42W36									5	2	3	2	4			17	1	9
(27 住)	3445								70	20	40	100	60			160	10	170

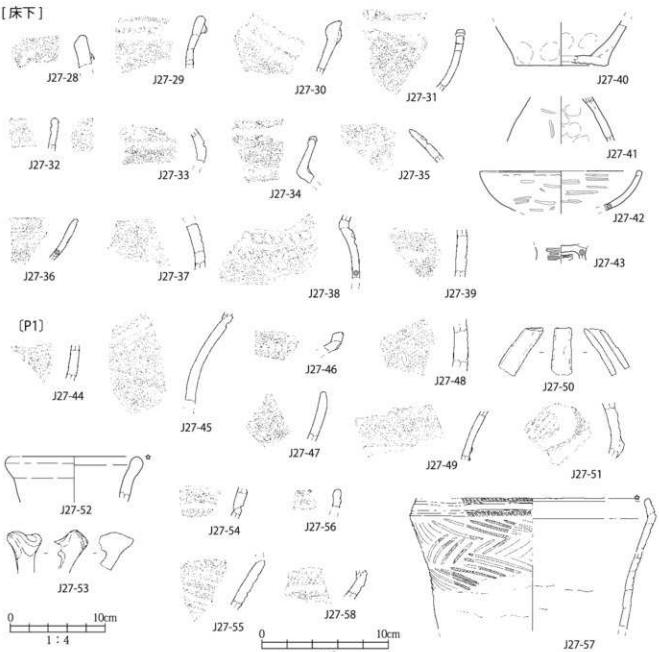


図 130　27 号住居出土土器・拓影（2）

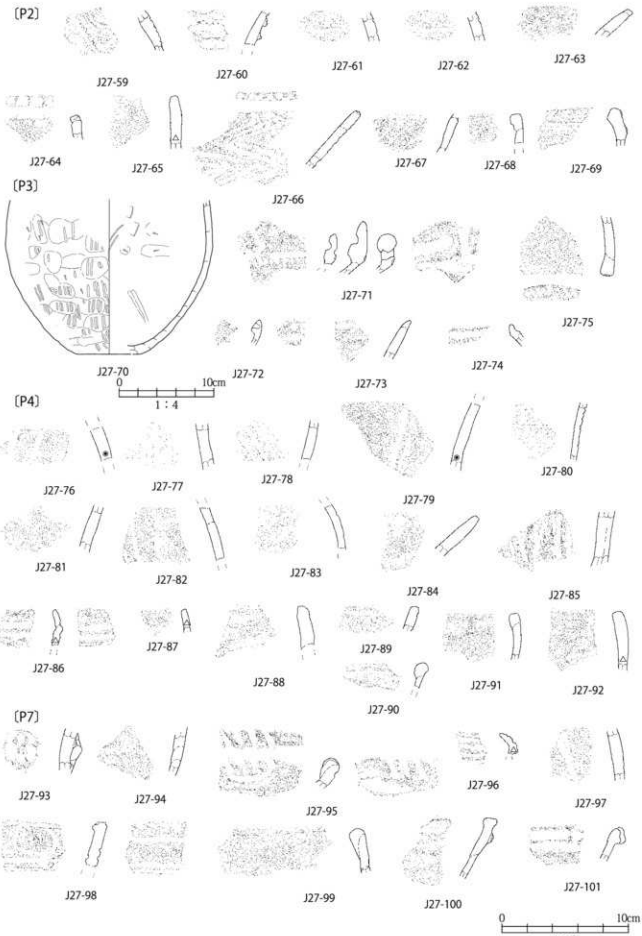


図 131　27 号住居出土土器実測図・拓影（3）

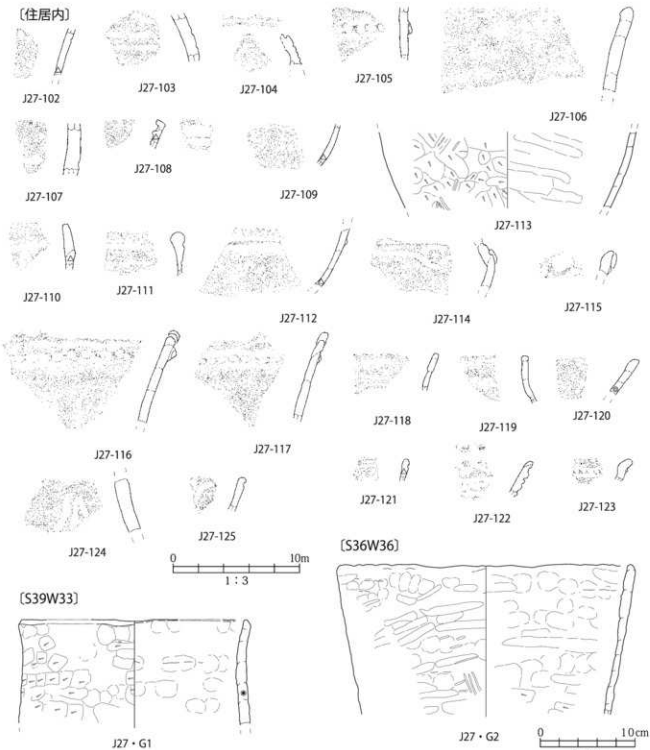


図 132　27 号住居出土土器実測図・拓影（4）、関連ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土土器実測図

て、J26・G16 ～ J26・G18 など大洞 C1 式系譜の要素を取り入れた土器が目立つ。中でも J26・G4 は大洞 C1 式にかなり忠実に造られている。無文粗製深鉢では、整形技法は隆帯文タイプであるにもかかわらず口縁が外屈し、口唇部に隆帯文系譜かと思われる小突起や隆帯文系とは言い難い圧痕を施す J26・G1、J26・G15 が目を引く。また J26・G26 も器形・整形技法は隆帯文タイプだが、口唇部は圧痕で、胎土は石英を多量に含む。これらは伝統的な隆帯文土器を基盤としつつも新たな要素を取り入れており、隆帯文土器からの脱却を示すのではなかろうか。26 号住居の無文粗製土器とほぼ一致する様相だと考える。なお、26 号住居周辺グリッドに加曽利 B 式なども多いのは、先行する時期の包含層等の上に佐野式期の遺構が構築されたからなのだろう。周辺グリッドからは土偶が 4 点出土しているが、いずれも晩期中葉よりは古そうだ。

(21) 27 号住居 ［図 129 ～ 132、写真図版 23］【堀ノ内式 1 式～ 2 式】

S36W33 ～ S42W36 の 6 グリッドにかけて位置する柄鏡形敷石住居である。第Ⅳ層上面で上面をそろえて敷き詰められた平石のまとまりを発見、敷石住居の床面を検出した。周囲を精査しても壁や掘り方は発見できなかった。重複する可能性のある位置の土坑 226、土坑 227 が切られた形跡が無いことから、27 号住居はこの 2 基に切られると判断した。また、住居北東側に集中する礫は、土坑 609 としてまとまったので、27 号住居はこれにも切られると判断した。住居の範囲は、人頭大の円礫 6 個ほどが東西方向に並び、その一部は立てられていたので、これを住居の北辺と推定した。また、石敷き下部の調査で幾つかのピットが検出され、石敷き範囲の南端に並ぶ 4 基のピットが出入り口施設の端である可能性を認めて、住居南限を推定した。結果、南北方向を主軸とする柄鏡形敷石住居であると考え、南北 6.0m 程度、主体部の東西は 4.0m 以上、出入り口部の幅（東西）2.0m 以上かと推定した。床材は径 30cm 程度で平坦面をもつ円礫が用いられる。床面では施設が確認できず、床下の調査でピットを発見したが、炉は発見できなかった。住居中央の P4 は径 170cm、深さ 60cm と大規模で礫を含む。位置や規模からして、石囲炉が破壊された痕跡の可能性があろう。そのほかの径の大きなピットは浅く、残存する石敷きからは外れる。出入り口施設と推定した南辺のピット 4 基は、径 60cm、深さ 40 ～ 60cm で十分な深さがある。

住居形態からして堀ノ内式に属すると考える。床下出土の土器は堀ノ内 1 式が最多であること、埋土からは堀ノ内 1 式～ 2 式が出土していること、プロポーションから見て堀ノ内式だと思われる半完形品 J27-70 が P3 から出土していることなどを根拠に、堀ノ内 1 式期に構築した住居を堀ノ内 2 式期に修築して継続使用した、といった図式が復元できれば合理的なのだが、土器の出土状況は甚だ悪く、説得力が足りない。

まず、全体に破片が小さく、J27-70 以外は小破片を図化したに過ぎない。次に、床下出土で 2 番目に多いのは晩期初頭の隆帯文土器で、上ノ段式や佐野式も含まれている。P1、P2、P4、P7 出土土器も大同小異で、堀ノ内式とそれ以降の土器が相半ばする。J27-70 が出土した P3 だけが、唯一堀ノ内式限定である。埋土出土土器のうち堀ノ内式は小破片で、隆帯文土器等が目立つ。また、後期後葉以降の耳飾も 5 点混入している。

床下、ピットとも土器の半分以上は堀ノ内式期に後続するとなれば、床の石敷き残存部分以外は撹乱を受けたと考えざるを得ず、ピットも住居に帰属する施設ではなく、後代の土坑やピットが含まれる可能性がある。P3 も石敷きにかかりず、住居施設と断ずるのに不安を残す。平石などは再利用のため剥ぎ取られ易いはずで、撹乱行為はむしろ縄文時代に多かったのではなかろうか。27 号住居は堀ノ内式期に帰属するのはよいとして、出土遺物には撹乱に伴う混入品が多く、一括資料としては使えない。